

---

# 真ネギま マギカZ

沈没船長

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真ネギま マギカZ

### 【Nコード】

N4745X

### 【作者名】

沈没船長

### 【あらすじ】

主人公が目が覚めると目の前には金色のオッサンが…  
そこから始まるネギまの物語！

貰った力はママさんの魔法とマジンガーシリーズの力、ブロッケン伯爵のボディ、そして機械獣軍団！

現在、麻帆良学園編！

主人公の力は紅き翼くらいです。

初投稿の駄作ですがよろしくお願ひします

## プロローグ

「やあ、起きたか」

目が覚めてみるとそこは何もない場所で目の前には全身金色の鎧を着た変なオッサンがいた。

「えっ……と？ココはいつたい、そしてあなたは？？」

「ふむ、混乱しているようだね。まあ、無理もないな。

端的に言おうココは神の座そして君には今からある世界に私が用意した体に転生してもらおう。そのために君をココに呼び出したのだ。」  
「えっ！これっていわゆる転生物ってことか？！てことはこのオッサンに殺されてそのお詫びってことか。」

「何か勘違いしているようだが、君を私は殺してはいないぞ。そもそも管轄が違うからな。」

「え？じゃあ何故、ワタシはここにいますか？？」

「君が選ばれたのは、たまたま私の目に留まって見込みがありそうだと思うからだ。」

「選ばれた？何か生前に神に選ばれるようなことってしてたっけ？ごくごく普通の日本人としてしか生きてなかったはずだけどなあ……」

「選んだといってもそこまで厳選したものでもない、目に留まったほとんどがそっちだな理由は」

「大雑把な……それともそんなものかな神にとっては。でもなんで転生なんてさせるんだ？」

「さて、何故転生させるかについてなのだが言ってしまうえば私がやり残した事を達成してもらったためだ。」

「え！それってあなたの尻拭いをしろってことか！！」

「やば……思わず口に出してしまった。でも、神が遣り残した事を達成って人間にできることなのか……って思ったからしょうがないじゃないか！」

「できることなら私が決着をつけたいのだが、もはやその世界に神

が光臨し力を振るうことはできないからな……。無論ただ転生させるのではなく私の分体と言つてもいいような体を用意したし、いくらカサポートはするつもりだ。」

むう、それなら良いかなあ。転生者無双つてのもできそうだしねw もうそんな年でもなかったけど男子たるもの何時までも少年の心はあるからね！

「もっとも、君がその力を振るうに価するかは見極める必要があるから最初から強力な体をあげるわけにはいかないがね。」

ぐ……、そんなに甘くはないか。あれ？でも、その言い方だと体がいくつがあるような？？

「じゃあ、転生先はどこですか？あと、遣り残したことで……」

「転生先は君の世界で言う”ネギま”の世界だ。もっとも厳密には違うがね。それと遣り残したことは、言ってみれば魔王退治かね。そつちは君が真にできると確信したときにでも言おう。」

”ネギま”かあ……。漫画は途中までは読んでいたけどどうだったかなあ。

それより魔王退治って……。それっぽいのがいたはずだからそれをたおせば良いのか？

「さて、これ以上は転生した世界に言つて自分で確認してくれ。あまり長く話していてもしょうがないからな」

む、いよいよ転生かあ、どんな体なんだろうなあ。

それにしてもこのオッサン誰だ？見たことが有る気がするんだけどこのオッサンも漫画とかでいたのか……。金色の鎧つていやアイツを思い出すけど、オッサンじゃないし神でもないしそもそも嫌ってたはずだし。

聞いてみるか本人がいることだし。……。怒つて天罰つて事はないよな？

「では、あの世界へ君をとばそう。最後に何か質問はあるかな？」  
ちようどいい、聞こう！ちよつと怖いけど……

「では、あなたの名前は？失礼なのは承知してますが思い出せなく

て」  
質問を終えたとたん身体が光に包まれた。おそろく転生するん  
だろう。  
そして、にやりと笑っていつこう答えてくれない神様。正直かなり  
怖いんですけど。  
そして、顔まで光に包まれたときやっと答えが聞こえた。

「ゼウスだ」

全身金色の鎧に”ゼウス”……もしかして、マジンガーに出てきた  
ゼウスか！！  
何故ネギまでマジンガーのキャラが！  
疑問は解決したが新たな疑問と不安が出てきたところで私の意識は  
途切れた。

## プロローグ（後書き）

初投稿です。色々と問題が多いですが完結できるようにがんばりま  
す><

### 次回予告

「転生した主人公、そして神が与えたその体は!!！」

次回 真ネギま マギカZ

”ファンの人ごめんなさい”

乞うご期待！

この次回予告は今後続けるかは未定デスw

## ファンの人ごめんなさい(前書き)

タイトルの理由は内容を読んでもわかれますw

あと、”彼女”のファンには不快に思う表現が入ってしまいましたが  
ご了承を><

それとまどマギのネタバレを含みますのでご注意を^^;

## ファンの人ごめんなさい

目が覚めてみるとそこは、どこかの遺跡の様な部屋だった。壁石造りで手入れがされているような形跡はなかった、唯一火でも電気でもない不思議な光を発する光球が浮いていて周囲を明るく照らしていた。

「どうやら、無事に転生できたようね。でも、まさかあのゼウスだったなんて、これからどうなるのかしら？」

ほっとしてつぶやいて自分の口調がおかしなことに気がついた。私は生前はごく普通の日本男子だった、間違ってもオネイではない。どうという事だと、手を口に持っていていこうとして何かにぶつかった。

何かと思いい下を見てみると………そこには立派な胸があった（ちなみに服は着ていました）、大混乱におちいって色々確認（なにを？色々だよ！）していると側の机のようになっている場所に一枚の淡い光を放っている紙に気がついた。

手にとって見ると文字は見たことの無いものであったが内容は理解できるといった不思議なものであった。

<これを見ているという事は、無事に転生できたようだな。今頃さぞ驚いているだろう。>

ええ、これ以上ないってほど驚いています。

<その体だがある世界でみつけて、回収したものだ。ちょうど分体に使える素体が欲しかったので利用したのだ。口調などは身体が補正してくれるから問題ないぞ>

でもなんで、男の私に女の体を…補正するなら性別を変えてほしかった。あのゼウスだから兜甲児か、剣鉄也と思ったんだけどなあ。

<なぜ、その体を選んだかについてなんだがな。その世界とその平行世界をのぞいてたときに彼女を不憫に思ってしまったな。>

神様でもそう思うことってあるんだなあ。あ、でもあのゼウスなら当然なのかな、まさにスーパー系の主人公って性格だったし。神話



のほうは怪しいけどね……

<事故に遭った時にろくでもない者に引っかけたってな、多くの世界で戦って死ぬなどしていたのだが。>

ふむ、世の中ろくでもないのがいるなあ

<そこは問題ない、本人も納得していたからな。>

あ、良いんだ……。じゃあ、なにが？

<問題は人々のためにと戦っていた彼女の思いを踏みにじることを戦いに引き込んだ者にされていたことなのだ！>

なるほど、彼が怒りそうなことだなあ、でもなんでそれとこの身体がつながるんだ？

<それ自体はその世界で新たに生まれた神が解決してくれたことなのだが、私自身がどうにも納得がいかなくてな。せめて身体だけでもとおもい、その世界のうち一つからその者の体を回収して改造を施したわけだ。>

それって自己満足な気も……、それとも何か思うところでもあつてせめてものってこのなのか。で、この身体って元の持ち主は誰なんだ？とりあえず戦闘はできるようだけど。鏡が無いからわからないからなあ。

<さて、その身体の元の持ち主の名前だが名を「バマミ」という。これからはその名を名のるといい、彼女の無念を少しでも晴らしてやってくれ。>

マミさんか！ああ、確かに悪いやつに引っかけたって真実知って打ちのめされちゃったなあ……。でもなんでマミさん？まあ、いいかそこは覗いてたのがあの世界なら誰になつたって女になつてるんだし。

<さて、君が使える能力だが彼女が使っていたものはすべて使えるぞ。同じ身体なのだからな。>

ふむふむ、って事はマスケット一斉斉射とかもできるのか。

<細かい能力は後で表示しよう>

今更だがこの紙、表示される文字が変わっていつてるそれでいて前

の内容も問題なく見れたりする。魔法版電子ブック？

<もつとも、これだけだと本当に倒してもらいたい者には力不足だろう。>

このゼウスの相手つてもしかして……”アイツ”？違ってくれていいるといいなあ……………

<そこで、改造と私の力を付与したのだ。光子力といえばわかるかな？>

光子力はいいとして改造？

<君にわかりやすくいうとマジンガー化したってことだ、鍛えれば成長していくようにしてあるぞ。今の力はZくらいを思ってくれるといい。>

おおお！嬉しいような、なんというか。これも詳しくは後でかな。でも、これってほぼチートじゃね？超合金Z系なら魔法なんてほとんど効かないだろうし。

<さらに私がそっちにいけないからサポート役も今造っている、またアーティファクトだったかな？そっちの世界で使えるモノも準備している。これらは君をこれから見極めたうえで順次与えよう。>

つまりサボらずしっかり修行しろってことか？  
<最後に大事なことを伝えよう、身体についてだ>  
ん？今までもそうだったんじゃない。マジンガー化してるならアレも撃てるんだろうし。

<その身体は損傷が酷くてな、君のためにもつと状態がいいものや傷を完全に治しても良かったのだが。あの世界はすでに書き換わってしまったからな、前の世界での彼女の無念を晴らすにはその身体しかなくまた傷を完全に癒すことは戦士として本人の了承無しにたくは無かったのだな。>

ん、やっぱり自分が戦士って事でいろいろ思うところがあったってことなのか。その割りに改造してたりすれけど……。でも、傷ってどんなのだ？SJが無事なら大概の傷どうにかなっただはずだし。

<その傷だが頭を両手で持ってくれ。ああ、紙は空間に貼り付ける



「さて、まずはココを出て魔法世界を見て回りましょう。いろいろ不安はあるけど楽しまなきゃ、もったいないのもね。まずは町を探さない」と

と決意表明もこめてつぶやき私は外に向かって歩き出した。

## ファンの人ごめんなさい(後書き)

マミさんファンの皆様ごめんなさい！私は彼女は嫌いじゃありません。むしろ好きなほうです。じゃあ何故こんなことになったかというところ……、自分でもわかりませんw

あるときふと思いついて構想を練ってしまったってwこの作品は基本ギャグとダイナミックっぽい政治のあれやこれやを置いておく感じで進めたいと思います。なので後々原作とはまったく違うことになると思います。

ちなみに時系列は大戦前です。

喋りと心の声の口調が一致してませんが、彼女(私がw)なれてないで追々なれていくと思います。

さあて、ノリで始めたけどどうなるか。

### 次回予告

「魔法世界に一步踏み出した主人公改めバミ、彼女は早速力試しをしてみることにしたその結果は……」

次回 真ネギま マギ力Z

” 現実には甘くない”  
がんばります

## 設定・能力（前書き）

主人公の能力です

あくまでも現在ののって事なので今後修行で変わっていきます

## 設定・能力

バمامミ（主人公）

今作の主人公、前世の名前は考えてないので山田太郎とでもw  
ゼウスが3話のمامミさんの身体を回収改造を施した、ちなみにSJ  
も再現、皮膚強度も超合金Z系の同じくらいの防御力です。でも、  
触ると普通に暖かくぷにぷにの不思議肌w

保有能力

まどマギでمامミさんが使っていた魔法

・マスケット召喚

どこからともかくマスケットを召喚する。単発マスケットであれば  
どんなもののようなサイズ、材質、形状でも可能だが指定しないと  
無意識下で思っているサイズ、材質、形状で召喚される。（現在は  
銃身が鉄 弾が球状の鉛 サイズは普通）

・伸縮自在のリボン

伸縮自在で相手の動きを封じてよし、クッション・足場にしてよし  
と使い勝手は抜群。

（現在はあまり使いこなせてない）

Zの能力

ミサイル系以外は使えます。

真仕様

人間とは違った武器だらけなのでかなり戸惑っている

ブロッケン伯爵の能力w

頭部と胴体の分離飛行

胴体だけの分身（増産？）

## 衣装

マミさんの魔法少女時の衣装とブロッケンの独軍コス进行魔法で呼び出して着ることが可能w

イメージとしてパクティオーのコスプレ機能とだいたい同じ。

説明が無いときはマミさんの衣装と想ってくれれば良いです。転生したときもそれを着てます。

汚れ、破損を自動で修復する洗濯・修理要らずの便利服w



設定・能力（後書き）

以上が現在の能力です

## 現実には甘くない

あの場所を出て、それなりの月日がたち今私はある都市にいます。え？飛ばしすぎ？今からなにがあったのか話しますって。

その間私は、自分の身体の性能を試してみたりしました。それで分かったことはこの身体はなかなか高性能って事です。マジンガーとしてのパワーや装甲、マミさんの使い勝手のいい魔法のおかげもあって、そこらの野党や魔獣より十分強かったんですから。

（野党が放ってきた魔法の矢や犬くらいの魔獣の噛み付きをくらってもびくともしなかつたものね。マジンガーに備わっている武装も強力だったし、マミさんの魔法も使い勝手が良かったなあ）

（口から出すから気分的にちよつと使いにくいのよねえ。でも、酸無しの風も起こせるのはいい発見だったわね。）

相手を凍らせる低温ビーム 冷凍光線

（まさか髪の毛の先端から出るなんて……）

マジンガーといえばこれやっぱり付いていた ロケットパンチ

（使いやすいし、いろいろできそうではあるんだけど。やっぱり気分的に、ね。自分の腕が飛んでいくっていうのは、慣れておかないと。）

超高温の熱戦を放つ プレストファイヤー

（リボンが自動的にあの形になって発射されたのは驚いたわね。）

高密度のエネルギーを放ち敵を消し去る。 光子カビーム

（ものすごい威力だったけど、何で真仕様？）  
といった具合にマジンガーの武装はどれも高威力だった事がわかったの。

あと、リボンは想像通りの物だったけどマスケット召喚のほうは銃や銃弾の材質、大きさとかを指定して呼び出すとそれとおりのものが出てくるのには驚いたなあ。超合金Zの弾ってすごかったわね。

(でも、このときのもう少し冷静に能力の確認と慎重な行動を心がけてればあんな事にはならなかったのに…)

そう、魔法の矢をもつともしない防御力と高い攻撃力を確認したことで私は調子に乗ってしまったのである。

そして、強い竜が近くにいると聞き炎くらいなら大丈夫だろうと根拠の無い自身を元に単身、その竜の巣に赴いてしまった。

そうまさに、「もう何も怖くない」状態で。

そこで現実を知ったのだけど、それにまさか彼に会えるなんてね

-----

(数ヶ月前)

皆さんお元気でしょうか？先日転生というものを経験したバマミです。

私は今、とある山の竜の巣というところに竜討伐のためにいます。

そして現在その竜と戦闘中なのですが、お腹に大穴が開き血が噴出してるといふ大ピンチな状態です。痛みは不思議なほど無いのですが、ヤバイ事には変わりありません。

何故こうなったかというともう話した気もするのですが、チート能力ゲットでヒヤッホイ！と思って突撃してこうなったわけなのです。よく考えればマジンガーも皇帝以外は結構ぼろぼろになったりしてましたねえ。並大抵の攻撃は効かないけど並以上は効くってことなのね。避けようにも前世でスポーツマンってわけでもなかったのもともにくらってしまい現在の状況です。

攻撃力はこの竜にも十分聞きそうなのですが……、当たりません。考えてみれば当然ですよ、そんな何かを狙って撃つなんて経験ないです。

ならば数うちや当たるとマスケットを大量召喚してみたのですが効きません。

後で気づいた事なのですがこのとき私は超合金Z製の弾丸を放っていたつもりなんです。が混乱していて材質を指定してなく、無意識下で銃の弾といえば鉛って思っていたので鉛の玉を発射していたようです。効く訳がありません。

現実には甘くないって事ですね。

などと現実逃避をしているうちに竜がものすごい力をためています。

(死んだかなあ……、まさかもう終わりだなんて)

と諦めかけたとき

「ラカン！インパクトオー……！！」

大音声の掛け声とすさまじい力がこもった衝撃が竜を襲い吹き飛ばしてしまいました。

目の前で起こったことに啞然としています。

「おい！譲ちゃん大丈夫か！って、そんな状態じゃ大丈夫じゃねえか。」

「あの……、えっと……」

「言いてえ事や聞きててえことはわんさかあるが、今は逃げるぞ。」

譲ちゃんを庇いながらだとちょっと骨がおれるからな。」

と言って混乱している私を担ぎ上げて一目散に離脱していった。

しばらく走って竜の巢のあった山から十分離れたところで男は私をおろしました。

「さてと、何故あんな事をしていたか聞きてえが、まずは傷をふさがないとな。どれ見せてみる。」

と言つて、おなかを覗き込んできたのですが。

「ん？傷が無い？？どういうことだ、確かにどつてつぱらに大穴が開いていたはずなんだが。それに譲ちゃんもあんな傷を負ってた割りに痛がつてねえな。」

「え？あ、本当ですね。痛みについてもほとんど感じなかったです

ね。」

あの時は混乱していたからと思っただけど、確かに痛みでどうにかなるって感覚じゃなかったなあ。それになんて傷がもう癒えてるんだ???

「ふむ、譲ちゃんみたいなのベツピンに傷がのこらねえのは良い事だがその様子だと自分でも分かってないみたいだな。なんで、あんなところにいたのかも気になるし話してみる。俺様が近くを通らなかつたら死んでたぞ。」

少し迷ったが助けてもらった恩もあるのだし転生のところをぼかして、力を貰ったのだが調子に乗って突撃してしまったことなどを話した。

「なるほどなるほど、つまり譲ちゃんはバカって事か！はあはははははは！そんな単純なやつがいるんだなあw」

「な！」

確かにそうだけでももう少し言い方ってものがあるきが……

「はははははは……ひい腹いてえ。ほれ、ちよつと俺様にパンチしてみろ。」

「え”、そんな趣味の人なんですか……」

「ちげえよ！譲ちゃんがどれくらいできるのかはかってやるんだよ。」

「え……でも」

「譲ちゃんの細腕でどうこう出来るほど俺様は弱くねえって、それに視るより感じるほうが良く判るってもんよ。」

「そ、それじゃあ。はあ！」

とできるだけ力強く打ち込んでみた。アレだけの攻撃を放てるんだしたぶん大丈夫だよ。それに確か原作キャラの気がするし。

ドゴン！！ととても少女が放ち人体に当たったとは思えない音が周囲に響いた。

「ふむ、なるほど。あの竜に挑もって気が起きるくらい舞い上がるだけの力はあるって事か。………げふう！」

と、受けて評価したとたん血を吐きながら倒れた

「きやああああ！ちよつとだ、大丈夫なんですかあ！」

「ふ。思いのほかパワーがあつたが問題ねえ！俺様からすればこんな傷かすり傷でもねえ！」

のわりには深刻そうな気も。

「さて、譲ちゃんの力なんだがパワーだけをいえば確かにあの竜に挑んでも問題ねえ。あの竜も結構な年月を生きている強力なやつなんだが、譲ちゃんのパンチは十分なものがあつたからな。ま、俺様が本気を出せばアレぐらいいいところだけだな！」

やっぱりマジンガーの力はすごいんだなあ、そして最後のセリフは必要あるのか？

「だが、肝心のパンチの仕方もつといや細かい動きから、譲ちゃんがまともな戦闘経験が無いつても判つたがな。」

ただのパンチ一発でそこまでわかるんだ。事実そのとおりだったし。

「譲ちゃんがまずする事は何よりも身体の動かし方と戦闘時の感覚を磨くことからだな。そのままだったらいつか今日と同じことになるな。」

うう、やっぱり地道に修行しないとだめかあ。でも、そんな当ても無いしなあ。ん、確かこの人って原作キャラだったよなまだ名前も聞いてないし……。

「あの、今更なのですがお名前は？私はマミ・トモエって言います。」

「お、そついや俺様としたことが名乗ってなかったな。よしマミ、しっかりと聞けよ！俺様の名はジャック・ラカン！最強の男とは俺のことだー！」

おお、やっぱりラカンだった！ならば、だめもとで聞いてみるか。

「はっははは！驚いたか、だがサインはやれねえぞ。欲しければそのむん「あ、あの「ん？」」

「私を鍛えてはもらえないで「だめ」「しょうか！……え」

はや！言い終える前につて。

「俺様も暇じゃねえし。ただで教えてやるほど安くはないしな、そもそも救出料も……」

ぐ、そういえば金に細かいんだっけ。

「どうしてもって言うんなら、胸を揉む権利をよこせ。それなら讓ちゃんの修行にもってこいな場所の紹介とそこに行くまでの間なら基礎だけ教えてやっても良いぞ。」

ちよ！それはいくらなんでも……

-----

とその後、いろいろ騒動有ったが紹介してくれる場所が闘技場だったので賞金をいくらか渡すって事で決着が付いた。

最初は火力と防御力が飛びぬけているので同じ初心者や力が弱いものには白星をあげることができていたが。勝利を重ねていってランクが上がってくると単純な力以外で強い人たちが出てきてそこから暫くは黒星ばかりだった、今はだいぶ慣れてきているがまだまだ安定していない。

ココでの目標は勝率を7割以上にしつつ年に2回ほど開催される大きな拳闘大会で優勝することと決めた。その後は少し世界をまわってみようと思っている。

ちなみにリングネームは”アフロダイ”にしている。本名だと後々目立ちそうだし……

<次は続く敗北からその人気は落ちていたが、見事に振り返り咲き今や上位陣とも戦えるまでに成長した期待の新星！アフロダイン！！>

《-----》

あ、もう私の出番のようね。それじゃあ、これ以上の話はまた後で。



## 現実には甘くない(後書き)

ラカン登場！彼の口調とキャラってこれで大丈夫かな^^；  
いくら強力な力を貰ってと言ってもいきなり一般人が使いこなせる  
わけがないって事でw

後1,2話くらい闘技場での話が続くかな？原作キャラは当分出て  
きません。

原作開始まで遠いなあw

### 次回予告

「闘技場で日々戦い修行するマミ。その実力やいかに！」

次回真ネギま マギカZ

”魔法世界の日々”

気長に待っててねw

## 魔法世界の日々

「さあ、始めました。片や期待の新人アフロダイン譲。片やこのクラスの1番人気のステインガー氏勝負の行方やいかに。司会は私ドラコが解説はこちらのジョニー氏が行います。」

「どうもジョニーです。」

「ジョニーさん、この戦いどうなるでしょうか？また、アフロダイン譲はこの試合に勝利したあかつきには最上級クラスに行くという噂もあるようですが。」

「そうですね。アフロダインも当初はその身体能力のみを頼りにした戦い方をしていましたが、この数ヶ月で見違えるようになってきましたからね。彼も前までのようには行かないことを承知しているでしょう。噂に関してなのですが彼女自身はどう思ってるのかはわかりませんが事実だと思いますよ。元々身体能力に関してはトップクラスのものを持っていたのですから、そこにこの数ヶ月で吸収した経験が合わさり今のランクでは不適切だ。っと運営側が判断してもしようがないくらいですからね。」

「なるほど、確かに最近の彼女の試合は「一方的だ」との声も聞かえてきていますからね。」

「ええ。このままですと双方にとって良くないですからね。ですが彼女なら最上級クラスに行ってもまた私たちを楽しませてくれると思いますよ。」

「さあ、準備が整ったようですね。試合開始の鐘が

カーーーーーン！

鳴りました！おっと！アフロダインが仕掛けた。アレは煙幕でしょうか？」

「そのようですね。一気に接近して倒す腹積もりなのでしょう。」

「対するステインガーは上空へと舞い上がってますね。ココから魔法による遠距離攻撃をかけて征するつもりなのでしょうか？」

「おそらくそうでしょう。この二人実に対照的な戦闘スタイルをとっていますからね。」

「確かにそうですね。ステインガーは多彩な魔法を使用しての正統派魔法使いと言ってもいい戦いかに対してアフロダインはかなり変則的ではありますが接近格闘を得意としていますからね。」

「ええ、なので如何に自分の得意な距離で戦うか又はそこに相手を引きずりこむかで勝負は決まります。前まではアフロダインはそれができずポイントを取られて負けていましたからね。それにしても彼女、種族は何なのでしょう？些細なこととは判っていますが彼女の場合。」

「腕が飛んだりしますからね。資料では人間ではあるらしいのですが。」

「にわかには信じられないですね。ととどつやらアフロダインがしかけたようです。」

「あれは腕ですね。何時見ても奇妙ですね。しかもそれが4つ、それに何か糸のような物をひっばっていますね。それにしても腕が4つ？」

「彼女はリボン状の伸縮自在な魔法道具を装備してましたね。おそらくそれを持っているのでしょう。数については確か彼女は自分の分身を作れたはずですよ。その分も一緒に撃っているでしょう。」

「パンチはどうやら外れたようですね。リボンを絡ませるつもりなのでしょうか？」

「どうなのでしょう、ステインガーがそんな手に引つかかるとは思えませんが。そのステインガーもリボンの出ているところを中心に魔法を撃ち込んでいますね。彼女が何かする前に終わらせるつもりなのでしょう。」

「魔法の射手を滞空させたり軌道を工夫して時間差で絶え間なく撃

ち込むように撃つてますね。おっと、詠唱に入ったようですね。」

「ステインガーは勝負に出たようですね。アフロダインの方は……、何か飛び出しました！」

「あれは？首なし腕なしの身体？？アレでいったいなにを、それ以前に首なし??」

「思い出しました！彼女の分身はすべて首なしになってしまいますようです。パンチを撃つたため腕もないのでしょうか。」

「なるほど、しかしあれでいったいなにを？ステインガーがいる高さの半分もとどいてないですね。また飛び出しました！」

「今度は本人のようです。腕もきちんとありますね。」

「そのようですね。おっと！先に飛んでいたほうの身体を踏み台にしてさらに跳躍した！！なるほどこのために先に行かせたのか。しかし、さすがにかわされたようですね。」

「いえ、まだ終わってません！飛んでいるパンチとリボンを利用して擬似的な空中戦をしています！」

「なんと！さすがのステインガーも詠唱をとめ迎撃に専念しようとしてますが軌道をつかめず！」

「空を飛ぶパンチは彼女のほうでコントロールできますし足場以外にもリボンを伸ばし絡ませることによって軌道を変更しているため捉えきれないのでしょうか。彼も飛行術は使えますが空中戦と言える軌道はできないようですからね」

「ああ！アフロダインに魔法の射手が直撃！！これは決まったか！？」

「いえリボンがステインガーを捕らえた！当たったことが返って視界を悪くしてしまったようです！」

「ステインガー解けない！アフロダインがそのまま突っ込んで両者纏れつつ地上に激突！！レフリーが確認のため走っていきます。」

「砂埃が晴れてきましたね。」

「結果は……。ステインガー気絶してしまっただようで！！よってこの試合アフロダインが勝利！！……いやあ、なかなか面白い試合で

したね。しかしこれでアフロダインは上のクラスに、ですか。」

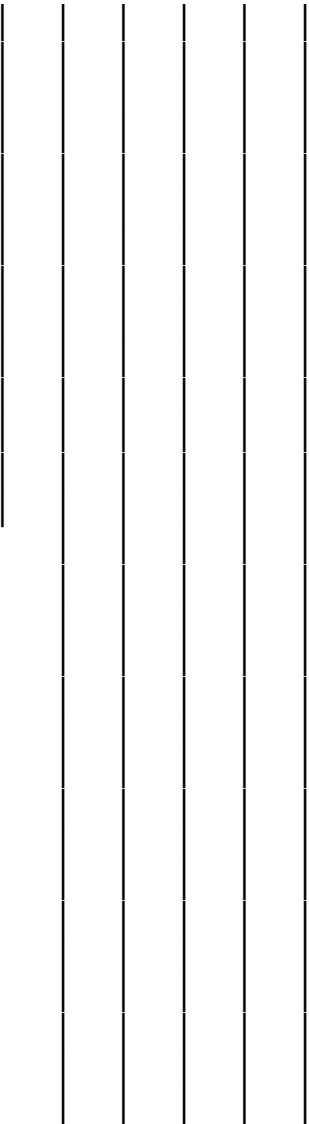
「ええ、楽しませてもらいました。そうなりますね。このクラスで彼女と満足に戦えるものはほんの一握りになってしまえますからね。しかし彼女ならたとえ上のクラスに行っても我々を楽しませてくれるでしょう!」

「なるほど。それでは次の試合ですね。それにしてもジョニーさんアフロダインに期待しているようなのですが、そのセリフも試合前にも言いましたし。もしかして……」

「次の試合も楽しみですね。ええ、もちろんファンクラブ会員ですよ!」

「やっぱり……、良いんですか特定の人に肩入れして。」

「なにを言う。私は公私はきっちり分けますよ!それに……」



「ふう、無事に勝てたわね。」

私は試合が終わって今は選手控え室にいる。ここは引き換え室ではあるが選手同士の交流の場でもあり、またちょっとした飲食ができるようにとおカウンターもあるので談話室と言ってもいいかもしれない。そこで私は今日の試合が終わったこともあり食事をしながらさっきの試合を思い返していた。

「このクラスでは問題なく勝てるようになってきたわね。となると次のクラスで出るための申請もした方が良いわね。」

と、独りごといていると

「てか、讓ちゃんもつと早く上がっていたのに何で今まであのクラスにいたんだ？」

この人はココで食事を出してくれている元剣闘士で名前はライバツクって人です。現役時代は無敵とも言える強さだったみたいだし、その前もどこかの国の凄腕兵士だったとかって噂も聞きます。そんな人が何でこんな闘技場のコックをしてるのはよくわかりません。本人も昔のことはあまり話すほうじゃないので選手の間でいろいろ噂になってます。

「前にも言いましたけど、私が剣闘士になったのは修行のためとある人に進められたからです。だから、できるだけしつかりと自分の戦い方を試したから最上クラスに行きたかったのです。」

「それは聞いたが、ちよつと慎重に行き過ぎじゃないのか？最上クラスで十分やっていける力があるのにしたのクラスにいたんじゃ人気の方もそうだが、最悪運営側からペナルティーが出ていたぞ。」  
「そうなんですよね。私はここに修行のつもりで入ったわけなんです。が、闘技場を運営してる側からすればそれだけで済まされては困るんでしょうしね。」

少し剣闘士と闘技場のルールを説明しますね。この剣闘士戦、魔法世界では非常に人気があるもので現代人の感覚からすると野蛮なものなのですが、決してルール無用でもないですしまして惨殺劇や殺戮劇を見せるものでもありません。魔法と言う戦闘技術があることとそれによる傷の手当が私たちの世界より遥かに簡単と言うこともあって過激になってるのであって基本的には格闘技の試合とそう大差なかったりします。ポイント制でもあるので戦い方しだいで力の差があっても勝てるようになってますからね。

ちなみに私はこれのおかげでよく黒星を付けられています……。防御力はかなりあるのでここにいる人の中級魔法くらいは耐えられるのですが最初は攻撃が当たらずにポイントを取られていて……。つと私のことはいいですね。

ただ一歩間違えれば死と言う現実もあるので通常剣闘士はその力量によってランク分けされます。それによって力に差がありすぎて防衛できずに死や強者が弱者を一方的にいたぶるなんて事がないようにしています。

なので試合をしていてある程度の力量があると判断されると運営から次のランクに進むように通知が来るのですが、それでも居座り続けると警告ののち強制的に最悪の場合、追放となってしまうので。観客は”闘い”を見に来てるのであつて弱いものいじめなんて誰も見ようとは思っていません。運営側はお客に来てもらわないといけないのでそのような試合をしている選手はよほど人気がない限り邪魔でしかなく、試合の正常化をするためにそのような処置をするのです。

それで私なんです、実は結構前に通知が来ているんですよ……。戦いの感覚を積むためにあまり早くに最上級クラスに行きたくはなかったのですが、先日ついに警告も来て変則的な戦い方をしているせいもあつてそれなりに人気があるため大目に見てくれたのですが、いい加減上に行かないとまずいです。

ちなみにこの最上級クラスはほぼ無制限の戦いが許可されていて力量の差は考慮されていません。使用禁止の技は闘技場を激しく損壊させるか観客席を守る結果を破るものつくくらいです。それを怖がって前のクラスにしようとする人も結構いるとか。ちなみに私が使う技でマジンガー系はルストハリケーン（酸抜き）以外が全部ダメです。どれも威力がすさまじいですし、まだまだ威力調整はうまくいってません。

「だから後で最上級クラスになる申請を出そうと思っていたんですよ。」

「それがいい、俺も譲ちゃんが追放なんて理由でこの闘技場を去るのはいやだからな。ところでその後は何か予定があるのか？話を聞いていると最上級クラスでトップを取るって事が終わりじゃなさそ

うだからな」

「はい。最上級クラスで7割くらいで勝てるようになって年に2回開催されている大きな大会を優勝したら少し世界を回ってみようかと。」

「あのここらの闘技場合同でやる大会か？確かにその目標なら譲ちやんのここに入ってきた目的とあうな。しかし何でココの最上級で7割なんて条件なんだ。」

「優勝だけだと物の弾みでって事もあるかもしれないのでしっかりとした目標が欲しかったので。」

「ははは。なるほどやつぱり慎重すぎる気もするがな。まあ、譲ちやんの今の実力なら今年か来年の大会で達成できるだろう。しかし世界を回るか……」

「盗賊とかは大丈夫ですよ。」

「それは心配してない。」

「ですよええ、剣闘士相手だとむしろ盗賊のほうが心配だし。」

「そうじゃなくて、どうもこの頃いやな噂を耳にするんでな。」

「いやな噂？」

「ああ、帝国が戦争準備をしているやら連合で人間至上主義のやつが出てきたやらな。それにこの頃おかしな連中があちこちで見られるようになったみたいだからな。」

「そんな事がそれにおかしな連中って……」

「むちゃくちゃな事をしまくっているらしい。それだけならまだしもそんな予兆がなかったのにいきなりそんなやつが集まりが結成されたり、普通だったやつがそうだったとかおかしな連中としか表現でんみたいだ。」

ん、今って向こうだと何年なんたる確か原作での大戦は20年前とかって書いてあった気もするけど。でも、この感じだと近づいてきているみたいだなあ。

「わかりました、そのときは気をつけますね。」



その後ライバツクさんや周りの人たちと少し話した後、今住んでいるアパートのようなところに帰ってきた。

この後どうするかと思案しているとドアをノックする音がしてあけてみると

「やつほお、マミ。これから暇？暇だよね！これから一緒に買い物いこ！」

入ってきて早々人の話を聞かず連れ出そうとしているのは猫の獣人のマリーって子です。この町で働いているようで越してきた初日からこの調子であつちこつちに引つ張っていかれています。町に慣れることが出来たから感謝しているけど、時々こつちの都合お構いなしにいろいろしかすからなあ。1回どうやってそうなったのか知らないけど私と自分の貯金全額を私の試合に賭けるってことがあつたし。勝つて帰ってきてみると満面の笑みで飛びついてきたときは何事かと思つたけど、さすがにそれを聞いたら少し説教してしまいました。

「もう少し、相手のことも考えは方がいいわよ。私も買い物に行こうと思つてたから良いわよ。」

「やったあ！マミのご飯が食べられる！じゃあ、早くいこおいしいお店見つけたんだ。」

「はいはい、ちょっと待つてね。用意してくるから。」  
「はい」

さて、それじゃあ着替えて用意をしようかな。

その後、マリーと一緒に町を見て回り彼女が見つけたというおいしい喫茶店に寄つて夜ご飯の材料を買い2人で仲良く食べた後また明日と分かれました。

実際はまたいろいろと振り回されたのだけど割愛ということ。

転生して調子に乗つて死に掛けたけど今は十分楽しんでます。さあ、明日は昇級の申請に行こうかな。と明日のことを思い私は眠りについた。

## 魔法世界の日々（後書き）

戦闘描写ができません……。なので実況風味でw  
最上級クラスでのことや大きな大会のことも書こうかと思っただけど  
本編とあんまり関係ないからカットしてさっさと大戦にはいるっか  
な…。

### 次回予告

「無事修行を完了したマミ。彼女はその後世界を周り偶然ある出会いをした。そこでの平穏な日々しかし刻一刻と迫る暗い影」

次回 真ネギま マギカZ

「平穏な日々と不穏な気配」

カットすることになりましたw

でもちよびつとは書くかな。こっちはいろいろ重要なのでw

平穩な日々と不穩な気配(前書き)

PV2000・ユニーク500突破!

これを励みに続けていきます!

## 平穏な日々と不穏な気配

年2回開催される付近の闘技場合同での一大会その優勝が私の当面の目的だった。

そう“だった”。今私はその大会に優勝し今後のことを記者たちに話した後、マリーとその友達、剣闘士仲間やライバックさんと大会に優勝したお祝いのパーティをしていて、さっき家に帰ってきていた。記者の人やマリーの友達で私のファンの子や剣闘士仲間は私が剣闘士を辞める事を残念がったが世界を回ることと、2度とやらないわけじゃない事を話すと再戦の誓いやずっとファンでいると言ってくれたりした。

そんなことを思い返しつつここ1週間開催されていた大会のことや今後のことを考えつつベットで横になっていた。

「ライバックさんが行ったとおり最上級にあがった年に目標を達成しちゃうなんて。勝率も概ね7割くらいだし。ゼウスが何をさせたいかはよく判らないけど少なくともマジンガーの力が要るってことよね。剣闘士のルール上で強くなるのはもう限界かな？そうなるっそろそろ世界を回ってみようかな。まあ、今日は疲れたから詳しくはまた明日考えましよう。」

そう、思い私は眠りについた。

「……」

眠ったはずだが今私はいつか見たことがあるような何も無い空間にいた。

「む、気がついたか。」

と、黄金の甲冑を着た男性　ゼウス　が声をかけてきた。

「あなたはって事はここは……」

「ああ、勘違いするでないぞ。今回はお前の意識だけをここに呼び出したのだ。」

よかった、また死んだのかと思った。

「そうなる何故呼ばれたんでしょう？」

「うむ、前にお前を見極めそれが済み次第アーティファクトなどを渡そうといっただろ。」

「そういえば言ってみましたね。」

「うむ。転生した直後はどうなるかと思ったがその後まじめに取り組んだようだからな。なので新たな力を渡そうと思つてな。」

おお、ネギま世界に行ったらぜひ欲しいアーティファクトそれも神様印の！

「それとお前の身体もパワーアップさせる。」

「え？やつとこの身体に慣れてきたところなの？」

マジンガーの武装ほとんど使つてないよ………

「私も早いとは思うのだがそうも言つてられなくてな。もう少し時間があると思つていたが奴の力がここ暫くで増してきていてな。強引ではあるが本来の身体になるためにも急ぐ必要がでてきたのだ。」  
「ん？本来の身体？？これってマミさんの身体を改造したものなんじゃ。」

「む、話してなかったか。君の本来の身体は奴に対抗するために作ったのだが余りにも強大な力を持ってしまつてな。渡す段階になつて心配になつてな。正しく使えるのか、力におぼれて暴走しないかと。」

「すみません、思いつきり暴走しました。」

「そこでまず、見極めようの身体を用意しそれを与えて様子を見ようとしたのだ。もっとも次の身体も本来の身体になつたときに問題なく扱えるように力になれるための物なのだがな。だがこれも使い

方次第でどうにでもなってしまうからな。」

なるほどなあ。いきなり暴走した身としてはその心配がよく判りま  
す。

「なるほどでは奴とは？」

「それも今から話す。奴の名は“ハーデス” かつて私と戦い敗れた  
神の石柱だ。」

やっぱり、外れていて欲しかったなあ……………

「奴と私は今後の世界のことと対立してな。何とか私が勝利し奴を  
封印することが出来たがもう世界にとどまり続けることは出来なく  
なつてな。最初は奴の身体を破壊し根城にしていた場所ごと封印し  
葬り去つたので大丈夫だと思つたのだが、何故だか最近あの世界で  
奴の気配がだんだん濃くなつてきたのだ。最初は勘違いかと思つた  
があきらかに奴の気配と力を感じたのだ、私がじきじきにいければ  
いいのだがそれが出来ないことは前にも話したな。」

真版と大体同じ感じなのね。

「そうなる私にはハーデスを探しつつ今まで通り修行をすればいい  
のですか？」

「うむ、奴の搜索も大事だが今のままではまずいからな。ただ、奴  
はおそらく実体を無くしていよう。そこまで甘い封印をした覚え  
はないからな。なので探すものは奴の意識だそれと何故今になって  
奴の気配が濃くなつたのかも頼む。それを何とかしないとまた復活  
してしまうからな。」

むむむ、結構大変だなあ。でも、結局誰かがしないといけないこと  
だからな。ハーデスつてアニメだと人類を殲滅だかしようとしてい  
たからなあ。逆にそんなこと選ばれた事を誇りに思ったほうが良  
いな。後気になるのは

「アーティファクトはどのような形で？」

「向こうの世界でのパクティオーカードの形を取らせてもらう方式  
も同じだ。身体は起きたら変わっている。すまぬないろい押し付  
けてしまつて。それではまたなおぬしも覚醒へと向かっているよう

だ。」

「いえ大丈夫です。新たな生をもらったのですから、それに現状十分楽しめています。」

と視界が次第に薄くなってきた、目覚めてきてるんだろう。

体のことや判明した敵のことは気になるがカードのことに期待して目覚めと思っていると…

「うむ、道は険しいと思うが決して諦めるな。私はいつでも君の側にいるぞ！」

行け！マミンガー！！

「

「何ですかその名前は！！」

最後の最後までとんでもない名前と呼ばれてそれに突っ込んで目が覚めた。

「マミン+マジンガーだからってマミンガーって……。忘れましよう、忘れれば私以外誰も知らないんだから聞くことはもう無いのだから。」

と自分に言い聞かせ。早速カードを探すために周囲を見てみると。

「あ、カードはこれね。でもこの剣は？」

カードは机の上に置いてあったがその横に見慣れない剣が2本置いてあった。

「ん、こんなもの買った覚えがないからおそらくゼウスが送ったものなんだろうけど、あの紙を見れば書いてあるかしら？」

早速転生したときにもらった紙を出して見て見るとしっかりゼウス

からのものが写っていた。

<うむ、無事に届いたようだな。その剣はグレートマジンガーが装備していたものだ。ついでに送っておいたぞ。>

あ、グレートのものだね。確かに身体には格納できないからなあ。とりあえず腰に下げておけばいいかな。

<カードのほうなのだが出来ることはアーティファクトの召喚のみだ。念話や魔力供給はこちらからは出来ないのな。>

当たり前と言えば当たり前ね。出来ても困るし、衣装チェンジは元々あるからね。

<カードの詳しい仕様も載せて置こう有効に使ってくれ。>  
ありがとうございます。さて早速拝見つと……………

「……………なにこの絵柄……………能力もまた……………」

カードには人物が描かれている。もちろん私なのだが問題は……………

独軍っぽいコスを着用し（まあ、問題はないわね。）

片手に何か杖のようなものを持って（これがおそらくアーティファクトなんだろうけど）

自信に満ちた表情をしている。（ここまでではそんなに変じゃないわね）

そしてもう片方の腕で自信に満ちた表情をしてている頭を小脇に抱えている。（何故ブロッケンポーズを！最近忘れてきたのに……………）

「絵柄の時点でもう……………、そのこのアーティファクトって……………」

本物のカードはどのようなかは分からないがこのカード基本は私が中央に配置されているんだけど、その後方を注視するとまるで最初からそうであったかのように私が多数の影を従えている絵柄に変わっている。



で、名前なのだが<鋼の獣の王>となっているのだが写っている影がどう見ても機械獣にしか見えない……。>  
どういふ事だと紙を見てみると

<上位神の意向だ……>  
またか！何故身体はマジンガーでアーティファクトはブロッケン伯爵……

<だが、それならば奴が多数の手下を従えていても対抗することが可能だ。それに機械獣以外のメカもいくつか入れておいた。大いに役立ててくれ。>

機械獣以外かあ、要塞系もかな？

いろいろ文句はあるけど使えそうだしよしとするか。  
世界を回るときにカードの能力と自分の力を試さないとな。 剣もある程度は使えるようにならないとな。

「マミ〜起きてるう？」

マリーが早速来たようね。これからのことを思いつつまずは騒がしい友人を迎えるのだった。

---

あれからまた数ヶ月私は魔法世界を回ってみて今は帝国領にあるとある村で厄介になっている。世界を回るときは飛行魚や徒歩で思っていたが、召喚できるものの中にグールなどがあったこともありそれで移動を行えたのでお金と時間を節約できた。

（怪しいやつって追っかけられたこともあったけど……、もちろん振り切った。）

あのカード、Drヘルが使っていた物だと大体呼べるみたいなのよね。ためしにガミアQを呼び出してみたら1〜3まで出てきた嬉し

かったなあ。やっぱり旅のお供は欲しいからね。呼び出せる機械獣の数の上限もないようだった。

（機械獣軍団を呼び出したときは大騒ぎになってあわてて戻したもののね。）

ただ一度召喚して戻すと次に呼ぶためには24時間掛かるなど制約もあつた要塞系はその制約がないみたいだけどガミアたちも1〜3でワンセットで呼び出す必要があるみたい。ゼウスによると修理のためとバランスを取るためであるらしい。どんなに損壊しても戻してしまえば24時間で完全に元に戻るが、強力な戦力をこの世界に送り込むためにはこのような制約が必要だったらしい。

要塞内でも修理は出来るがメンテナンスが精々だし火力も余りなかった。こっちは移動用として用意してくれたのだろう。だから24時間の制約はないのかもしれない。

それはともかく私はグールに乗ってガミアを従えて世界を回り体の性能を試しつつまた修行ついでに魔獣を狩っていた。

そんな時、ある町に寄ったときにマリーに出会った。何でも長期の休みをもらい故郷に帰る途中なんだとか。そのときまたちよつとした騒動があつたがその後もぜひ故郷に来て欲しいと言われ、これといった予定が無かつたこともありマリーの故郷にお邪魔することにした。

移動はグールだったのだがそこでまた……。

その後無事、彼女の故郷にたどり着き今はそこでやつかいになっている。

村と言つたようにあまり大きくはないが穏やかでいい場所だ。友人もそれなりに出来た、ここで暫く過ごした後また旅に出ようと考えていたのだがそうも行かなくなつてしまった。

大戦が勃発してしまつたのだ。

原因は連合が突如進行したとも、帝国の特殊部隊が連合の要人を暗

殺したともあつてはつきりしていない。しかし、刻一刻と戦いは規模を増し今では連合と帝国の全面戦争の状態になってしまつていて。とても自由に渡航できる状況ではなく私はこの村にとどまることにした。またマリーも仕事先から暇をもらつてこつちに避難してきた。闘技場のほうも剣闘士が戦場に行つたりして現在休業中らしい。ただこの村は主要な都市からは離れているので住民の危機感はいくらも無い。とはいえ敗残兵や盗賊だ出る可能性もあるため腕に自身がある人たちで見回りをしている。

今は私の番で村の周辺を回っている。

「それにしてもこの戦争何時まで続くんだらうな？」

と話しかけてきたこの人はアルヴィンさん村の若者のまとめ役のような人でリーゼントがトレードマークの虎の獣人だ。

「そうねえ、ニュースを聞いてもどつちもこれといった目的を持っているって感じじゃないものね。一応目的っぽいことは言つてるけど…」

「ありや目的じゃなくて妄言だ。何がく神々よりこの世界の管理を任された我々はすべての国、臣民を管理統制しなければならない。

>だ！連合の言つてゐることは妄言でしかないし、帝国も似たようなもんじゃねえか。あいつら世界征服でもしたいつてののか？」

「言つてゐることを素直に受け止めるとそうなるわね。でも、戦線は膠着してゐるんですって？」

「ああ、復隊した隊長やオヤジさんの話だと上が何をしたいのか分からんそうだ。」

隊長つて言うのはバートレットと言う人で村の自警団のまとめ役で皆から隊長と呼ばれて慕われていたの、オヤジさんも同じく自警団の人で隊長の補佐をしていて訓練なんかを担当していたは名前はピグルだつたかしら？皆オヤジさんつてしか呼ばないからなあ。

元々は軍にいたらしいのだけど引退して村に越してきたらしいの、でも戦争が始まつて復隊することにして軍に行つたの。

「そう、そうなるといつ終わるか分からないわね。」

今起こっている戦争がおそらく原作の20年前に起こったっていうものなんだろうけど…

このあたりから読まなくなっちゃったからあんまり覚えてないのよねえ。何かおボスがいて主人公の親がたおして終わったってくらいしか記憶に無いし。

そうなるに参加したほうがいいのか。でも……、私に人を殺せる覚悟があるのかしら。剣闘士をしていたのだから戦う覚悟はあるけど、そっちのほうは分からないわね。

とりあえず今はこの村の安全を守らないとね。こんなことはいくら考えても分からないしね。

と考え事しているとチョッパーが（彼のあだ名で斧って意味があるみたいで戦い方にちなんだのだとか）腕を出してさえぎってきた。「どうしたの？」

「何か音がする。獣が立てる音じゃねえ。それに血の匂い。」

こんなときは獣人の感覚は便利ね、と思いつつ戦闘体制に入った。

「距離と方角は？あと数」

「距離はまだあるな方角は北東ってところか。数は……詳しくはわからねえが、かなりの数だな。盗賊や敗残兵って規模じゃねえ。」

帝国の正規軍がこんなところに来るはずもないし、そうなるって連合の兵かしら。

「応援を呼んでくる時間はあるかしら？」

「難しいな音がだんだんこっちに近づいてきている。戻って説明しているうちに間近まで迫られそうだな。」

「そうなるって私たちが何とかしないとね。連絡にはガミアちゃんを1体向かわせるわ。向こうは大丈夫かしら。こっちが全部って分けじゃないだろうし。」

「そうだな頼む。ブービーとナガセのほうか？大丈夫だろうあいつらが負けるところなんて想像つかねえしな。それにこっちにいるのと同規模以上がいたら今すぐケツまくって村ごと逃げる必要があるな。」

「それもそうね。でもそんなにいるの？」

と質問をしながらガミアちゃんたちを出してうち1体を村に連絡に走らせた。もう一体をもう一つの班のところに援護に向かわせ準備を整えていく。

「ああ、近づいてきてはつきりしてきたが100人はいるぞ。」

「1人あたり50人計算ね。」

「まさか、お前が70で俺が20でアイツが取りこぼしの10だろ。凄腕剣闘士さん。」

「ふふ、期待には答えないとね。でも、まずは目的を聞かないとね。」

「聞くまでも無いと思うがね。さっきからろくでもない会話がちらほらと聞こえてくる。」

「一応は聞いておかないと、私が前に出て話すわ。チヨッパは援護と村に向かう人をお願い。ガミアちゃんは村へ向かう人をお願い。」

「了解！」

「了解した。」

ふう、いきなり殺す覚悟をすることになるなんてね。出来ればそうなって欲しくは無いんだけど……

そこからしばらく進んで、少し開けたところで私は向かってくる人たちが待っていた。

さてどうなるかしらね。

<マミ、どんどん近づいてくるぞ。>

<分かったは、もう少しで見えるかしら。>

<ああ、もう森を抜け…まずい奴ら撃ちやがった！逃げろ！！>

「えー！」

チヨッパの警告からよけるまもなく魔法の射手が多数私に降り注

ぎ止めとばかりに中級魔法が撃ち込まれた。

「はっはははは、なにやらこそこそとしていたようだが貴様ら獣人は生きる価値なの無いのだよ。この世界はあのお方によって選ばれた我々の物なのだからな！」

「隊長、こいつは人間のようですが。」

「む、確かにそうだな。しかし獣人と馴れ合う同胞など私は知らないな。」

「それもそうですね。大方変身魔法でも使っているのでしょう。」  
この言葉を聴いて私はこの人たちと話し合うことは無理と悟った。  
それにいきなり魔法を放つこいつらを村に行かせるなんて事は出来ない。

あれだけ悩んだ殺す覚悟は相手が相手だからかもしれないがすんなりついた。

転生したての時のように自分だけ、死ぬならいいが仲良くなった大切な人が死ぬのを黙ってみているなんて出来ない。

だから私はこの人たちを殺そう、戦争に参加して少しでも早く終戦を、親しい人たちに少しでも早い平穏を取り戻してもらうために。

この力を使おう、マジンガーの「神にも悪魔にもなれる力」を、けれど決してそのどちらにも成らない様に人の心を持ち続けて。

そうと決まれば早く起きないとね。チョッパーも呼びかけ続けていることだし。

<私は大丈夫よ。あなたの言うとおりこの人たちに話は通じそうも無いわね。>

<ふう、心配させるなよ。ああ、無理だな。だがちょうどいい具合にお前の周りに集まってきてるぜ。>

<ええ、じゃああとは作戦どつりに>

<ああ、なめたまねした落とし前はつけねえとな。こんな奴ら村にいかせねえ>

さあ、反撃と行きますか。となると掛け声はやっぱりあれかしらね。

起き上がりつつガッツポーズとりつつ私は叫んだ。

「マジーン！ゴォー！」

マジンガーといえぱりこれよね。

と思いつつ、ブレストファイヤーを放ち。敵の殲滅を開始した。

あれから無事に村に一人も通すことなく敵の殲滅は完了した。ブレイズ達の方も30人くらいが侵入して奇襲してきたらしいが苦も無く撃退できたようだ。

そして現在、村の長老たちが集まって今後のことを話し合っていた。どうなるかしらね。」

「たぶん引越したろうな。今までも敗残兵とかが来ていたが今度は明確にこっちをつぶす気の奴らが来たからな。もう俺たちだけでどうこうできないだろう。」

「そうね。となると、バートレットさんたちがいる町に行くのしら。」

「そうなるだろうな。ほかに当てもなし。なあ、今回のあいつらどう思う？」

「あなたも気になってたの？確かにあれはちょっとおかしいわね。」

「ああ、あんな連中がいるってのは分かるがそれがかたまっていて、ましてこんなところまで出張ってくるなんて普通じゃねえしな。」

「本当にどうなっているのかしらねこの戦争。」

「……なあ、軍に入るんだって？」

「ええ、ここを移ったら警備がしつかりするところになるんだろうし。それなら軍に志願して少しでも早く終戦が迎えられるように、そうじゃなくても大切な人にまで戦火が及ばないようにしたいからね。」

「そうか、俺やブービーたちも志願するからもしかしたら一緒の隊

になるかもな。」

「ええ、そうね。そのときはよろしくね。」

「ああ！またここで皆で祭りをしたいから死ぬんじゃねえぞ。」

「あなたもね。チヨッパ。」

その後、村を放棄して大きな街に皆で移り住むことになった。

そして自警団の人たちは軍に志願し戦火へと飛び込んでいった。

そう、2年に及ぶ大戦。大分裂戦争へと物語の表舞台へと私は飛び込んだのだ。

---

某所

もっとだもっと……これでは足りぬ……より多くの……もっと  
を広げよ……

我は、この世界の真の支配者……

……

……

……

……



## 平穏な日々と不穏な気配（後書き）

え〜と、強引なパワーアップなのは承知しています。ただここ以外にタイミングが無くて><

グレートにパワーアップしたのですがZも今後しつかり出番と見せ場はあります。ただグレートは大戦のほう为荣えるってことでかなり早いですけどチェンジしました。

主人公の大戦への参加の部分も悩みました^^;

ともかく暫くはグレートマミンガーで大戦編をお送りします。いろいろ至らないところがあると思いますがよろしく願います。それと作中で出てきた連合部隊ですけど。決してあれが一般的な連合兵ではありません。似たようなものは帝国にもありますので。

### 次回予告

「ついに物語の本筋にかかわりだしたマミ。そして蠢く敵の影、姿を現す原作キャラ。」

次回 真ネギま マギカZ

「大分裂戦争<序>」

## 大分裂戦争<序>(前書き)

リアルが忙しくて1週間ぶりに……

剣闘士関係もそうですがいろいろ独自解釈、設定が入ります。

あと、なぜかいるエスコンの人達ですがW本編には関わりは無いです！

モブの名前考え付かなくて…

## 大分裂戦争<序>

「いでよ！ガラダK7 ダブラスM2！進撃せよ！トロスD7 ア  
ブドラU6！目標はあの街だ、進め機械獣達よ！！」

私は次々に機械獣を呼び出し攻略目標の街に向けて、進撃を開始し  
た。

「いつ見ても、凄まじい光景だな。しかし、ここまでする必要ある  
のか？」

と地響きを起こしながら進む機械獣に驚き辺境の都市に攻め込むに  
は過剰すぎることに疑問の声が上がった。

「ええ、過剰な戦力であるのは分かっているわ。でも、それは相手  
もそう思うでしょ？なら……」

「なるほど、この戦力で相手を威圧し降伏を促すと。しかし、そう  
うまくいくか？かえって徹底抗戦を決意させるんじゃない？」

「可能性としては低いと思うわ。あそこは元々帝国領のだったし、  
駐留部隊の士気も高くは無いら徹底抗戦をするまでにはならない  
と思うわ。」

「ふむ、確かにアチラさんもこんな何も無いところの1つ都市を死  
ぬ気で守る意味も義理も無いな。」

「ええ、だから街を開放することを条件に撤退を認めれば戦闘を回  
避できるはずよ。」

「その条件ならまず間違いないな。しかし、大丈夫なのか？敵兵を  
無傷で逃がしてしまつて。」

「受けた命令はあくまでも都市の奪還。敵兵のことに何んかしては何も  
言われてないから黙っていれば問題ないわ それに彼方だって戦闘  
はしないほうがいいでしょ？」

「くく、そりゃ詭弁じゃねえのか？マミ隊長。まあたしかに、こん  
なところで死にたくはないな。」

「と、そろそろ街に着くわね。皆に準備の指示をして。」

「了解。精一杯奮してよろう！」

「ふふ、やり過ぎないようにね。」

機械獣を都市の城壁を取り囲むように配置し私達は城門前に陣取るように位置についたいた。相手も城壁上に陣取り迎撃体制に入ってきた。

「これから都市の受け渡しの交渉を始めるわ。もしかしたら攻撃があるかもしれないから彼方達はわしの前に出ないようにね。それと攻撃が有っても反撃はしないように、防御に専念して。」

「了解。その代り、しっかりと頼むぞ！」

「ええ、それじゃ始めるわね。」

こちらは帝国軍アリアト方面軍第17大隊指揮官マミ・トモエ都市に駐留する部隊の指揮官に告げる。現在、そちらはこちらの包囲下にある無用な戦闘およびそれによる都市への被害はこちらが望むところにあらず。武装を解除後すみやかに都市より退去するならば、我が方は追撃をおこなわない。期限は明日正午とする、そちらの賢明な判断を期待する。

さてと、このままうまくいってくれるといいわね。」

「ああ、そうだな。あとは、アチラさんに変な考えを持った奴がいないことを祈るか。」

しばらく待機していると城門が開き白旗を掲げた一団が中から出てきた。一団はわれわれの数メートル前で止まりその中の指揮官と思しき人物が

「協議の結果、我々は武装解除し都市より退去することを決定した。されど本当に追撃をおこなわないか確認をしたい。先ほどの言葉が真実なれば現在都市を包囲している、あの兵器を撤退させてもらいたい。あれがあつては兵達に武装解除を促すことは難しく、また待

ちの住人も不安がっているゆえ。兵器の撤退を持って我が方も武装解除、退去を開始する。我々は退去完了までそちらに身柄を預ける。

「了解しました、賢明な判断ありがとうございます。では、機械獣たちを戻します。」

立ち振る舞いからこの人たちが本物の指揮官だと判断し、機械獣たちを戻していった。消えていく機械獣に相手は驚いていたが、だからといって反抗する様子もなく無事に終わるかと思われたとき……

城壁上より突如魔法が放たれた！それも魔法の射手のような初級魔法ではなく、中級以上のあきらかにこちらを数人は殺れるモノが迫ってきた。

とっさに斜線軸上に飛び出し無事防御でき周囲に被害がなかったが、別の問題が発生していた。

「おい！どうということだ！なんでこちらに攻撃を仕掛けてくる！！」

「さて！何かの手違いだ！私達はあのようなのは命令していない！！」

機械獣を下がらせたところで撃ってきたせいでこちらをはめてのか！と副長がくっつかかり、アチラは完全に想定外なのだろう酷くあせっていた。

副長には攻撃が有るかも知れない事を話したが、降伏の前か後でも精々魔法の射手クラスのものと思っていたのだろう。それが詠唱が必要なものが撃たれたことで、計画的なものかと思っっているのだろう。

「だが！「ストップ。」「マミ無事だったか！」

「ええ、私は何も問題はないわ。それに魔法を放った人もどうやら仲間たちから取り押さえられているみたいだから。あの人が発射的にしてしまったのでしょう。でも、一応警戒は続けて。」

「了解しました、お前も気をつけろよ。」

「な……、あの魔法をくらって無傷とは。アチラが好戦的でなくて良かったよ。」

「ええ、先ほどの兵器もそうですがあの指揮官の実力も我々でどうにかなる相手ではなかったようですな。」

「そうだな。だが今は無事に帰れることを喜ぶとしよう。」

今私はヘラス帝国の東の外れの街にいる。

大戦に参加することを決めた私は傭兵として参加している。

正規軍になるつもりもなく拳闘士としての実績と世界を回っていたときに傭兵のようなことをしていたので、傭兵となったのだ。

幸い拳闘大会での優勝実績もありスンナリと登録も終わり、数回の実戦を経験したあと今の地位にいる。

もともと隊長と言っても傭兵達のまとめ役といった感じで正規軍としての地位はなくこの大戦限定のものだ。それに、私には戦術で華麗に勝利何てできるわけないので機械獣を出しつつ誰かが突出しないようにするくらいしかできない。

「あれから暫くたちましたが、上からは何も？」

この人はラリーさん、同じ傭兵仲間なのだけどここの仕事を長くやっているそうなので副官をやってもらっている。正直私より隊長に適任の気がするが本人によるとく一番強いやつが隊長をして先頭で皆を引っ張った方がいいらしい。

「ええ、正規軍からは現在の戦線を維持せよってしかきてないわ。」

「ここに再び攻めて来るかね？ただでさえ主要な戦線とは関係無いつてのにお前までいるってのに。」

「確かにあまりメリットはないわね、でも油断はきんもつよ。それに、連合が来なくても盗賊とかがいるわ。それからも街を守らないとね。」

「わかってるよ。盗賊もだが今回の戦争は何処かおかしいからな。あり得ないことも起こるかもしれねえ。」

「ええ、そうね。」

「た、たいへんだ!!」

「さっそく何かあったみたいだな。」

「そうね。どうしたの!」

「あ!隊長に副長、それが連合がこちらに攻めいつてきたんです。」

「本当に来るとはね。でもどうしてそんなに慌ててるの?」

「侵攻してきている戦力が問題なんです。見張りの報告によると鬼神兵4に1個旅団規模の戦力がこちらに向かってきているらしいです。兵も砲兵らしきものを確認したとか……」

「はあ!?何だその戦力は、見間違いじゃねえのか?どう考えてもこんな戦線、場所に投入される戦力じゃねえぞ!」

「何回も確認しました!しかし確実にそれだけの規模はいるんですよ!!それに奴らやる気満々のようです。この戦線から帝国に侵攻するつもりでしょうか?」

「でも、主戦線のオステイア周辺でも押されているのに何でこっちに……。まあ、それは後で考えましょう。あなたは皆に出撃の用意を知らせに言つて。」

「了解しました!」

「はあ、本当にありえないことがおこつちまったな。だが、アチラさんがやる気ならこつちも全力でいくまでだな。」

準備を完了し街から程近い丘に陣取り相手を迎え撃つ準備を進めて

いる。

「鬼神兵は隊長のアレに任せるとし、どう布陣する？普通にぶつかればどうやっても勝てやしねえぞ。」

「鬼神兵は、アレね……。あの装備なら2対1でも機械獣なら問題なくいけるわね……。」

「もう見えてきやがったか。」

「短時間なら敵の攻撃を受け止められる？」

「短時間なら……。敵の錬度にもよるがこっちも傭兵なんて事をしてるからな。」

「ガミアちゃん達も参加させるわ。鬼神兵を潰したら機械獣たちにも襲わせるわ。戦う敵もこっちに向かってくるか突破して街に向かう人だけ狙うことにして。」

「そこまで簡単に潰せるものか？まあ、お前がいるだけでも何とかなりそうではあるけどな。」

「ええ、機械獣の名は伊達じゃないのよ。じゃあ、早速はじめましよう。」

「来なさい！ガラダK7 ダブラスM2！」

髑髏の頭部の左右に大きな鎌をつけたガラダK7

蛇状の頭部が2つあるダブラスM2

両機とも現代の軍をはるかに凌駕する力を持っている。鬼神兵とはいえ現在向かってきているせいぜい軽歩兵程度の装備のモノに負けるほど弱くはない。

呼び出してすぐに2機を突っ込ませ私達は迎撃体制を整える。

敵も鬼神兵とは分離しこちらに突撃する腹積もりのようだ。鬼神兵は砲撃体制に入り本隊は機械獣を迂回するようにこちらに進軍して来た。

鬼神兵と機械獣たちの距離が半分になったところでチャージが完了したらしく、まず2体がそれぞれに砲撃を開始。残り2体は回避した先に撃ち込むつもりなのだろう、普通ならここで終わるか大ダメ



ージを負い遠からず敗れるだろう。

だが、機械獣はそんなに弱くも甘い相手ではない。基本的にやられメカの印象があるがあのマジンガーと対等に時には追い詰めることもある能力を持っているだ。

この程度の攻撃何も問題ない。

1発目を避けた2体に向けて残りの鬼神兵2体が砲撃を放った、相手は必中を確信したのだろう、こちらに攻撃をかける相手の顔には笑みが浮かんでいる。

しかし、その期待は無残にも打ち破られる。2体の機械獣は<機械の獣>の名に恥じない流れるような動きで2発目の砲撃も回避しなおも接近を続けた。

鬼神兵たちは2体を前衛もつ2体を後衛にし再度砲撃を試みようとしたがその動きは余りにも遅かった。ガラダが目からミサイルを放ちダブルスも2つの頭部から光線を放ち鬼神兵達を牽制。その攻撃を防御している間に至近距離までの接近を許してしまった、後衛の2体は辛うじて距離を離しつつあるがまだまだ近距離といっている。

ガラダが後退する1体に向け頭部横の鎌を1つ投擲した。それは辛うじて前衛のガラダと相對していた1体が弾く事ができたがそれによつてできた隙は余りにも大きい……、もう片方の鎌を手につけたガラダの一撃を受け止めることができず致命傷を負い崩れていく。ガラダはその鬼神兵を後退する1体に投げつけた。そこまでスピードがあるわけでもなく難なく避けることはできた、後は再び砲撃するだけ……だった。投げつけられた1体に隠れるように飛来した鎌に気がついたときには回避も防御も不可能でもし鬼神兵に感情があつても自分のみに何が起こったかわからなかつただろう。

時間を戻しダブルスのほうは……

至近距離に接近したダブラスは首を鬼神兵に絡め絞め殺さんばかりに締め付けつつ両腕でも抱きついてきた。また首は後退する鬼神兵を狙い容赦ない光線による攻撃を浴びせていた。抱きつかれた鬼神兵は何とか振りほどこうともがいたとき……、突如として光り輝いた。鬼神兵が何かをしたのではない、その証拠に鬼神兵は煙を上げつつ崩れ落ちていく。そうダブラスだ胸の6つ電極で相手に高圧電流を浴びせたのだ。もう1体の鬼神兵も何とか光線を防いでいたが1対1になったことでより激しさを増した攻撃に耐え切れず後を追った。

機械獣によつて4体の鬼神兵が瞬く間に敗れる。勝てるかはともかく自分たちが私たちを破るまでは十分持つだろう、そう思っていた相手は予想外に過ぎる結果に動揺を抑えきれないようだ。なんとしても突破しようと攻撃を強めたとき、機械獣が連合兵達を後ろから襲った。鬼神兵を無傷で破り現在進行形で自分達を蹂躪する機械獣の存在について彼らの士気は崩壊した。後は後方に通さないように攻撃を加えればこの戦闘は終わりだ。だからこそ何故今回の戦闘が起こったか。何故こんな辺境にあんな戦力が現れたのか……、どうしても考えてしまう。ラリーさんも同じようになにやら考え込んでいる。ともかく何とか大きな被害もなく勝利したことを今は喜ぼう。

「転属ですか？」

「そうだ貴様には今回の戦功によりオスティア方面軍に派遣される  
ことが決定した。速急に準備を整え出発されよ。」

「代わりの人員はいるのですか？」

「貴様が心配することではない。すでに数名こちらに向けて出発している。」

「分かりました、準備が出来次第向かいます。」

「では私はこれで。」

どうやら、今までの功績と今回の戦闘の結果。私は主戦線にして戦争目的の1つでもあるオスティア方面に派遣されることになったようだ。それをラリーに話すと。

「そりゃ、さびしくなるな。しかし、お前があっちにか……」

「ええ、今までありがとございます。」

「じゃあ、お礼ついでに少し頼みごとを聞いてくれるか？」

「できることなら。」

「何ここより大戦の中心といってもいい所に行くんだ、だからな……」

「……この戦争について調べてくれないか？」

「この戦争について……」

「ああ、この戦争はどこがおかしい。帝国の戦争目的のオスティア奪還にしても何故今更あんなところを？それ以外の目的も余り納得できるものじゃねえ。始まりもよくわからねえからな。だから、この戦争の中心近くに行くならそれを調べてくれ。何できる範囲でいい。」

「分かったわ。私も気になってはいたからね。」

「ありがとよ。じゃあ、皆に知らせて送別会の準備でもするか！」

「ふふ、楽しみね。」

その後、送別会をもらった翌日、私はオスティア方面へと出発した。

---

暗く光もほとんど無い場所で複数の話し声がする

「アチラはどうなった？」

「失敗だな、邪魔者がいた。暫くは無理だな。」

「だが、すでに飛ばしてある。」

「そうか、向こうも頑張りすぎたものがいたらしくてな。ちょうど交代になるだろう。」

「それは良い。嗅ぎ回っている者もいるが問題なからう。」

「ああ、アノ方もお喜びにならう。」

「うむ」

「奴らは？」

「大丈夫だ。気がついてない。」

「そうか、ついに我々の悲願が」

「「全ては 様のために。」」

「「「「全てはあるべき姿に。」」」」

「「「「「「全ては本来の持ち主のモノに。」」」」」」

暗闇に声が反響しそして消えていった。まだ、誰もその存在を知らない……

## 大分裂戦争<序>(後書き)

機械獣の力強さは表現できたかな？何の間のでマジンガーと戦えたのでかなりの力はあると思うので…

もう1、2話は機械獣を活躍させたいです。てか、大戦しか活躍の機会があまり無いので……。学園編で出したらもうねw

あ……前回の次回予告でいった原作キャラだし忘れたw

### 次回予告

「オスティア方面。今大戦での激戦区……、この戦争はどこに向かうのか。」

次回 真ネギま マギカZ

大分裂戦争<激戦区>

大分裂戦争<激戦区>(前書き)

タイトルに偽りありだなあ…。

## 大分裂戦争<激戦区>

今私はオステイア攻略軍本部の作戦会議にいる。

「では、私達は第11軍団と共に行動すればよろしいのですか？」

「そうだ。我々は聖地オステイア奪還作戦を再度おこなう。我々、第11軍団は陽動もかねてニヤンマド攻略をおこなう。貴様ら傭兵もその作戦に参加しろ。」

「了解しました。」

「お、隊長がお戻りのようで。」

「ええ、今帰ったわ。」

「それでどうだったんだ？またオステイアを攻めるとかって噂は流れているがよ。」

「私達はそのオステイア攻略のための陽動としてニヤンマド攻略を目指す11軍団と行動することになったわ。」

「おいおい。オステイアだけでも驚きだったのにニヤンマドもだあ？上の奴らは一体何を考えてるんだか……。」

「しかも、私達は11軍団の陽動として働くことになるでしょうね。」

「陽動の陽動かよ。あいつら一体傭兵を何だと思っていがるんだ。」

「仕方ないわよ。本来の傭兵っていったらお金で戦争をするって物なんだから。」

「だがなあ、今回の大戦じゃそうじゃない奴も結構……。止めた止めたこんな事言ってもしょうがないか。しっかし、こんなに戦線を広げて大丈夫なのかねえ。前回のオステイアで失った戦力だってまだ回復してねえってのに。」

「上は前回の敗因を連合の凄腕集団によるものと思ってるそうよ。で、現在その人達は辺境の戦線にいるらしいから大丈夫だろうって。」

「そんな簡単にいくものかね。で、ニヤンマドの方はどうするんだ？あいつらのやる気なら問題ないが正面から行かされたら流石に洒落にならねえぞ。」

「そのときは機械獣を総動員するは。詳しい作戦はまた後であるでしょうけど。彼方の知り合いの人に頼んで、正規軍も少しつけてもらえない？」

「それなら心強いな。当たってはみるがあまり当てにはするなよ？」「そんなに多い必要はないわ。それに向こうの情報を知れるほうがもつと重要だから。」

「なるほど、確かに快進撃を続けて気がついたら敵中ど真ん中味方は撤退済みつてのは勘弁してもらいたいな。」

「ええ、だから向こうと連絡が取れる人を頼むわね。」

「りよ〜かい、そこは任せてくれ。」

そう言つて、彼は知り合いに連絡を取りに言った。

ちなみに彼は新しい副官でフラガさんと言うの。もつとも、前回と同じで実質彼が隊を回しているんだけどね。元正規兵らしいけど、軍の無茶苦茶な作戦におこつて上官を殴つて除隊その後、傭兵として改めて参加している見た。

この戦争、始まつたまだ1年くらいとそんなに時間はたつていないのだけれど、戦争目的があやふやで上層部の将校の人達はともかく末端の兵士になってくると何故戦争をしてるか分からず士気が高まるどころか厭戦気分がそれなりに高い。

それに将校の人でも皆が戦争継続を叫んでいるのではなく、こちらもそれなりの数の人が疑問に思っているらしい。フラガさんがお世話になったハルバートンつて人も何故こんな戦争を起こしたのか、何故続けているのか不思議に思っているみたい。

元々、私がいた地方の戦線でも連合・帝国双方でそのような思いを持つている人が多かったが、どうやら主な戦線や街でもそれは同じ思いらしい。しかし、王族や大臣、将軍でオステイア奪還を叫ぶ人もそれなりに居てその人達が国の方針を決めているから現在の状況



何だって噂も聞こえてくる。

連合と帝国の仲は確かに良くはないがこんな戦争を起こすほどのものではなく、オステイアにしても確かに文明発祥の地であり聖地として名高く日頃からそこを帝国に奪還しようという人もいるが多くの人達にとつて戦争の理由になる土地でもない。

聖地といつても宗教的聖地、例えばエルサレムのような場所でもなく、発祥の地にしてもあまりにも古く魔法世界全体での発祥の地なため、地球で言うところの人類発祥の地つまりアフリカといった具合でこちらでも戦争をしてまで求める場所ではない。

他にも資源などの理由があるがオステイアは空中に浮かぶ土地逆に負担になりかねない危険がある。そもそもこの魔法世界はまだまだ未開の土地が連合・帝国双方にあるので戦争よりそっちを開発したほうがよほどいい。

そのような理由があつて、疑問の声は多く何度か和平交渉をしようとしたらしいが毎回妨害があり成功していない。それも双方で起こった事なので和平派も今では向こうが戦争を継続する気なのかとあまり活発ではない。

ラリーさんに頼まれて調べてはみたけど、分かったことは「何故戦争を継続しているか分からない」なんてことだった。それを知らせたら、向こうもあきれていたわね。他にも無茶な作戦がそれなりにあるってこのもその理由だろうけど。

戦争の被害で大切な人が傷つかなかったためと思つて参戦したけど、この戦争の終わりはいまだに見えないわね……………。

「まさか本当に正面を任せられるとは……………。で、本隊は迂回してニヤンマドを目指すね、作戦つて言えるのかねこれ。」

「まったくね。戦力も1個旅団が良いところかしらこっちは？」

「だな、軍からもあまり兵力は借りれなかったし。ホントに連絡くらいだな、それより少年兵が多いのが気になるぜ。」

「ええ、彼らは後方に下げたほうがいいわね。」

「ああ、そうしてくれ。あんな若いのにまだ死ぬ必要なんてない。」  
「他の隊長さんたちにも言ってくるわ。」

「頼む。」

ちようど作戦会議の時間だったのでそのことを一緒に伝えたら、他の人たちも了承してくれた。

作戦については何かやるうにもここからニヤンマドの守備隊がいるだろう場所まで何も無い平原なので、機械獣を先頭にし各傭兵隊が後ろに付きホローくらいしかないだろう。

傭兵隊長の一人が自分達の装備がもう少し良ければ機動戦をしても良かったかもしれないと思ってたけど残念ながらそこまでの装備はなかった。

その後細かい打合せをした後、皆明日に備えて休息に入った。

「じゃあ、呼び出すわね。大丈夫だろうけど一応注意してね。」

「了解。お前らぼけつとするなよ！」

「ああ、頼むよ。派手に行こうじゃないか。」

この人は一緒に行動する傭兵隊の隊長のバルトフェルトさん。何でも親睦を深める宴会でフラガさんと気が合ってそれならと一緒に行動することにしたらしい。

「いでよ機械獣軍団！」

私の呼びかけに応じて次々に機械獣たちが姿を現す。今回の作戦は長時間になるため機械獣を半数に分け交替で出すことにした。他にも緊急事態用に機械獣の中でもとくに強力なものは呼び戦力として待機してある。

それでも次々に出現する機械獣の群れには圧倒される。ここまでの数を出したことが無い事もあるけど、その姿は見る者を威圧する。

「凄まじいなあ。」

「だねえ。鬼神兵もすごいがこの機械獣はそれとはまた違ったすごさがあるね。まあ、問題は……」

「だな、相手が気の毒だが頼もしいものだ。ああ、問題は……」  
「見るからに悪って感じの風貌ばかりだな。」  
人が気にしてることを……。そう機械獣は非常に頼もしいのだがどれもこれも強烈な印象のばかりでしかかもその風貌が悪っぽくて……。一度機械獣で人助けをしたことがあるのだけど。そのときは取って喰われるんじゃないかとおびえられたし。

その後、順調にニヤンマド手前まで進撃して現在本隊の到着待ちと街攻略前の休息に入っている。

「思ったよりも被害がなかったわね。」

「ああ、敵もほとんど出てこなかったからな。」

「こうなると、陽動としては失敗してるんじゃない？」

「かもなあ、今頃向こうが喰い付かれてるんじゃないのか？」

「いや、こつちは元々双方が重要視していなかった場所だからね。根本的に戦力がないんじゃないかな。で、そこを突いて慌てた連合がオスティアの戦力を回す。つてのが上の考えだろう。」

「じゃあ、現状でも問題はないかもしれないわけね。」

「ああ。だが問題がないわけじゃあないんだよ。」

「何かあるのか？」

「なに、紅き翼の事がちょっとね。」

「それって連合の凄腕傭兵集団だろ。確か边境の戦場にいるんじゃないか？ たか、今。」

「その边境の戦場つてのがここの北なのだよ。」

「それは、また……」

「近いわけじゃないが遠いわけでもない。下手に長引くと駆けつけて来るかもしれない。」

「そうね。街の攻略を早めた方がいいかしら？」

「それより、撤退したほうがいいかもね。この作戦はあくまでもオスティア奪還作戦の陽動なんだし。」

「やめとけやめとけ、戦場で不吉な事言っているとたいがいろくでも

ないことが「伝令！」おこつたな……、俺には予知とかそんな能力はないがこれはろくでもないことだと思つぞ。」

「そうと決まつたわけではないだろうに。それに君にはそんな能力ありそうなのだけどね。」

「で、なんて書いてあるんだ？」

「やっぱ君には予知能力があるよ。本隊が紅き翼に噛み付かれたらしい。増援を送れだど。」

「不吉なことが当たる力なんているか。しかし増援ね。うちにいるので紅き翼にかなう奴なんているのか？」

「ママが対抗できるだろうけど。流石に一人じゃね。ママどうだろっ？」

「そうね。機械獣の中でもとくに強力なものを出してみるわ。それに時間稼ぎなら何とかなるかも。」

「じゃあ、俺もついて行こう。説得のときに役に立つかもな。」

「なら君たちの隊は僕に任せてくれ。彼らが来たとあっちゃさつさと逃げ出さないかね。」

「ごめんなさいね。」

「なになに、問題ないさ。ダコスタ君ならきつちりやってくれるだろう。」

副官の人の心の中で謝りつつ私達は出発した。

## 大分裂戦争<激戦区>(後書き)

終着点は決まってるけどその理由付けが難しい……

次回は紅き翼との戦闘です。といっても撤退支援なので期待はしないでねw

大戦の終結と黒幕、最終章は何とか形になってるけど学園編が……。

次回 真ネギま マギカZ

「本隊の撤退支援のため単身紅き翼に戦いを挑むマミ！撤退は成功するのか」

次回 大分裂戦争<撤退戦>

## 大分裂戦争<撤退戦>(前書き)

セリフばかりだ……、どうなんだろうこれ？

後またサブタイがW紅き翼のほうが良かった気がするなあ。

前々回書き忘れてましたが、本作の鬼神兵は18mかな？

大半が18mくらいで機械獣と同じ大きさです。原作だとどれくらいなんだろう？

## 大分裂戦争<撤退戦>

バルトフェルトさんに別れを告げ現在私達は本隊のいるだろう場所に向けて飛行している。

フラガさんは鷹の獣人で魔法によってさらにスピードを上げていて、私はスクランブルダッシュを展開している。

「それでどうするんだ？本隊のほうは俺が説得するにしても撤退が始まるまであいつ等を抑えてないといけないぜ。お前一人で大丈夫か？」

「さすがに1人じゃ無理だから機械獣も中でもとくに強力なもの2体を出すわ。」

「ふむ、あいつらは4人だったか5人だったかのはずだしそれなら時間稼ぎなら何とかなるか？」

「ええ、フラガさんはその間に撤退の説得をお願い。もしかしたらこっちでも停戦できるかもしれないし。」

「ああ、任せてくれ。」

「そろそろ見えてくる頃のはずだけど。……あれね。」

「だな。とんでもないな紅き翼つて奴らはここからでも魔法が見えるぜ。」

「フラガさんは先行して撤退要請を私は機械獣を呼び出してから彼らに攻撃をかけるわ。」

「分かった気をつけるよ！」

「彼方もね！」

フラガさんが発見されるのを避けるため低空に下りていくのを見送りつつ呼び出す機械獣を考えた。

（あの2体は呼び出したことはないけど十分強力だろうから時間稼ぎなら何とかなるはずね。でも、妖機械獣やラインX1が使えないのはこんなときには痛いわね。）

妖機械獣はミケーネのオリジナル品、ラインX1はシュトロハイム

博士の作品だからヘル機械獣が呼び出せるこのアーティファクト  
だと呼び出せ仕様らしい。

ミネルバXは呼び出せてもよさそうだがどうも無理なようだ。

(できないことを考えてもきりがないわね。)

「参陣せよ！ガラダブラMk01！アシユラ！」

光と共に出現してきた機械獣を確認してしばらくして。私は驚きに  
包まれた……。

よお！俺ナギ・スプリングフィールドってんだ！！誰に言ってるの  
かわからねえが、言っといたほうがよさそうなんぞな。

今俺たちはアルギュレーの辺境から連合の中央に戻るところだ。辺  
境に追いやったくせに戦況がやばいってんで呼び戻らしいってア  
ルの奴が言ってたな。

で、その途中で帝国の大軍を見つけたんで現在そいつ等に攻撃をか  
けてるところだ！

「しっかし、こいつ等なんでこんな所に軍を派遣してるんだ？」

「おそらくこの付近の中心都市であるニヤンマド攻略をするため  
しよう。」

「オステイアも2度目の侵攻があったみたいだからその陽動も兼ね  
てるんだろう。」

「んなこたあ、終わってから考えればいいだろ。今はこいつらを蹴  
散らそうぜ。」

「だな！詠春もアルも気合入れろよ！」

「お主等はもう少し考えたほうがいいぞ。」

「じゃあ、もう一発デカイのいきますか！」

「百重千重と重なりて……」



俺が千の雷を放とうと詠唱に入ったときに……あいつが現れた。

サンダーブレーク！

規模で言えば千の雷のほうが大だがパワーだけならため張れそうに強烈な電撃が俺たちの間に撃ち込まれた。

「だれだ！」

その電撃（サンダーブレークだったか？）が放たれたほうを見れば、巨大な2体の巨人？を従えたあいつがそこにいた。

「軍のほうには手出しさせないわよ！」

（ふう、何か大きな魔法を放とうとしてたけど何とかこっちに注意を向けられたわね。）

紅き翼の人達を見ながらどうやって軍に手を出させないか考えていると。

「お！お前マミじゃねえか。久しぶりだな！」

「え？ラカンさん！？あれ、彼方って帝国にいたんじゃ？」

「何だよラカン知り合いか？」

「おお、何年か前にな。いやあ、こいつらの始末依頼されたんだが気に入ってな！今は一緒にいるんだよ。」

「気に入ったって……、でもそれなら都合はいいかな？今軍のほうでは撤退の説得中でそれが成功したら手を引いてくれませんか？こっちに向かっていた傭兵隊のほうもすでに撤退の準備に入っていると思うので。」

「ん〜、どうするナギ？俺は別にいいと思うが。」

「そうですね、彼らに攻撃したのも街を攻撃しようとしていたからですし。」

「それが撤退するというなら攻撃する理由はないか……。」

「じゃな、どうするナギ？紅き翼のリーダーはお主なのじゃし。」

「そうだな……、なあラカン」

「なんだ？」

「アイツって強えか？」

「そうだなあ、始めて見た時はてんで駄目だったけど今は結構いけるんじゃないか？」

「そうか！それにアイツが弱くても後ろのアレは強そうだな。」

「おそらくアレが今、帝国で話題の機械獣じゃないでしょうか？」

「あの鬼神兵の数倍は強いと噂の兵器か。解放しに来た街で逆に侵略者と勘違いされたりと有名じゃったな。」

「アレはその中でもとくに強力そうだな。……って、ナギまさか！」

「おう！おい！マミって言ったか？その条件いいぜ」

「そう良かった。じゃあ、「けどな！」え？なに??」

「俺達と勝負しろ！」

「おう！お前がどれだけ強くなったか見てみたいからな。」

「おいラカン、俺が先だぞ！お前は後ろの髑髏の方をやれよ。」

「いいじゃねえかよ、ケチくせえな。まあ、アレはあれで楽しめそうだな。」

「やれやれ、こうなったら止まりませんね。マミさんでしたか？こちらの条件を呑む代わりにしばらく付き合ってもらえませんか？」

「すまん、この脳筋たちが……」

「詠春、諦めも肝心じゃぞ？」

なにやら話がどんどん進んでいる……。でも、彼らがあつちを攻撃しないならいいかな。最初から戦う予定だったのだし、被害がなくなっただけでも御の字かな。それに紅き翼って原作でもバグやチート級戦力の集団だったからそれと手合わせできると考えれば良いかもしれないわね。

それにいずれ、戦うハーデスはもっと強いんだろうし。終戦後に彼らと一緒に修行できればマジンガーの力も完全に発揮できるかも。

「分かったわ。戦うのはラカンさんと、え〜とナギ君でいいの？そうなるらと機械獣は片方戻したほうが……。」

「いや、そつちの顔が半分になつてる方は詠春が戦う。」

「おい！ナギ。」

「いいじゃねえかよ。それにお前も武者修行つてんでこつちに来たんだろ？それならアレと戦つても損はねえぜ。」

「確かにあんなものとは早々戦うことはないが……」

「いいのではないですか、向こうも了承してくれたようですし。といつても壊してしまつても大丈夫なのでしょう？」

「大丈夫よ。」

「のようじゃな。」

「はあ、でも確かにあれほどのものと戦える機会は早々無いか。マミさんよろしくお願いします。」

「分かりました、こちらもよろしくお願いします。ガラダブラはラカンさんのほうをアシユラは詠春さんの方をお願いします。」

両機械獣は了承し私から離れていった。

目の前にいるマミは剣を片手に持ち臨戦態勢に入っている。

「じゃあ、名乗りからいくか！俺はナギ・スプリングフィールド！最強の魔法使いだ！！」

「じゃあ、私も。偉大な勇者！マミ・トモエ！いくわよ。」

「さあ、来い！」

ラカンの話じゃ戦い方はてんで駄目だったらしいが、そのときでも力やパワーは凄まじいらしい。くく、楽しそうな相手だぜ。

「ちえ、ナギの奴楽しそうだなあ。俺も戦いたいつてのに。」

前見たときよりも格段に動きが良くなっているマミを見て期待してたつてのに。

「……待てよ。あいつも誘っちまえばいいのか。そうすれば機械獣やアイツとの勝負をいつでもできるんだし。」

「……、我ながら名案だぜ。後で実行しないと！」

「まあ、今はお前との勝負だな。ガラダブラだったか？魔獣はいる見る見てきたがお前はその中でも飛び切り凶悪で強烈だぜ。」

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

ラカンの言葉に反応するようにガラダブラは咆哮をあげ髑髏状の頭部は天を向き、2つある蛇状の頭部は激しく動き相手を威嚇した。

「じゃあ、いくか！」

俺は多数の剣を投擲しつつガラダブラに向かって突進した。

「なんとというか、楽しそうだなあの二人は。さて私も始めるか。」  
それにしても変わった感じのものだな、こいつは。身体はロボットぽいとはいえ十分人間の感じ出し、頭部形状の人間のものなんだが何で顔が左右で違うんだ？それもやたらリアルで男女で分かれているし。

「ああ、待ちくたびれたぞ。」

「……………え？喋った？」

え？喋りたいよな、今。機械獣って喋るのか？それともこいつだけがなのか??

「我名は機械獣アシュラP1。」

「我主マミ様の命により。」詠春とやら、手合わせ願おうか。」

男性のほうに喋ったり女性だったりいつせいに喋ったりとまた妙な……。だが名乗られたからには名乗り返さないとな。

「神鳴流剣士 近衛詠春！いざ尋常に勝負！！」

「ふふふ、ゆくぞ！」

見た目は変だが油断はできない。こちら全力でいかないとな。

「やれやれ、ナギのでたらめさは慣れたのですが、それと渡り合える人がこうもいるとは。」

「ラカンもすごいが、あのマミも凄まじいものじゃな。技術ではまだナギが上じゃが。」

「ええ、魔法をくらってもモノともしてませんね。繰り出す攻撃もラカンくらいはあるんじゃないでしょうか？」

「じゃな、おそらく身体能力ではあいつ等より遙かに上なんじゃろ。」

「その身体能力が脅威ではあるんですけどね。あの技量であの破壊力は彼女もバグかチートの仲間なのではないでしょうか？」

「かも知れんな。ラカンのほうは…派手じゃなあ。」

「彼とあの大きさじゃしょうがないのでは？こちらはラカンが優勢でしょうが。」

「そのようじゃが、向こうもあまり効いている様子はないの。これはガラダブラじゃったか？がすごいのかラカンの奴がめちゃくちなのか。」

「1.5倍はあるでしょうからね。おそらくラカンでしょう。普通は戦うことすらできないサイズと能力差でしょうし。」

「実際に詠春はかなり苦戦しておるの。」

「ははははは、どうした！そんなものか！」「それでは我主と対する事すらできぬぞ。」「死ねえい！」「」

「くーやりにくい。さすがにキツイな、だがこれくらいで負けるものか！」「」

「向こうは1.0倍がいいところじゃろうが、やはりサイズと装甲は厄介なようだな。」

「あれらより格下でも普通の魔法使いの中級呪文を無力化してしま  
うようですからね。ましてあのアシユラは人のように考え行動する  
のですからさらに厄介でしょう。」  
「関節を狙っているが見抜かれているようじゃからな。確かにアレ  
はやりにくいの。」  
「ですが、優勢劣勢といつてもすぐに勝負が決まるほどのものでは  
ないですね。」  
「ああ、これはいつぞやのように長引くぞ。」

その後、彼らは十数時間戦い（長いな！by撤退の連絡に来たフラ  
ガ）、周辺一体を更地にしたところで（おいおいおいby見ていた  
ry）

「そろそろ止めにしない？」

「何だよ。まだまだいけるぜ！」

「そうだけ。やっとガラダブラから腕一本もぎ取ったつてのによ。」

「よくもぎ取れたな……。」

「ぬう、ガラダブラMk01が…、敵は討つぞ。」

「討たなくていいから！私は冗談抜きで死んでしまつぞ。」

「確かにもう少ししていたい気もするけど、そろそろ彼方たちも目  
的地に向かったほうがいいんじゃない？」

「そうですね。元々そちらが本来の目的でしたし、帝国軍も撤退し  
たとあつてはいい加減向かったほうがいいでしょう。」

「んだよお。どうせ行つたところでつまんねえんだし。」

（ここはさっきの事切り出すのがよさそうだな！）

「じゃあ、マミお前も俺達の仲間になれ！」

「お！ジャックいい案だなそれ！そうだマミお前も俺の紅き翼に入  
れよ。」

「え……、それはちょっと。」

「そうだぞ。皆ラカンのように無茶苦茶じゃないんだから……。」

「じゃあ、何か連絡取れるものよこせ。それならいつでも手合わせができる！」

「それならかまわないわ。私もちょうどそうしたかったし。」  
皆と連絡先を交換した後また会う約束をして分かれた。

「さて彼方たちを戻しましょうか。」

「それなのですがマミ様。」

「そうしたの？」

「私を副官として側につけて貰えないでしょうか？」

「え！でも彼方たちは戻さないと修復とかができないし。何よりそのサイズじゃ。」

「それは問題ありません。」「私はサイズを人間大にすることもできます。」「また、戦闘をしなければ向こうに戻るほどの磨耗をすることもないので大丈夫かと。」「

「そう、少し考えさせて。どちらにせよ今日の戦闘の傷の修復のために1回は戻らないといけないのだから。」

「了解しました。では、必要になりましたら。このアシユラをどうぞお呼びください。」「

「ええ、その時はよろしくね。」  
そういつて、2体を戻した。でも、彼（彼女？）を呼んだときも驚いたけどまさか副官について。

でも、参加してから各地を転々としているし。固定の副官を持って良いかもしれないわね。

「ま、明日になってから考えましょう。今は皆のところに戻らないとね。」

その後、撤退した彼らに合流拠点へと帰還した。  
オステイア奪還作戦はやっぱりというか失敗したらしい。いくつかの部隊は防衛のため残ることになったが私たちや正規軍の多くが帝都へと一時帰還していった。

「どことも知れぬ闇の中蠢く影がなにやら話し合っていた。」

「どうやら無事失敗したらしいな。」

「ええ、しかし連合も同じくらい疲弊してしまったのは少々誤算でしたね。」

「奴らももう少し早くつくと思ったのだがな？」

「途中で足止めをくらったようだ。」

「しかし、そちらの帝国の損害も少なかったようだ。」

「アレが思いのほか使えたようだ。」

「ふむ。しかし、帝国の力をそぐつもりでいたが現状では代わり映えなしか。」

「そうになると、アレをやりますか。」

「できるのか？失敗すれば戦争は終わってしまうぞ。」

「問題ありません、奴らも帰還しました。後は帝国の奴を離しておけば、帝国の力は大幅に落ちるでしょう。」

「うまくいけば逆進攻も可能か。最悪奴が感ずいて向かったとしても。」

「そう多くの兵は救えないでしょう。救えても当分戦線復帰は難しいかと。」

「講和派の連中は納得するのか？」

「そのための理由と資料はすでに。会談の準備も進んでいるとはいえ、問題は無いでしょう。」

「連合はどうだ。あまりにも不甲斐ないと成功してしまいますぞ。」

「現在戦力を集結中です。帝国兵はあそこから一步も出られないでしょう。」

「さらにアヤツ等もいる…か。ふむ、問題なさそうだな。」

「他に何かあるか？」

「以前から嗅ぎ回っていた者なのですが。」



「何かあったのか？」

「どうやら奴らには行き着いたようです。」

「ほう、なかなか優秀なようだな。」

「ええ、そうですね。しかし奴らに食いついたならある意味都合が良いのでは？」

「そうじゃな。奴らの情報をそれなりに流してやれば、それに気づいた奴らが勝手に始末してくれるじやろう。」

「そうですね。その案でいきましょう。」

議題にも一息ついたのだろう。雑談に入った。

「しかし厄介なものだな。これだけあおってもあまり進展しないというのは。」

「向こうの人たちがうらやましいですね。」

「ああ、向こうは多少あおって戦争に突入すればそれで事足りる。」

「こちら側からの妨害も多少あるようですが？」

「前はそれに煮え湯を飲まされたようだが、今はそんなもので止まるような状況じゃないそうだ。」

「転がりだした石は止まらない、ですか。」

「まさにそのとおりだな。」

「最も行き過ぎて今では起こすこと自体難しくなっちゃったらしいがな。」

「なんともまあ。」

「今はターゲットを変えているそうじゃな？」

「でしょうね。不満を持っているものはまだまだ多くいるでしょうし。」

「かつて程ではないが、より多くの混乱か。」

「こちらは不満は多いでしょうが、ある意味で安定していますからね。」

「ああ、小競り合いが多いが向こうと比べるとな。」

「昔は向こうのほうが大変だったようですね。」

「こちらの小競り合いの規模を小さくしたものだからな。」  
「まさにスポーツですか。」

雑談も一段落したとき一人が

「あの方の様子はどうです？」

「お目覚めになる回数は増えてはきたがまだだな。」

「何が足りないのでしょうか。」

「器が問題なのでしょうか？」

「馬鹿なアレが今の器なのだぞ。」

「そうなる为一体。」

「おそらく力そのものでは？」

「“力”？」

「ああ、この世界の成り立ちは知っていますよ。」

「なるほど、そうなるこそちらのほうも。」

「ああ、準備しないとな。」

「それにそうすれば世界は。」

「混沌と憎悪に…、アチラも多数集まりますし。いい事だらけですね。」

「ふむ、我々は急ぎすぎていたのかもしれないな。」

「仕方ないでしょう。あの御方が目覚め始めたと聞けば誰だって気がつかぬ内にそうなります。」

「ええ、今からしつかりと先を見据えて動けばいいのじゃからな。」

「では、私達は」

「ああ、そちらは任せた。あれらにもそれらしいことを吹き込んでおけ。」

「ええ、わかっていますよ。全ては」

「……「我らが主！この世の真の所有者！」

様のために！

！」「」「」

影は順次消えていき再び闇が多いつくした。

## 大分裂戦争<撤退戦>(後書き)

ええ〜と、あいも変わらず戦闘描写ないです……。でも、最終決戦はきっちり書きます！マミの相手と結末は決めてあるのでそこはしっかりしたいですし。

アシユラどうでしょう？思いついて書いてみたけど……。あまりにも不評だったら今までどうりかな。Dr・ヘル一味は結構好きなんですよね。

最強機械獣はこの2体かな。他にもいるだろうけどとりあえずでw もう1体いるけど、あれは使いどころが難しすぎる。DVDで見たけどかなりの制限つけないとちょっと……。

### 次回予告

「今大戦で最大規模の戦闘。帝国の乾坤一擲の大作戦。迎え撃つ連合、そのとき彼女は」

次回 真ネギま マギカZ

「大分裂戦争<グレートブリッジ>」

サブタイに偽りなし！……のはずw

## 大分裂戦争<グレート・ブリッジ1>(前書き)

気がついたらPV6000ユニーク10000突破!

ありがとうございます><

やっとグレート・ブリッジまで来ました!

1話で終わるかと思ったら長くなりそうなので分けます。

## 大分裂戦争<グレート・ブリッジ1>

紅き翼との戦闘後撤退した先で待機すること数週間後、帝都からの使者が

「先日の作戦において、本隊の撤退を援護その損害を軽微に抑えたことまた連合の精鋭集団<紅き翼>押し止めていた功績と実力を認め、我々は貴君を王族付きの護衛官とする。よってすみやかに帝都に帰還せよ。よくやった、栄転だな。」

「わかりました。皆に挨拶をした後に向かいます。」  
「遅れないようにな。」

その後フラガさんや隊の皆に挨拶をして回っていると

「まあ、アレだけの事ができるんだからな。けど寂しくなっちまうな。」

「ママさんは数少ない女性ですからね。」

「まったくだ折角再会したつてのにもうお別れとはね。」

「ああ、まったくだ。」

そうそう、ラリーさんやチョッパーとも再会したの。

「ええ、残念ね。でも、傭兵部隊がこんなに集まるなんて珍しいわね。」

傭兵がここまで集まることはあまりない、基本的に予備兵力や正規軍の通常編成+ の戦力が欲しいときに使われるのが傭兵なのだから。

「前回の戦いで正規軍がこっぴどくやられたからその代りじゃないか?」

「だろうな、戦線もいくらか下げたようだし。本国から増援までの繋ぎだろう。」

「そんなところかしらね。じゃあ、遅れるとまずそうだからもういいわ。何かあったら言ってね。すぐに戻ってくるから。」

「おいおい、それじゃあ護衛官どころか、帝国軍からも追い出され

かねんぞ。」

「いいわよ。元々戦功の為に参加したんじゃないんだから。それより、親しい人達が傷つかないようにすることがもっと大事よ。」

「俺たちや、傭兵だぜ?」

「それでもよ。」

「じゃあ、やばくなったら作戦中でも遠慮なく呼び出そうかね。」

「ふふ、すぐに駆けつけてあげるわね。」

そう笑いあつて、まずそんな事態にならないだろう約束をして私たちは別れ、私は船で帝都へと向かった。

「マミ様あまり嬉しくないようですね。」

「ええ、戦いたいつて分けじゃないけど。護衛官になったとしても戦争の終結には役に立てそうもないからね。」

宮廷作法なんてものもまったく知らないのだから。

「なるほど、マミ様は親しい人が傷つかないようにと」「戦争が一刻も早く終わることを願って参加されたのでしたね。」

「ええ、でも護衛官じゃ周りの皆を守ることさえできないからね。」

「なるほど、しかしそれならば」「王族の近くに居ることになるわけですから。」「マミ様自らが皆に停戦を訴えてみてはどうでしょう?」

「なるほどね。そんな考え方もあるわね。」

確かに王族付きの護衛官になるのだから人脈作りにはちょうどいいかもしれない。それに護衛官なら和平交渉にも付いていけるのだから妨害も防げるかもしれない。

「このあしゆらも微力ながらお手伝いいたします。」

「ええ、色々相談に乗ってね。」

一人旅つてのも寂しいからあしゆら呼び出して話し相手になつてもらっている。ちなみに彼(つて事にしておく)の服装はおなじみのアレである。

でもさつきから、よく兵員輸送船とすれ違つわね。前線への補充に

してもこの数は。

「アレは……」

「あの紋章は帝国の精鋭部隊のものでしたかな？」「確かに妙ですね。」「あのような部隊は早々動かすものではないはずなので。」

その後しばらくして部隊とすれ違うことはなくなり、数こそ多いがただの補充かまた大規模作戦に向けてなのかと思いきそのことは頭の片隅に置いた。

数日後、無事帝都に到着し王城に向かおうとしたとき何故あれだけの兵員輸送船が精鋭部隊が傭兵たちが集められているのか、その理由がわかった。

<昨日！我々帝国は連合の喉元にあるグレート・ブリッジへ帝国が誇る大規模長距離転送魔法によつて精鋭軍団を送り奇襲・占領した！！これによりもはや連合は風前の灯である！我々の勝利の日、そして聖地オスティアの奪還は近い！！>

「何ですって！」

そんな、勝利どころか終戦がより遠退きかねない。それどころか帝国が敗北する可能性だつて。

「アヤツ等は地図も読めぬのか？」「グレート・ブリッジ（以下G・B）を占領したとて補給が続くまい。」「連合の喉元、確かにM・Mの至近ではあるが。」

「ええ、連合もそこまで柔ではないでしょうし、首都に近いって事はそれだけ増援が送り易い。」

「されど、帝国からG・Bは遙かかなた。」「しかも途中にはオスティアに居る連合の防衛軍もいる。」「海を使おうにも制海権はアチラのほうが優勢。このままでは。」

補給が途絶えた軍の末路は古今東西皆同じだ。

「G・B攻略軍は最悪消滅、そうじゃなくても大半の戦力を失うこ

とになるわ!」

「「侵攻に使ったものも転送魔法というのもまずいですね。」「」  
彼らに帰りの足はない。」「大半どころか2、3割が戻ってくれば  
恩の字か……」

本当にこの作戦を考えた人は何を持って成功すると考えたんだ!正  
規軍がこの規模なら傭兵も!

「ラリーさん達ももしかして!」

ここまで大規模ならあそこに集結していた用兵の数も合点がいく。  
私は慌ててゼウスからもらったあの紙を取り出し繋げてみた。これ、  
声さえも届けられる上に距離は関係ないとかなり便利だったので重  
宝していたが。

しばらくして、応答があった。

<マミか?>

「ええ!今帝都に居るのそれで」

<って事はもう知ってるな。今俺達はG・Bだ>

「やっぱり。」

やっぱり、あそこの傭兵たちも送られていたのね。

<今はまだ連合は攻めてきていないが時間の問題だな。さつきから  
偵察らしきものがちらほら見えている。>

「持ちこたえられそう?」

<無理だな。もって1週間とこだ。それだっただいぶ甘い見積も  
りだからな。何せ長距離転送で奇襲占領って作戦なせいで鬼神兵や  
艦艇はほとんどないからな。せいぜい18mクラスが十数体じゃね  
えか?>

いくら連合が帝国より魔法技術で遅れているといってもあまりにも  
少なすぎる。それに18m級じゃ艦艇からの砲撃をくらったらひと  
たまりもない。

「要塞のシステムは?」

<解析して入るがどうだろうな。そう簡単には使えねえだろ、連合  
だって馬鹿じゃねえ。>



やっぱりそう簡単にはいかないか。

<それに悪いニュースも入ってる。>

「まだあるの？」

>  
<ああ、飛び切り悪いものがね。紅き翼が前線に復帰したみたいだ。

「え！でも数日前は何も。」

<それはわからねえ。だが確実に居るらしい。他の場所から転送されてきた連中が話していたからな。>

「そんな彼らが居たんじゃ。」

でもなんで、彼らが居るって事が知られていなかったのだろう？

<下手すればもって1日だな。あとは必死に逃げるか玉砕するしかねえよ。>

「そんな……。今から私も！」

<やめとけ、お前一人が来たところでどうこうなるもんじゃねえ。

それよか、お偉いさんにもう二度とこんな事させねえよ見張っててくれ。>

「でも！」

<無理だよ。どう頑張ったところでこれだけの人員を運ぶための船を数日中にこつちに寄越すなんざ。しかもそれが無事に着くかどうかも怪しいしな。>

「……………」

じっさい、低速とはいえ帝都とあの拠点まで数日も掛かるのだ。軍の高速船でもG・Bまでになるともつと掛かるだろうそれに問題は他にもある。

<だから頼む。もっと出世して、上を目指してこんな戦争をおこさねえように……………」>

「……………それがラリーさんの夢？」

<ああ、この戦争に参加したのだからお前と似たようなものだからな。じゃあ、そろそろ時間なんでな。相棒も待っていてくれる。なあに、今の相棒もお前に劣らずすげえ奴だし俺もすげえからな。

死にはしないさ。じゃ、あばよ。>

それつきり通信は切れた、他の人にも連絡はしてみたが皆同じようなことを言われてしまった。

「そんな、また会うつて約束したのに……。」

「「マミ様。」」「今は何ができるか考えましょう。」「落ち込んでいても何も解決しません。」

「ええ、そうね。でもどうしましょう……。諦めるなんて論外だし。」

「軍高官を説得しようにもあてもないですからね。」「また、彼が言ったとおり救出しようにも現在帝国が保有している輸送船では危険が大きい。」「距離だけならば来るまでにすれ違ったあれらが向かえば何とかなるでしょうが。」「」

現在の帝国の勢力圏とG・Bの間には連合の部隊も居るだろうし何よりG・B周辺は完全に連合の勢力範囲だ。護衛艦があればいいけど……。

「護衛艦もとなると集結する頃には戦いは終わっている可能性が高いわね。」

手詰まりね……。まっ、何で帝国軍だけを使おうと考えてるの。

「ねえ、あしゆら。」

何も帝国軍の機材だけである必要はなかった。ちょうど私には護衛機も輸送機もある！

「「現地の指揮官に話をつけてぎりぎりまで接近するにしても……、何でしょうマミ様？」」

「グールいえ、ブードやサルードも動員すれば何名まで救える？足りないなら飛行機械獣を護衛につけて輸送船を派遣するとか。」

各要塞シリーズも積みば1個師団は入るでしょうしサルードなら2個か3個、それにグールの速度ならピストン輸送もしてもいい。飛行機械獣もそれなりの数は居る。

「「そうですね、グールやブードを使えば2、3割はいけましょう

か？」「輸送船は現地で交渉してみないことにはなんとも言えませんが。」「敵地に向かうわけですからあまり多くの船は使えないでしょう。」「

「それでも頑張ればかなりの数の人達を救えるわね。」「

「その可能性はありますが、まさか！」「

「ええ、戻るわよ。」「

「しかしそれでは。マミ様が。」「

「ここであの人達が死ぬかもしれないのを黙ってみている事の方が私には問題よ！例え帝国軍から追い出されてもやれる事だってあるわ。」「

今動かなかつたら私は一生後悔する事になる。それにあのゼウスならこんなとき友のために動かない人なんて好ましく思わないでしょうしね。」「

「わかりました。このあしゅらマミ様のためならどこまでも着いていきます。」「

「ありがとう。じゃあ、ぐずぐずしてられないわね。来なさいグール！」「

すぐさまグールに乗り最大速で来た道に戻っていった。

「お願いします。輸送船を1隻でもいいのです。救出に向かわせてください！」「

グールで戻ったため数時間で元の場所へ戻った私は司令部に直行し司令官の人に輸送船の要請をしている。

「しかし、君もわかっているのだろう。それがどれだけ危険なの事なのか。私もこの作戦に思うところがないわけではないが。だからといって部下をむやみに死地へ行かせるわけにはいかん。」「

「護衛部隊はやはり。」「

「単なる領域内での輸送任務だったからな。精鋭師団も輸送船だけできている。」「

「護衛ならあてがあります。救出船もですが1隻でも多く欲しいのです。」

「しかし……。」

「やっぱり、あまりにも無謀すぎるため。相手の返事は良くない、でも諦めるわけにはいかない。再度口を開こうとしたとき1人が入ってきて。」

「司令。」

「彼方は？」

「私はここまで帝都の精鋭達を運んできたものだ。司令官殿、話だけでも聞いてみては？できないはそれから判断しても。」

「しかし、輸送船を出すとすると。」

「私達は喜んで行こう。他の者は志願制にし腕のほうも私たちが確かめます。航路も多少迂回すれば危険は減らせるでしょう。連合の反抗も明日か明後日には始まります。ならば今すぐにも決めなければ手遅れになってしまいます。」

「わかった話を聞こう。しかし、無理と判断したときは出させないぞ。無論君もな。」

「ありがとうございます！」

集まってもらった人達に考えた作戦を説明した。

内容はいたってシンプルでG・Bの連合側の地点は私が単身赴きグール以下要塞を展開機械獣と私で足止めをしているうちに収容撤退オステイア側は飛行機械獣の護衛の下輸送船団が海上を迂回しながら接近同じく収容後離脱となる。

この内容に輸送船の艦長は海からアプローチすれば連合の艦隊に捕らえられる可能性があるから最終段階では陸を進むと提案し、参謀の人は肝心の機械獣の力を見たいといったのでジェノサイダーF9などを見せて納得してもらった。

他にも残っている部隊で陽動をかけるなど打合せをし、志願者の募集・選別をおこない24時間後に作戦を発動することが決定した。

「我俣を聞いていただきありがとうございます。」

「何かまわんよ。私も助けることができるなら助けたいからね。ただまだ、博打的要素はあるが最初のような絶望的なものではなくなつたからね。輸送船の船長たちも思ったより多く集まったのだし。」  
あの艦長以外にもこの作戦が危険だと気が付いた人達は救出作戦の参加を希望してくれたおかげでより多くの人員を輸送できそうだ。

「それでも、危険なことに付き合わせてしまいますね。」

「我々はそれが本分だ。それに彼らは志願したのだ、あまり自分のせいなどと言うと彼らに失礼だ。」

「すいません。」

確かにそうね。彼らも自分で決めているんですから。これ以上の心配は彼らの決意を馬鹿にすることになるわね。

「それに危険度で言えば君のほうが遥かに危険だ。最強の2体を輸送船団に付けさらに多くの機械獣をだすのだ。君のほうは君自身が囷となり防波堤となるのだろう?」

「ええ、それが一番成功率が高いのですから。」

移動速度と陸戦機械獣の召喚という仕事もあって私は一足先に戦場につくことになる。付き次第グールなどの搭乗をしてもらうことになるが輸送船団がより安全になるように私は前面に出て敵を引き付ける必要がある。

「しかしいくら傭兵だからといって。」

「大丈夫です。私はあの紅き翼と戦えるのですよ。それにもう決めたんですから。覚悟がありますよ。」

「ふふ、そうだな。確かにこれでは君に失礼か。私はつてを頼つて噂の真実を確かめよう。もし本当ならこの作戦にも意味が出てくる。」

「はい、お願いします。」

もし本当に交渉がおこなわれているなら1時的にでも攻勢を抑えれば終戦が見えてくる。

「なら、健闘を祈る。」

「はい。」

#### 24時間後

作戦会議から24時間後。すべての準備が整い、輸送艦の周りには飛行機械獣がたたずんでいる。グールもすでに準備を終えていつ。しかし、すでに連合が奪還に向けて大規模攻撃をかけており一刻を争う事態になっている。

「じゃあ、あしゆら。飛行機械獣の指揮任せたわ。」

「お任せください、このあしゆら命に代えても船団護衛を果たしてみせます。」

「ええ、頼りにしているわ。それじゃあ、艦長さんまた会いましょう。仲間たちと一緒に！」

「ああ、また皆で宴を開けるよう連れ帰ってこよう！」

私達はそれぞれの機に乗り込み見送りのならG・Bに向けて飛び立っていった。

「進路グレート・ブリッジ！飛行要塞グール高度1万m、最大巡航速度へ！」

皆、なんとしても助け出すわ！

(side 船団)

「やはり心配ですか？主のことが。」

「ふん、あのお方は私が心配するほど柔ではない。むしろその後が心配だ。」

「王族付きの護衛官を蹴ってきたのですからな。」

「まあ、我主はそのことは気にしていないようだがな。それで、進路はどうするのだ？」

「いったん海上に出た後G・Bに近づいたらそこから陸沿いで行く。それなら発見の可能性は少なくなるだろうが。」

「G・B周辺で連合の部隊と鉢合わせになる可能性が高いか。」

「ああ、そこは君たちに任せるよ。時間は速度と距離のせいで2日ほど掛かるが機械獣たちは大丈夫なのか？」

「進むだけなら問題はない。だが最悪は帰りの護衛が居なくなる事になるかもしれないがな。」

「帰りは何も考えずに飛ばせばいいだけだから心配要らない。それにその頃にはうるさい八工は全部片付けてくれるんだろ？」

「無論だ。」

これから2日連合に見つからないように彼らは低空を迂回しつつ進んでいった。

(side グレート・ブリッジ帝国軍)

時は少し戻りグレート・ブリッジの帝国陣地。

「もうそろそろかな。」

「だろうなここはメガロに近いからな敵も必死だろう。」

「だが敵を撃退すれば戦争終了。で、俺達は英雄だ。」

「そうだな。そのためにはなんとしても生き残るぞ！」

「「「おう！」「」」

陣地の各所では同じように互いを励ましあいこれから必死で奪還のために攻めてくるであろうそのときに受ける圧倒的恐怖に打ち勝つために。

ここで踏ん張れば戦争が終わると信じて。傭兵達はこの作戦の無謀さに呆れているが、正規軍の将兵たちはここで自分たちが頑張ることが帝国の勝利につながると信じていた。

噂ではここを短期間でも占領すれば現在進められているという交渉にめどが付くとあったからそう信じているのだ。

「あっちは張り切っているな。」

「だな、どうする逃げるか？」

「どこにだよ？帝国には戻れねえし、連合に逃げてもどうなることか。」

「だな、結局こっちで戦うしかないんだよ。お前だって自分の手で

故郷を焼きたくはないだろ？」

「当たり前だ。」

傭兵達は正規軍ほど希望を持っては居ないがこの大戦が従来の戦争と違って逃げたところで助かるものではないと知っているので自分たちの故郷がある帝国で戦うしかない決めていた。

「それに噂が本当だってんなら、踏ん張るしかないだろ？」

「他にいい案もないからな。」

「ああ。」

「じゃあ、勝って帰ってまた宴を開くか！」

「「「ああ！」」」

正規兵たちとは違った。しかし、大本は同じ決意を胸に彼らも連合の攻撃を待ち構えた。それから数時間後。

「来たか。」

双眼鏡を覗いていた、指揮官の目に水平線を埋め尽くさんばかりの連合軍艦艇が映った。

「オステイア方面およびメガロ方面からも部隊が進行中のようです。」

「

「要塞の防衛システムは？」

「現在60%です。今も進めていますがおそらくこれが限界かと。」

「技術仕官以外は戦列に復帰させよ。なんとしても耐え抜くぞ！」

「は！」

「マイクをくれ。」

「どうぞ。」

「うむ、く諸君！ついに連合がここを奪還するために戦力を差し向けてきた！これからはつらい日々が続くだろう、だが！この攻勢を耐え切ったときこそが我々の勝利だ！そしてその勝利は終戦という形で大いなる勝利をもたらすだろう！諸君、なんとしても生き延びて皆で勝利を味わおう！>ふう、どうだったかな？」

「すばらしいです。皆もより奮起しています。後は連合の攻勢を抑



えれば、我々に有利な条件で戦争を終わらせられます。」

「そうか、終戦か……。いや、ならばなんとしても奴らを跳ね除け生き残らなければな。」

彼もまた決意を胸に連合の艦隊をみすえた、

「ええ。」

「將軍！精霊砲の発射準備完了しました！」

「よし、まずは奴らのど真ん中に打ち込んでやれ！」

「了解！第一目標 連合軍艦隊弩級戦艦！精霊砲圧力上昇、臨界まで残り10秒！」

「発射スイッチです。この戦闘の狼煙を！」

「うむ。」

4…3…2…1

「精霊砲発射！」

…0

グレート・ブリッジより放たれた一筋の光。今大戦最大の激戦地、連合名「グレート・ブリッジ奪還作戦」の幕が切って落とされた。

## 大分裂戦争<グレート・ブリッジ1>（後書き）

グレート・ブリッジ戦まだ導入だけど長くなってしまったので、分けることに。下手したらもう2話いきかねないなあw

わりと否定的な人が多いように書いてしまいました但那れなりに樂觀視している人もいます。ただ、原作を見直していると載っている帝国の勢力範囲からグレート・ブリッジってかなり遠いんですよね。それより増えているなら早々逆侵攻なんてことにはならないでしょうし…。って事で何か否定的な人が多いようなことになってしまいました。

時系列とかも色々弄くる事になりそう。（タカミチ少年とガトウもう合流させちまおうかな・・・）  
次回からは機械獣を大暴れさせる予定です。

本文中の師団とかは目安程度です。大体これくらいかなって感じで。ちなみに師団は1万人くらいです。

大分裂戦争くグレート・ブリッジ2ゝ(前書き)

グレートブリッジ編2です

前回の倍近くとなってしまいました……。。

## 大分裂戦争<グレート・ブリッジ2>

(side マミ)

「グレート・ブリッジまであとどれくらい？」

「残り3時間ほどかと。」

飛び立つてもう数時間くらいかしら。連合との接触を避けるコースを飛んだから時間が掛かってしまったわね。これだと、ピストン輸送をしても1日2回が限界か。戦況にもよるけど、現地部隊もいつまで持つか・・・、そうになると10回もする事はできないでしょうね。

「マミ様、通信です。」

「わかったわ。繋げて。」

ちなみに要塞シリーズの兵員はなぜか鉄仮面軍団だった。やっぱり鉄十字軍団だと問題があるのかしら？

<マミ君か？今どのおあたりだ。>

「もう3時間ほどで到着します。」

<戦況はまだ安定しているとはいえいつ崩れるかわからん。撃破された鬼神兵もいるようだ。>

空挺部隊だけを最前線に送ったようなものだから当然か。

<また、例の噂なのだが。>

「どうでした？」

<どうやらまったくのでたらめらしい。友人に聞いてみたところ彼も会談を成功させるためにこの作戦を了承したらしいのだがそのよ  
うな話はまったくもってなかったそうだ。>

「そんな、そんな嘘についてまでおこなうなんて。」

<まったくだ、そのものたちは処分したらしいが、それでどうなる  
ものではない。>

そこまでしてだなんて。前から思っていたけど、この戦争は違和感ばかりだ。本格的に調査したほうがいいのかも。

<ともかく救出作戦は続行だ。会談が無い以上このままあそこに留まってもしょうがない。1人でも多くの者を救ってくれ！>  
その違和感はとりあえず置いてきましょう。今は目の前の作戦に集中しないと！

「わかつてます。一人でも多く連れて返ります！」

<頼む！>

お願い間に合って！

(side 帝国軍)

今やグレート・ブリッジは向こうの世界の戦争と間違えるほどの濃密な砲火と血で覆われたいた。

最初帝国軍は連合は波状攻撃をかけてくるだろうと予想していたが、本拠地至近に陣取られた連合は必死に各地から戦力を集め絶え間ない攻撃をかけてきた。

インターバルも何もないその攻撃に元々物資や兵力に不安がある帝国は徐々に押されだし、鬼神兵も一機また一機と失い当初の予定を上回る勢いで消耗していった。

「つち！まさか本当に1、2日しかもちそうに無いとわな！！」

「いつてもしょうがないだろ。こちらの損害は？」

「お前は冷静だな。かなりヤバイな向こうの正規軍もかなり削られているようだし。陸からの侵攻軍も雪崩れ込むのは時間の問題だ。」

「こんなときだからだ。……そうか、負傷したものをオステイア側に向かわせて再編成しよう。」

「少しでも逃げられるようにか？」

ホント冷静だなこいつは、だがもう負けはほぼ決定しているか。なら生き残る算段をつけないとな！

「それにお前が話してた彼女が来るかもしれないだろ？なら、少しでも長く踏ん張らないとあ。」

「アイツか……、確かに来そうではあるがアイツ1人じゃ。」

アイツがいろいろ呼び出せることは知ってはいるがこんな数を運ぶなんて無理だ。

「何も彼女だけでもかぎらんだろ。それにどうやらきたらしいな。」  
「なに？」

サイファーが何を捕らえたかすぐ知ることになった。俺達の向こうグレート・ブリッジの連合側の端で爆炎が上がった。その上空には銀色の光るものがあは……。。

「あれは確か飛行要塞グール！」

「だろう？ さあ、倒れるわけにはいかなかったぞ！」

だな、あいつが来たんだ少しは希望が見えたかもな。しかし、馬鹿やっちゃってよ。どうなってもしらねえぞ！

グールが目撃される少し前、彼女は帝国軍の指揮官と撤退について話し合っていた。

< 作戦内容は以上です。私が連合を少しでも抑えるのでその際に撤退を。 >

「しかし、それほどの戦力と輸送力があるのならば。このまま占領維持できるのでは？ 貴様も速やかに戦列に加わり帝国の勝利に貢献せよ！」

こいつは本当に参謀なのか！ 先ほどの説明を聞いてもまだこんなたわごとを抜かすとは！

< ですから、機械獣をもつてしても戦線の一時的な維持ならともかく恒久的に占領することは不可能です！ 一度戻したものは24時間復帰はできなくローテーションをしたら戦力が足りません。グール1機では補給線の維持など不可能です。何より連合が封鎖作戦をおこなえばより困難になります。 >

彼女の保有する輸送機ではグールがもつとも速く現在の状況に適しているが1機ではとても足りん、他に2機は輸送量こそ多いが今の状況では手遅れになりかねん。それに……

「それ以前に紅き翼もいる……か。」

彼らが暴れられたら陣形の意味さえ失いかねん。

<はい、彼らに暴れられては帝国は持ちません。>

「そのようなもの貴様が！」

「そいつを摘み出せ！ここにいっても邪魔だ！！」

まともな意見を言わず先ほどから邪魔ばかりを！無能は味方ほど怖いものは無いとはよく言ったものだ！！

「な！何を將軍ちまよ」さあ、こつちです。「貴様！放せ！！私を誰だと思っ……」

邪魔者を憲兵が追い出してやっと静かになったことで息を吐き彼女と向き合った。

「すまないな。作戦のほうは了解した、負傷者を優先的に撤退させるとしよう。陣形もオステイア寄りに変えよう。」

少しでも帝国に近い地へ後から来る船団に速やかに乗れるようにしないとな。

<ありがとうございます。私は帝国側に爆撃後グール以下輸送船は中央に配置後、連合の足止めに入ります。>

ならば我々がする事は1つだな。

「ありがとう。聞いたか皆のもの今より我々は撤退に入る！より多くの兵を帝国の地に送り返すことが作戦の成功となる！」

「了解しました！各指揮官に伝達します。」

「要塞の防衛システムの掌握も進めさせます！」

そういって、皆自分ができることをするために走っていった。

「すまないな、君には多くの負担をかけてしまう。」

<いえ、自分がやりたいことですか。>

「そうか。では、健闘を祈る！」

その後、作戦通りグールは爆撃による足止め後グレート・ブリッジに着陸した。

（さあ、これからが正念場だ！負け戦だろうがこのままで終わらせるものか！！）





<おいおいあぶねえんじゃねえか？>

「でも、これが一番成功率が高いと思うわ。それに私が皆の側にいたら紅き翼も来ちゃうかもしれないわよ。」

<確かにそれじゃあ、俺達はひとたまりも無いか。>

「安心して大船に乗ったつもりでいて。泥じゃなくて超合金Z製の頼もしいやつだね。」

<超合金Zが何かしらねえが、頼りにしているよ。じゃあ、死ぬなよ！>

「ええ、もちろん！」

さあ、派手にいきましようか！

「参陣せよ機械獣軍団！！！」

その声と共にダブルスM2がガラダK7がキングダムX10がバルガスV5がブロッサムX2が出し惜しみはしない全力だ！後は…

「アンリミテッド！マスケット！ワー……クス……！！………つてね。」

一度言ってみたかったのよね。彼のような呪文を言えればいいけど………覚えてない。思い出そう！

それはともかく私の周辺には多種多様なマスケット銃が次々に出現した。

ごく普通のモノ 大口径の榴弾をこめたモノ 散弾 煙幕 閃光  
等々等々……………。

「さあ、始めましよう！」

そのうちの1丁を手に取り、引き金を引いた。

バン！バン！バン！バン！バン！バン！バン！バン！バン！バン！バン！バン！

ガアアアアアアアアアアアアアアアアアア！

おびただしい銃声と機械獣たちの咆哮、長い撤退戦の幕があけた！

(side 船団)

「マミのほうは到着し参加したらしい。撤退も順調なようだ。」

「そうか、艦長後どれくらいでつく？」

「そうだな12時間といったところか。機械獣だけでも先に送るか？」

「いや、先ほどの話だと我々の戦力が最終段階での護衛戦力のすべてになりかねん。」

「そうだな。歯痒いが予定どおりいくしかないか。」

（マミ様、今しばらくお待ちください。このあしゆら必ずお役にたって見せます。）

「グレート・ブリッジ」、大分裂戦争最大の激戦地と後に語られる戦場は短期的に見れば帝国有利。長期的には連合が圧倒的有利で進んでいた。

巴マミの参戦、機械獣の投入は一時的に戦線を押し戻し順次後退後防備を固めており連合の損害は増えてはいた。

だが、帝国の損害もまた激しく前線戦力は撤退戦ということもあり急速に低下していた。その中で機械獣の活躍は目覚ましいものがあった。

キングダムX10の太刀が鬼神兵を次々に切り払い、トロスD7が敵に突撃し多くの兵を巻き込み、ストロンガーT4の突風が海上より接近魔法使いを吹き飛ばした。

アブドラU6が鬼神兵を潰しつつ空中艦艇に狙撃を行うなどまさに圧倒的な力でDr・ヘルが世界征服を決意した理由がわかるほど大暴れしていた。

「機械の獣」「鋼鉄の怪獣」「何で鬼神より獣が強いんだ！」「あいつらやたらおどろおどろしいんですけど。」「など多数の異名が誕生し知れ渡った。ただの兵器が、である。

マミも活躍してはいるのだがそれ以上に機械獣が目立っているのは確かだった。紅き翼とさえ渡り合っているのだから。しかし、その機械獣といえど無敵ではなく艦砲射撃や大規模殲滅魔法をくらい一機また一機と数を減らしている。1日目は機械獣に多くの犠牲が出たが紅き翼を後退させたところで開始より続いていた戦闘がほんの少し止まった。

予想以上の損害に連合も足を止めてしまったのだ。

だが、帝国もあまり良い状況ではない機械獣の大半が傷つき半数近くは戦線より離脱している。沖合いに集結している艦隊やメガロ方面の陸軍の部隊も鬼神兵などが乱立している。おそらく明日に総攻撃が開始されるのだろう。鬼神兵を機械獣が多数撃ち破ってはいたがそれ以上に補充されている。

帝国が悲壮な覚悟でいるときに1つの吉報がとどいた。輸送船団が残り2時間の距離に到達したらしい。その報告を受け帝国軍司令部はオスティアに向けての進軍を決意敵を打ち破って少しでも早く接触するためだ。幸いブードとサルードは兵員を満載しすでに出発している陸に場所を打ちしても問題は無い。しかし、それは同時に連合にこちらが撤退していることを完全に悟られるということだ。総攻撃も間近かさにかかって攻撃してくるだろう、その攻撃を受け止める必要がある。

殿として残る部隊を募集し残り全軍でもって帝国は輸送船団とのラウンデブーポイントへと進撃を開始した。

それを察知した連合は予定を早め総攻撃を開始。膨大な血が流れたグレート・ブリッジ戦その最終章が幕を開けた。

(side マミ)

「く！物凄い数ね！！」

「戦果の拡大ともう2度とこんな事させない為だろう！！」

「だろぅな！実際二度も三度もされたいモノじゃないだろアチラさ

んも！」

私達は今、連合の包囲網を突破して収容作業に入っている本隊と船団に敵を近づけないためにグレート・ブリッジで激しい戦闘をしている。

艦隊のほうは飛行機械獣たちが気を引き付けてはいるがいい加減ま  
ずい。私はともかく他の人はそろそろ撤収に入らないと……

「ママミ様！」「兵員の収容」「および脱出の準備完了しました  
！」「現在船団は帝国領内に向けて負傷者を中心に全速で退避中。  
健全なものは陸路をたどって帰還するとの事。」「  
やっぱり全員は無理だったか。

「なお船団の指揮官より最大船速で離脱するゆえ護衛は不要との事。  
また、追撃を分散するために船団をとりて各個に離脱をおこなうも  
よう。」「飛行機械獣は連合軍艦艇の足止めを、陸軍に対してはグ  
ロイザーXシリーズを使って足止めをおこなっております。」「  
このあしゅらとガラダブラ皆様の撤退支援のためもう一働きします  
！」

船団に護衛がないのは少し心配だけど引き付けてくれているなら  
何とかなるかしら？どの道、喰いつかれたら船団なんてひとたまり  
も無いか……。

「へへ、おっかない外見だがこんなときは頼もしいな！」

「ああ、頼りにしているぜ！！」

「任せて置け！このあしゅらがついたからには勝利は間違い無し  
だ！」

「ええ、皆グールが戻ってくるまでもう一踏ん張りよ！」

「……」

グールが戻ってくるまで後1時間といったところかしらね。彼らは  
まだいないし何とかなるかしら？

(side 連合)

「えええい！まだ敵の殿を突破できんのか！！」

「はい、頑強に抵抗しているようでして先ほど増援がありましたのでよいに……。」

こちらは連合軍艦隊の旗艦、その中で今作戦の総指揮を取っている提督が一向に帝国の殿部隊を突破できないことに業を煮やしていた。「あの傭兵連中はどうした！？他の戦線はほぼ終結しているのだろっ！」

「彼らは昨日から戦い続けています。少しは休息を与えなければ。」「今働かせずして何時働かせるのだ！！あの化け物どもの後ろには帝国の本隊がいるのだぞ！少しでも多くの者を討たねばまた同じことをされる！そうねば次は無いかもしれんのだぞ！！」

実際、今回の作戦は帝国のほうが大打撃を負っているが連合とて楽な戦いではない。もう一度それも決定的な場面で同じことをされれば……。ならばこそこのような作戦がおこなえる帝国の精鋭部隊を少しでも多くたたいておかねばならない。まして今回大量に確認された化け物 機械獣 の存在がある。もしあれが直接転送されたら……。鬼神兵を遥かに上回る能力を持っているのだ！体でもどんな被害が発生するか。

だからこそ帝国があせってへまをした今回は千載一遇の機会、帝国と連合の差がわかっていているゆえ指揮官は檄を飛ばしているのだ。

「紅き翼だったかあいつらはすぐに向かわせる。確か撤退中の部隊は航路と陸路で分かれたのだったな？」

「はい、突破した帝国軍を追撃した部隊の話によるとそうです。しかし、陸空共にあの化け物がこちらを攻撃して思うように追撃できていません。」

「空はおそらくニヤンドマ周辺を突破するつもりだろう。あそこは数週間前に襲撃があったせいであまり多くの兵力は残っていない。

陸路はウエスペタリア近辺を通るしかないな。」

「それぞれ高速艇を派遣し襲撃をかけますか？」

「陸はそれで良いだろうが空のほうは高速艇だけでは危険だな……。」

「ならば、高速艇団は迂回しニヤンドマ周辺に展開。艦隊は通常の追撃をしつつあいつ等を引き付けますか？」

「それが一番だな。少々危険だが単独行動の禁止と対空砲火を密にし必要以上の追撃を避ければ被害は少なくできるな。」

連合の追撃作戦は決定し帝国軍殿部隊への最後の攻撃が開始された。

(side 紅き翼)

「つたく、人使いが荒いぜ！」

俺達は前回マミとあった後久しぶりに前戦に復帰そこで八面六臂の活躍をしていた、そこに来て今回のことだ！

当然俺達も参加してすでに多くの戦果も上げているぜ。あの機械獣だったか？あいつらも何体か叩き潰した！

あいつらは鬼神兵と違ってだいぶ強いし何より全て違っていてもおもしろえ！この戦争が終わったなら全部と戦ってみてえ。

「人気者はつらいって事よ。そのれこの作戦終了のあかつきには報酬もがっぼりだ！張り切っていこうぜ！」

「たつく、でも殿にはマミもいるんだっか？それなら楽しめそうだ！」

アイツも強いからな。なんとしても仲間に加えたいぜ！

「ちよつと待て！次は俺だつて約束だぞ！！！」

「良いじゃねえかよ。じゃあ、俺はあの変な奴にするかな、詠春あいつ強いんだろ？」

「そうだな。パワーだけならあの怪物然としたモノの方が上だろうが意思を持っている分厄介ではあったな。」

「じゃあ、そつちとやるかな！詠春はあの髑髏な！」

あの髑髏も面白そうだが今回はこつちだな。

「なら私とゼクトは周りの機械獣の相手をしますか。」

「あの2体より弱いといつても十分厄介ではあるじゃろうな。」

「つと、見えてきたぜ。」

マミが居るらしき所は機械獣が多数暴れていて要塞の一部が崩落さえしていた。

(side マミ)

「サンダー・ブレード！つと、そこ！ティロ・ファイナーレ！」

連合の私たちに対する最大規模の攻撃が開始された。そのおかげでさつきから休む暇さえない。

「突破されても困るがいい加減、引いてくれても良いつてのによ！」

「まったくだ、こつちにかまうなつてんだ！！」

「まったくね！マジンガーブレード！はあ！！」

マジンガーブレードで近寄ってきた兵達をなぎ倒しているが本当にきりが無い！

「もう一回、グレート・ブリッジにあれを撃ち込んで足止めをするは皆は下がつて！」

「了解！」

私は飛び上がりグレートブリッジを斜めに見る場所に移動し現在の最強の武器をはなった。

「光子力！ビーーーーー！ムウウウウウ！！」

眩い超高密度のエネルギーの奔流がグレート・ブリッジの構造を直撃、大穴を開けた。そのまま向きを変え雑くように動かしたため広範囲で構造材が消滅崩落し始めた。

その上にいた兵士たちは慌てて退避を始めたが私たちと連合軍の間には十メートル近い溝が出現しとうぶん圧力が低下しそうだ。

「はあはあはあ。やっぱり短時間での連続照射は疲れるわね。」

疲れても威力が変わらないとはいえあまり喜ばしい特徴ではないわね。

「グール到着まであと少し！これなら。」

「よお、マミ何ださっきのすんげえな！」  
来てしまったか。

「久しぶり？なのかな、でも今は会いたくは無かったわね。」

「でしようね。彼方は帝国でこちらは連合。」

「見逃してはくれないわよね？」

「こつちも仕事なんぞな。それに帝国に連合を討たせるって分けにもいかねえし。」

「やっぱりそうよねえ。でも、私がいるから他の皆に被害が及ばないって思っておきましょうか……。」

「今回は誰が誰と？」

「今回は俺がお前とだ！あれからどれだけ強くなったか見せてみる！」

「俺はあの顔が左右で分かれている奴だ。詠春はあの髑髏な。」

「私たちも今回は戦いますので。」

「紅き翼全員と私+機械獣軍団か物凄く豪華ね。映画が1本作れそうなくらいタイトルは「紅き翼対マミ軍団vsグレート・ブリッジの決戦」かしら？つとそんなこと考えてる暇はないわね。」

「あしゆら、ガラダブラ」

「「ははっ！」「グルルウウ！」

「グール到着まであと僅か場合によってはあれも使うわよ！」

「「了解しました。」「この小僧めに負ける私ではございません」

「吉報をお待ちください」

「へへ、準備は良いようだな。じゃあ、いくぜ！」

(side ナギ&あしゆら)

「さてとあしゆらだったか早速だがいくぜ！」

「ふん小童がひねり潰してくれる！」「最強の機械獣の称号は伊達ではない！」「くらえ！ルストハリケーン！」

開幕と同時にあしゆらが放ったルストハリケーン強風もそうだが何よりの脅威はその強酸である。鋼鉄さえも一瞬でボロボロにしてしまう威力。生身人間ではひとたまりもない。

ナギは前回マミと戦った時の経験と天武の才ゆえの勘でその危険性



を察知、危なげなく避けたところで魔法の射手を放ち詠唱に入った。  
「来たれ 虚空の雷 薙ぎ払え 雷の斧！へへ、どうだ！俺だつて  
伊達に最強は名乗ってねえよ。」

「ふふ、確かにそのようだな。」「それは素直に謝ろう。」「「だ  
がこのような人間用の小技では私には効かん！私を倒したいのなら  
ばもつと威力のあるものを撃ち込むのだな！」」

事実、先ほどの連携をまともにくらったはずのあしゆらには損傷ら  
しきものは見当らない。

「へっその言葉後悔するなよ！すぐにスクラップに変えてやるよ。」

「「さあ、仕切りなおしだロケットパンチ！&ドリルミサイル！」」  
あしゆらが腕を飛ばしその断面から小型ミサイルを発射して弾幕を  
展開。ナギが避けるスペースを奪いに来た。例え避けたところでロ  
ケットパンチや他の武器が襲い掛かる。

普通はそこで諦めるか全力で防御に入るが彼は違った。魔法の射手  
で迎撃しつつ後退し詠唱の時間を稼ぎ。

「南洋の暴風！」

3つ目の選択肢弾幕を消し去ってしまうことを選んだ。

「「なに！ぬおおおおお！」」

「なめるなつて言っただろ！」

迫り来るミサイルの群れを薙ぎ払った南洋の暴風は勢いをそのまま  
にあしゆらに直撃。海上へと叩きつけた！

「「はははは、マミ様が手合わせしたいと思うわけだ！」」「「見事  
よ！」」「あの男より楽しめそうだ！」」「おおおおお！」」

浮上したあしゆらには今度は損傷といえるものがしつかりと刻まれ  
ていた。しかし、彼はそんなものなどもせず攻撃を再開した。

その後、三者は激闘を続けまた長期戦になろうかと思われたとき。

(side マミ)

「やっぱり俺の見込みどうりだな！あのへっばへぼのど素人がここ

まで大化けするとはよ!」

「ラカンさんも相変わらずすごいですね。」

「あつたりまえだ、何せ俺は最強だからな!」

前回よりも激しく戦っている

< マミ! グールが到着したぞ! 戻ってきて援護を頼む。あの2人のせいで機械獣はほとんどやられちまっているこのままじゃまずい! >

「わかつたわ!」

「なんだあ! もう終わらせる気かよ。」

「ええ! 今回は戦うことが目的じゃないからね。」

「だが<はいそうですか>と行かせるわけにはいかないぜ!」

そうでしょうね。普通に突破したところで彼らもついて来たんじゃない意味がないしあしゆらとガラダブラも来て欲しい。……あれを使いたくないか。

< あしゆら、ガラダブラ > < なんてしよう。 > < グルウ >

< 20秒後にアレを呼び出すわ。その後全速で帰還グール搭乗の支援を >

< 了解しました。しかしアレを使うことになるとは >

< 賢沢は言ってもらえないわ。 >

グレートタイフーンを叩きつけ距離をとったところで

< いくわよ! >

「来なさい! 地獄王ゴードン!」

普通の召喚とは違う巨大な光の輪が形成されその中から60mはあろうかという巨大な人が光臨した。

地獄王ゴードン、Dr. ヘル最強の機械獣その力はそのカイザーと1対1で戦えるほどの力を持っている。

しかし、そのあまりにも出鱈目な性能せいかアーティファクトの入っているゴードンは未完成版のものだ。力などはそのままのだが活動限界が存在しどこぞの巨人張りにわずか3分、自立機能もかなり低くこちらが指示を出さないと木偶の坊、最悪暴走を引き起こしてしまう。

再召喚に掛かる時間もあしゆら達でさえ24時間なのにこちらは48時間。戦力としては期待できるものではない。

けど今は、その3分が何よりも貴重だからこそ呼び出した。

「ゴードンその3人を抑えなさい！」

ただ一言単純な命令を放ち私達は全力で現在紅き翼の2人と連合の部隊がいる箇所に向かった。その後ろをゴードンの巨大な剣が通り過ぎた。

(side ラカン)

おいおい、トンでもねえもん残していきやがったな。何だコリヤ動きは微妙だが凄まじい力だ。

「ラカンお前も逃げられたのか？」

「詠春もかこいつに気を取られているうちにな。」

「なぎもそのようだな。しかしどうするか。」

まあ、驚くよなあこんなのがいきなり現れたら。下の連中の足元ですげえ騒ぎになってるし。あ、あの2人が吹っ飛んでいった。あいつらもか。

「なに、アイツが今まで出してこなかったんだそれなりの理由があるんだろ。まともに相手することはねえよ。」

「確かにそうだな。これほどのものを最初から投入されていれば戦いなんてすぐに終わっているだろう。」

「じゃあ、しばらく付き合いますかね！」

(side マミ)

ゴードンに気を取られていた残り2人をすぐに排除できたのは僥倖だった。今はさらに後退しグールに乗り込む人たちの支援をしている。

「彼方たちも早く撤退を！」

「無茶言わないくらお前とあの2体でもこの数は無理だ突破される

！ならここで踏ん張っていたほうがあいつらに被害が及ばないんだよ！」

くっ、確かにそのとおりだ連合の攻勢はゴードンが現れたことでよけいに遮二無二突っ込んできている。このままじゃ。

「マミ！まずい連合の奴ら鬼神兵を大量投入しやがった！！」  
まずいあの数じゃ抑えきれない！

「マミ！グールを発進させろ！このまま雪崩れ込まれたんじゃ全滅しかねん。」

「でもそれじゃあ。彼方たちは！」

「そんなときゃ、歩いてでも帰ればいいそれが、お前たちに抱えられてな。」

何にか方法は……。アレを使えば。でもかなり危険だし。って、そんなことより今は

「グール聞こえる！」

<何でしょうマミ様！>

「現在の収容状況は？」

<残りあと僅か10分いえ、5分もあれば>

「5分以内に必ず終わらせて！終わり次第緊急離陸！」

<しかしそれでは！いいから！！！了解しました！>

5分かなかなか難しいわね。ゴードンももうすぐ消えるしどうするか……。「グルウ！」

「ガラダブラ！？」

突如ガラダブラが単身連合艇兵を蹴散らし鬼神兵の群れに突っ込んでいった！

「マミ様奴は単身時間稼ぎをするつもりですよ！今のうちに残った機械獣と部隊の再編を！他にも考えがあるようですしその準備を！」

「ええ！彼の犠牲は無駄にはしない！！」

(side ガラダブラMk01)



(side マミ)

ガラダブラ…、ありがとう。

「マミ様次は私が」「艦艇も近づいてきています。」「チャンネルは今しか。」「では、また後ほど!」「」

「あしゆら!…みんな今から帰還するためのモノを呼ぶけどこれはかなり危険よ。」「

「帰れるんならなんでのいいさ!」「

「ああ、危険はもとより承知の上だ!」「

「陸路で歩いて帰るよりいいだろう。」「

「ありがとう。で、問題なのはこれには座席なんて気のきいたものが無いつて事と最低速もかなりの速度なの。」「

さつき確認しても問題なくOVA版だったこれなら乗れはするけど、速度と乗る場所はどうにもならない。人員輸送用じゃないのだから。

「それにタイミング的に1回が限界よ。私は自力で離脱するけど彼方たちは必ずしがみついで。」「

「ああ、死んでも放すもんか。」「

「おいおい、死んだら帰れないぞ。」「

「ああ、皆で帰ろう!」「

「だな、マミ頼む!」「

「わかったわ。来て!グレートブースター!!!」「

その掛け声と共にどこからとも無く巨大なモノが飛来してきた!

「皆来るわよ!」「

「ああ!」「」

「ドンと来い!」「来い来い来い!」「

ぎりぎりまで速度を落としてもなお速いグレートブースターは彼らに向けて突っ込んできた。それにタイミングを合わせ彼らは跳び

「」「」「よつしゅああああ！」「」「」

無事に全員が飛び移ることができた。

「残っている人は……、いないわね。じゃあ、私も行きますか！スクランブルダッシュ！！」

私も翼を展開し徐々に速度を上げているグレートブースターに追いついた。

(side あしゅら)

「無事行かれたか。」「後はここより先に」「一兵たりとも通さん！」「」

今までは翻弄することに重きを置いていた彼も先のガラダブラのように鬼神のごとく戦い最後は突出していた船に突っ込み果てた。

このガラダブラMK01とあしゅらP1は連合そして帝国双方に強烈に印象に残った。後年、この戦いで英雄とまで呼ばれるようになった紅き翼のライバル役として名前が残るくらいに。

---

「ふむ、どうやら作戦は成功したようだな。」

「多少誤算があったがこれで帝国は精鋭の大部分を失ったか。」

「逆侵攻こそできそうには無いですが、だからだと続けるにはちよ

「うどいいですね。」

「しかし、こやつは少し厄介だな。」

「ああ、前回の誤算もこいつが原因でしたからな。」

「しかし、今回の事は誤算ではありませんがちよどいいのでは？」

「うむ、護衛官を蹴って命令違反と越権行為、帝国軍から追い出しかかわりを禁じるにはちよどいい。」

「連合に流れないでしょうか？」

「あそこでアレだけ暴れたのだ。連合に入らせない理由などいくらでもある。」

「それもそうですね。」

「アチラのほうは大丈夫でしょうか？」

「そっちも問題ない。あれらを調べていた奴を仲間にしたらしい。」

「ほう、なら。」

「ああ、あれらがそのうち処分するだろう。」

「なれば今回はこれで、終わりですかな。」

「くくく、あの方の復活が待ち遠しいですね。」

「ああ、それでは。」



## 大分裂戦争<グレート・ブリッジ2> (後書き)

機械獣とガラダブラ、あしゆらの回でもあったりしますw

どうでしょうか？最強の機械獣らしさが出ていたらいいなあ。

ちなみにあしゆらはミネルバXも入れてみました。光子力ビームは無いけど。ってかこれならあしゆらマジンガーも入れてミネルバとあしゆマジがあしゆら状態のほうがいいかも…。

マミさんの魔法もちよこつと出しましたけどこつちはまた別に機会にw

2、3日で撤退つてもものすんごくスピーディーになっちゃいました  
があまり時間をかけるとらくらく撤退。って事になっちゃいそうで  
^^；

機会があつたら書き直したいなあ。途中で長距離転送で補給ライン  
確保できんじゃないかね？とか思ったりも少し戦闘を長引かせられたか  
もなあ。

ともかく、最後のほうで何かやってる人たちも満足してマミは帝国  
軍から追い出されることにやっと大戦編を終わらせるコースに乗せ  
れます。学園編どうしよう…

### 次回予告

「無事に皆を救出できたマミ。しかし彼女に待ち構えていた運命は  
追放。彼女はこの大戦の裏を知るため調査を開始する、時を同じく  
連合でも……」

真ネギま マギ力Z 大分裂戦争<完全なる世界>



## 大分裂戦争<完全なる世界>(前書き)

え〜と、実は前回ブロッケンV2シユタイナーを出そうと思ってたんですが…

完璧に忘れてました〜なので今回、彼に活躍してもらいます！

## 大分裂戦争<完全なる世界>

グレート・ブリッジでの戦いの後、私は帝国軍より追放されてしまった。その理由は、王の命によって呼び出されていたのにそれを無視したこと、傭兵の領分を超えた作戦に対する越権行為や凄惨なもので無理な撤退を許容したことで損害を出したことに對する反逆罪でモノもあった。

実際に最初の二つ、とくに越権行為のほうは完全に事実であった、最悪処刑して話もあつたらしいが撤退作戦に尽力したこともあつて追放で済んだ。最後の物はおそらくだが作戦失敗の責任をついでに取らせようとしたものじゃないかしら？

あの戦いに参加した帝国軍はその数を7割近く失ってしまった。帰還者事態はその逆に7割に上るが、重傷を負い前線復帰が難しい者、復帰は可能でも長期療養を必要とする者。無傷な者はいなく良くて軽傷、多くが重症だったため帰還した者でも半数以上がとうぶん戦線復帰が不可能なためだ。

いくら治癒魔法があるといっても今は戦争中、数が圧倒的に足りないのだ。そのため、重症患者の命を繋ぎとめ自然治癒でもって回復を待つしか方法が無くこの結果となってしまったのだ。

いくら一部で作戦を強行した者がいたとしても、この損害はその者を処分するだけで終わらせるわけにはいかなかった。作戦内容に無理があつたのは当初から分かつていた事、口車に乗ってしまいました。たで済むはずがなく何人かの処分が必要になってしまう。

しかし、ここまでの大打撃を受けた帝国にそんなことをしている余裕は無く。ちようど、傭兵でありすでに重大な問題を起こしている私にその責任もかぶせることでお茶お濁したんじゃないかしら？

あの戦いの指揮官さんもそのことについては謝りに来ていたほどだ。ともかく帝国軍を追い出されてしまった私だがこれはある意味でいい機会かもしれない。今回の戦いもそうだが最初の頃からあつたこ

の戦争に対する違和感。誰が始めて誰が継続を望んでいるのか、帝国の方は今までも聞いて回っていたから連合にもいつてみよう。違った視点からこの戦争を見れば、それが判るかも知れない。

「なら膳は急げって言うし早速行きますか。来なさいグール！」

私はグールに乗ると一路連合その盟主の首都であるメガロメセンブリアに向けて出発した。

(side 紅き翼)

よお、ナギだ！俺達はあの戦いの後、帝国軍を追撃オスティアに迫っていた部隊を押し戻すなど大活躍したぜ！

ガトウって仲間も新たに加わり、「千の呪文の男」って二つ名やファンクラブができたり絶好調だ！

が、そこまでいったはいいがその後はまた戦況は膠着して、大戦の終わりは全く見えねえ。

「俺の故郷があるあっちの世界じゃ、超強力な科学爆弾が発明されてこんな大戦はもうおこらねえみたいだ。始めたたん皆まとめて全滅するかららしい。でもよ、こっちの戦いはいつたいつ終わるんだ？帝都セラスを滅ぼすまでか？やろと思えば、こっちの世界にだって科学爆弾以上の魔法だってある。こんなこと続けてどうなるってんだ？意味ねえぜ！！まるで……。」

「まるで誰かが世界を滅ぼそうとしている。ですか？」

無茶苦茶なことだとは思う。だが、この戦いを見ているとどうしても思っちまう。

「ある意味ではそうかもしれないぞ。」

「ガトウ」

こいつが新しい仲間のガトウだ。なんでも凄腕の捜査官なんだとか。弟子のタカミチもいるな。

「やっと、掴む事ができた。連合・帝国双方の中枢までに入り込み

戦争を長引かせている連中。その秘密結社の名はく完全なる世界コステンテレイア>」

「で、何だよ。わざわざ首都まで呼び出してさ。」

<完全なる世界>の話をした後また戻って行ったガトウに今度は呼び出されて本国首都にまで来たはいいんだがなんなんだ？

「あつて人、協力者がいるんだ。」

「協力者？」

「そうだ」

ん？だれだ…つて。

「マクギル元老院議員！」

おいおい、大物じゃねえか。

「いや、主賓はあちらのお方だ。」

違うのかよ。でも、元老院議員が敬語つて。

「ウエスペルタティア王国…アリカ王女、彼女が協力者だ。」

また大物が出てきたな。それもこの大戦の中心とも言えるオステイアを王都に構える国の王女とは。

俺達はく完全なる世界>は武器商人や国際マフィアつまり「戦争で儲ける」やつらが作った組織と踏んでいたんだが。

アリカ王女の話の聞くとオステイア内部にもシンパがいるらしい。

「彼らに世界全てが操られている。」

つて、あるの言葉がどつりにけれど、真の正体は謎のままの組織。

そこで俺達は休暇を利用して奴らについて独自に調査を開始したんだが、俺やラカンが調査向きじゃないから休暇を満喫。

…つといきたかつたんだが。俺はあの女のおもりでそれどころじゃなかったぜ。

「アリカ王女を一昼夜連れまわした拳句、敵の本拠地を壊滅させた  
!」

また、姫さんの付き合いで首都をみて回っているときに奴らの刺客から攻撃をくらったから乗り込んだだけじゃねえか。

「何のために秘密捜査をしていると…。それにもしもアリカ王女にもしもの事があつたら…。」ガミガミガミガミ…

手を出してきたのはアイツ等だぜ。それに

「姫さんノリノリだったぜ？」

楽しかったーとこつとこつと。

「嘘をつけ！！どうせ貴様が無理やり…！姫にこんな迷惑を…！国際問題級の…！」くどくどくど…

へーへー、次は気をつけますよ。

まあ、タカミチと師匠が入ってきて姫さんが笑ってお礼お伝えてくれて言っただけでいっただけなら、黙っただけだな。

「それに、ちゃんと証拠も見つけてきたぜ。」

と、そいつら宛てのメガロメセンブリアの執政官が送った書を見せた。

後で聞いたんだが、ガトウも掴んでいたらしい。メガロメセンブリアの執政官さえもあいつらの手先つてのには驚いたが、少なくともこれで戦争は終わらせれるだろう。＜完全なる世界＞のことはまだ何もわかってねえが、ガトウは何かを掴んだらしい。それは戦争が終わってからもできる。

姫さんは戦争を終わらせることができる。その情報を持って帝国の第三皇女と接触をするために出発し、俺もガトウ、ラカンと一緒にマクギル議員の元に向かった。

そして、奴らが現れた…。

「マクギル元老議員」

「ご苦労、証拠品はオリジナルだろうか？」

「ハ…、法務官はまだいらっしやいませんか。」

「法務官は…、来られぬこととなった。」

何でだ…、ん？このマクギル議員…。

「少し考えたのだがね。先の戦いで帝国は大打撃を負った。…ここ

で慌てて休戦して水をさすのもどうかと思つてね。」

「…ハア…。」  
「やっぱり、こいつは…。」

「いや、私の意見ではなく元老院でもそう考える声が多くてね。今が攻め時だと。時期が悪い、ここで休戦だなど言つても味方は少ないだろう。君たちも無念だろうが今回は手を引き時を待つのだ。そうすれば…「待ちな」…何かねナギ君？」

ハッキリしたぜこいつは違うな！

「あんた、マクギル議員じゃねえな何もんだ？」

「先手必勝！偽者に魔法を叩き込んだが…。」

「…な…。」

「ちよー！…！ナギおま…！何やってんだよ…！」

「元老議員の頭いきなり燃やしてつてかもう火達磨だし…！」

「バー！カ、よく見るおっさん」

「何…。」

マクギル議員が居た所には1人の男が立っていた。

「よくわかつたね千の呪文の男。こんなに簡単に見破られるとはもう少し研究しないとね。」

その後2人が乱入してきたが。強さと感じから言つて雑魚じゃねえおそらく幹部クラス。マクギル議員にはわりいがかく完全なる世界が大きな証拠が向こうから来てくれた！ラカンじゃねえが政治じゃない勝ちの相手だ、遥かに楽で戦い易いぜ！！

…が、結果を言えば俺達は負けた。といつても戦えば勝つ自信はあるんだが、あのやろう。マクギル議員の声で俺達が議員を暗殺しに来た帝国のスパイだと言いやがつた！

結局、見失つた上に昨日までの味方と戦うわけにもいかず脱出。今は今後のことについて話し合つてるところだ。

「これからどうします？」

「どうもこうもこのままここに居る訳にもいかないからな。オリン



ポス山の隠れ家にいったん移るか。」

「それがいいじゃろうな。」

「それと姫さんの行方が心配だ。」

「なんだあゝ、やっぱりお前。」

「茶化すなよ。俺達でもこれだったんだ。姫さんも無事じゃねえだろ。」

「つまんねえな。ま、実際そうだろうな。王女様もあの証拠については知っているんだし。」

「そうなると辺境を迂回しつつ隠れ家にその途中に姫の行方に関する情報も探ったほうがいいな。」

「方針が決まりましたし、行くとしましょう。何時までもこんなところにいるは……」

「見つかつちやうものね。」

「……」

「く！もう追っ手が……、お前は……！」

「久しぶりね。」

「マミ……！」

何で帝国にいるお前が？お前がこっちにいるって噂聞いたことねえぞ。

(sideマミ)

マミが連合で調査を進めているときまで時を戻す。

さて、なんとか見つからずにメガロメセンブリアに入れたわね。いくらなんでもグールで乗り付けるわけにもいかないし、ちよつとかかってしまったなあ。

「宿もとつたし道具の準備も整ったから早速開始しましょう。」

調査要員なのだけれどあしゆらは有名になっちゃったしそれ以前に

目立ちすぎるからなあ。顔は仮面で隠せるけど、二重の声はどうにもならないし。まずはガミアちゃん達を呼び出して後は忍術も使えるブラザスS1・S2も聞き込みと調査に向かわした。彼女たちは人間大の機械獣だから何かあっても大丈夫だしブラザスは潜入任務もこなせるだろう。ただ、機械獣って事もあってあしゅらほど細やかかってわけじゃないところが少し心配なのよね。

もつとも、そのための手も考えてある！私自身が行けば一番なのだけれどそのままいったんじゃさすがに拙い。顔を変える魔法道具を買ったのだけれど犯罪に使われても困るので、大幅に変えることはできないみたい。そこでこの身体の利用するってわけ！…できれば利用したくなかったなあ。

まず、身体を分身させた。戦闘力を保持したままだと3体が限界だけれど一般人と同じくらいなら10体まではいける。機能を限定したり自動にすればもつといけるだろうけど今回の目的だと自分で操作をする必要があるからね。

その身体の上に人形の頭部を置き少し細工をした後にさっきの魔法道具を使用する。これによって10種類の私とは全く違う顔をもった私ができる！後はこれにローブや眼帯、仮面を装備すれば多少の違和感を無視できるだろう。これらをメガロ各所に放って噂や怪しいって言うところに忍ばせてみたりをしていた。

ちなみのその最中に女の人を連れたナギらしい人や妙な感じがするスーツの集団を見かけた。ナギは休暇中としてあのスーツの集団はなんだったんだらう？全然似合っってなかったわね。

それで暫く調査を続けていたのだけれどこれといった収穫は無し。帝国と同じように武器商人がどうの主戦派の議員がどうのって話は聞くけど決定的なものじゃないのよねえ。武器商人にしたってこの戦争にこだわる必要性は無いわけだし、主戦派の人にしたって各国に1人はいるような人で国全体が戦争継続になるようなものじゃなかったわ。

そんなこれといった進展も無い日が続いていたある日。街中で大規模な魔法を使った事件が発生した。ちょうど近くを歩いていた分身の1体を派遣してみるとナギの目撃情報がその周辺であった。話を聞いてみるとナギが女の人を連れて魔法を放ってきた人達を追っていた。

ナギが事件に巻き込まれたのは確実としてその理由は…、話の中にナギと女の人を狙ったように見えたってものがあつたからもしかしたら戦争を続けたい人が英雄のナギを狙った？ものすごく短絡的ではある、単なる犯罪者の突発的犯行や帝国の暗殺や破壊工作ってことも考えられる。

でも、これといった進展も無い現状ではとにかくナギを追ってみる事が一番ね。ナギの実力を考えてブラザを派遣してガミアちゃん達と分身を紅き翼の監視をさせた。もし何か動きがあれば見張っていて損はない！

ブラザの情報だとどこかの拠点を襲撃したらしい。監視は宿泊している場所はわかったがそれ以上はどうすることもできず見張るしかないと思っていたが。ナギが帰ってきて暫くして動きがあつた。それも特大の。

ある日彼が仲間2人（一人はラカンさんだけでもう一人は知らないわね。）と一緒に議員事務所に入って少ししてその事務所が巨大な石柱を生やして爆発した。潜入させていたブラザの情報だとナギたちが議員を暗殺に来て失敗したとか。

あの2人に暗殺なんて器用なことできるはずが無い！やるならば事務所後と吹き飛ばしている。彼らの暗殺はゴルゴのような細やかなものじゃなく目標付近を爆撃して葬り去る感じだろう。

おそらく、あの襲撃した拠点で何かを見つけてそれをもとに何かしようとして罠に嵌められたってところだろうか？とにかく今は紅き翼の動きを徹底的に追わないと分身を3体にし機動力を上げ私も出撃し徹底的に探索したところやっと見つけることができた。

どうやら、彼らはこの戦争を継続しようとしている人達を知ってい

るようね。彼らも連合を追い出されたみたいだし、前から誘われていたし私も一緒に行ってみようかしら。じゃあ、声をかけないとね。

「方針が決まりましたし、行くとしましょう。何時までもこんなところには…」

ふふ、そんなセリフを聞いたら言ってみたくなくなっちゃうわね。

「見つかったらもうものね。」

うん、こんなセリフ1回は言ってみたいものよね。まあ、そのおかげですごい形相で振り返ってきたけど。ふふ、驚いてる驚いてる。

「久しぶりね。」

「マミ！」

さて、どこから話そうかしら。

(side 紅き翼)

「何でお前がメガロに！？いったい…。」

「驚かせた私が言うのもなんだけど、今は移動した方がいいんじゃない？連合もその内嗅ぎ付けるわよ。」

それもそうだな、話してくれるみたいだしとりあえずここを移動するか。

「それで、声をかけてきたのですから何か案でも？このまま帝国に突っ突は無しですけど。」

「違うわよ。私も追い出されたし。その辺境に行くまでの足の提供があるのよ。そこでなら落ち着いて話もできるしね。」

と、いってマミは海の方に移動を開始した。どうするか少し迷ったが畏じゃ無さそうな事と追い出されたって話しも気になるし後を追った。

「ブード、来なさい！速さならグールが一番なんでしょうけど、空を飛ぶからね。こっちなら潜水型だから潜ってしまえば見つからないわ。」

海へ移動したあいつは突如巨大な船を出現させた。これがアイツのアーティファクトなんだろうがやろうと思っただら1人でメガロを壊滅できそうだな。

驚いたばかりいるわけにもいかず潜水艦に乗った俺達は目的地をオリンポス山に設定してもらい改めて話し合いに入った。

「それにしてもすげえな。こんなモンまで呼び出せるのか。」

「色々制限もあるけどね。このまま外洋に脱出すればそこからはグールで一ツ飛びできるけどどうする？」

「そうですね、そのグールはある程度は見つからないようにする装備はありますか？」

「ええ、あるわよ。」

「それなら俺とタカミチを乗せてアリカ王女が会談をするために向かった場所に届けてくれ。」

「そうだな。俺達はこのままでいいが姫の安否、もしさらわれたならその行方は一刻も早く知っておいたほうがいいからな。」

姫さん無事でいてくれよ。

「わかったは、でもその前に互いの状況を確認しないと。」

「む、そうだな。じゃあ、どっちから話すか。」

「私から話すわ。私はあの後……。」

マミの話だとあの戦いの後、責任を取らされて帝国軍を追放。元々この戦争に違和感を覚えていたから連合のほうも見にきてみた。その調査中に俺達を発見して接触してきたらしい。

「何だそりゃ！何でマミのせいになっただんだ！！」

「責任の是非はともかくアレだけの活躍をしたあなたを追放という話もおかしいと言えはおかしいですね。」

「ああ、大打撃を負ったのなら彼女は手放せない気もするが。」

「どうせあいつらの仕業だろ？それより、お前も紅き翼に入るのか！

「歓迎するぜ！今度手合わせしようぜ！！」 「おい！今度は俺だ

ぞ。」 「いいじゃねえかよ。あ、詠春もまげてやらねえとな。」

仲間はずれは駄目だからな！

「今はそんなことはしてる暇は無いだろ。まあ、興味はあるが。」  
「しかし、いよいよ我々紅き翼もチート、バグ軍団化してきましたね。」

「じゃな、ナギとラカンでも十分じゃがさらにマミもか。」  
「ふふ、よろしくね。」

次は俺達のことも話したら<完全なる世界>の名前になんか反応していたけど。どこかで聞いたのか？

その後沖合いでガトウとタカミチ、それにガミアって奴をグールつて飛行機に乗せて分かれた俺達はオリンポス山の隠れ家に向かった。

(sideマミ)

(<完全なる世界>そういえばそんな人たちもいたような…。原作のことかなり忘れてきてるわね。メモツといた方がいいかしら?)  
どうやら転生後色々あったせいで原作のことはかなり忘れつつあるようだ。

(side紅き翼)

無事に隠れ家に着いて今後のことを考えていた俺達にガトウから通信が来た。

「それでガトウ、姫の行方はわかったのか？」

<ああ、どうやらアリカ王女は「夜の迷宮」に監禁されているらしい。俺も今からそっちに向かう、救出するにしても早くしたほうがいいだろうからな。>

そこに姫さんがいるのか！なら早速。

「ナギ少し落ち着きましょう。」

「そうだけ、愛しの彼女の行方がわかったからって張り切りすぎだぜ。」

またその話か。何回言えばわかるんだよ！

「ラカンの話とはかく無策で飛び込めば姫にも危害が及んでしまいかもしれん。少しは作戦を立てないと。」

む、それもそうか。

「一番確実なものは罠を使ってそのうちに救出なのでしょうが。」

「向こうも奪還されることは予想しているだろうからな。俺達が行っても罠とばれてしまうだろう。」

「マミなら我々と関係が無いため大丈夫でしょうが。一人ではさすがに難しいでしょうし。マミ何か案はありませんか？」

「機械獣を使ってもいいけれど下手をすれば籠城されるわね。」

「注目を集める意味ではいいかもしれないが、籠城をされると困るな。いくらなんでも攻撃するわけにもいかんし。」

「ええ、冷静に対処されては罠ということがばれてしまいかねませんね。」

「冷静に…、たしかアレが。」

さつさと突っ込んで行けたら楽なんだがなあ。ラカンなんか船の中を見に行つちまつてるし。ん？何かマミが考えてるな。

「ねえ。あなた達の中で霧か砂嵐を起こすことができる人っていない？」

「起こすことはできませんが。敵の視界を塞ぐものとなるとかなり接近しないと使えませんよ？それでは近づく前に…。」

「いえ、敵の近くで起こすのじゃなくて…。」

マミが言った作戦に詠春とアル、師匠は啞然として俺と戻ってきたラカンは大爆笑した。

「あつははははは、トンでもねえな！でも、それなら相手のドギモウ抜けるだろ！！」

戻ってきた、ガトウとタカミチにも話したが何か頭を抱えていたな。作戦も決まったことだし行くか！

( side 夜の迷宮 )

「おい、あいつらの様子はどうだ？」

「大人しいものですよ。」

ここはアリカ姫と帝国皇女が監禁されている<夜の迷宮>その警備兵たちがつめている待機所だ。

「連合の紅き翼はどうやら追い出されたらしいぞ。」

「馬鹿な奴らだな。傭兵は傭兵らしく命令ど通りに戦えばいいものを。」

「まったくだ。」

と、今日の上から命令された王女の監視という暇な任務をこなしつつ一日が過ぎていくはずだった。……あの報告があるまでは。

彼らがその後も話していると突如あわただしい足音と共に1人に同僚が駆け込んできた。

「た、大変だ！」

「どうしたんだ？外に何か見えたのか？」

「あ、ああそ、外に！」

「とりあえず落ち着け。竜の群れでも見たのか？」 「はは、そりゃ確かに大変だな。」

と、駆け込んできた同僚に話しかけつつ持ち込んでいた酒を飲んでいくと。

「そんなモンじゃねえ！たぶん150mはある巨人がこっちに向かってるんだ！！」

「「ブウーーーーー！！」」

そのあまりにも予想外な一言にそろって呑んでいた酒を噴出すると問い詰めだした。

「ひゃ、100mだあ、何の冗談だよ。」

「全身は見えないんだけど頭部は確認できているんだ。とにかく来てくれ見てくれればわかる。他の奴らも集まってる！」

にわかには信じられないが、とにかく向かってみることにした2人はそこでココにほとんどの兵が騒いでいるところを発見した。

「おいおい、マジかよ。」 「誰か望遠鏡を貸してくれ！」 「ほらよ。」 「真っ直ぐこっちに来るぞ！」

「嘘じゃないみたいだな。」



「違いますよ、これで見てみてください！」

貰った双眼鏡で他の奴らが見ているのと同じ方向を見た彼の目には霧のせいで身体は見えないが周りの物から推測すると20mはありそうな巨大な頭部を持った男がこちらに近づいてくるところが移った。

「マジかよ……。」

「船が張りぼてじゃないのか？」「あんな悪趣味な船があるかよ！」  
「張りぼてじゃないぜ、さっき近づいた竜を触手で打ち落としてた。」

「そもそも地響きも聞こえるじゃねえか！」

「足元が見えないのでわからないですけど、頭部の大きさから150mは超えますよ。」「150m以下ならよほど寸胴だろうな。」

「顔だけって事は……、すまん忘れてくれありえねえな。」

これが王女奪還のために向かつてきた艦隊が装備する鬼神兵ならまだ彼らも冷静に対処できたかもしれないが、鬼神兵ではなくどうにも髪や髭らしき物がある巨大な人間の頭部を持ったものが単独で来ているといったわけがわからない状況のせいで大混乱におちいつていた。

「とにかく！騒いでもしかたなねえ。あいつ等を連れて脱出するぞー！軍ならまだ人質と立て籠もってもいいがあんなのと戦ったって意味がねえ！」

なんとか、冷静さを取り戻した1人が今後のことを言ったがそれは少し遅かった。

「それは困るな。また探さなくちゃいけない。」

「な！だれだ……。」

言い終わる前に彼らの意識は深い闇に落ちていった。

(side 紅き翼・陽動班)

「どつらや、ナギたちはうまく潜入できたようですよ。向こうは大混乱のようです。」

「それはそうじゃろ、こんな物が来るなんて想定しているわけが無いのじゃからな。」

「だからこそ陽動の意味があるんじゃないですか。」

私が陽動用に呼び寄せた機械獣は150mを超える強力な機械獣。では無く100m近くあるが建設用で戦闘力は低いタイターンG9とブロッケン伯爵の頭部を模した巨大な顔のブロッケンV2シユタイナーだ。

やったことはタイターンにブロッケンを掲げさせてそれがばれないように霧で胴体を隠しつつ接近しただけだ。大きさもそうだがブロッケンV2シユタイナーはかなりブロッケン伯爵のつまり人の顔に近い形なため遠くからだと巨人が接近してきているように見えるのだ。

100m超とそれだけでもトンデモナイのに人間にごく近いように見える頭部を持った物体ということが強烈なインパクトを与えることに成功しナギ達の潜入に役に立ったようだ。

「後は、ナギ達しだいね。」

成功を確信しつつ私達は撤収準備に入った。

(side 紅き翼・突入班)

のんびりしていた所にアレがよほど聞いたのか警備兵は殆どがアレを見に行っていて中はがらだった。

「ガトウから連絡だ。あつちは無事に制圧したらしい。油断していたが無駄に大量にいたから苦労したつてよ。」

「この様子だとほとんどあつちだろうな。マミの作戦は大成功だな！」

「アレだけ俺様を爆笑させたんだ、成功するに決まってる！」

「物凄い目立っているだろうな……」

だな、それにしてもマミのトンデモないがあんなのが入ってるアーティファクトもトンデモナイな！

「っと、ココだなまさかここもないとは」

「楽でいいじゃねえか。」

「鍵もねえし…オラア！」　バガン！

「おい！ココも遺跡だぞ？」

「しるか、あいつらが壊したってことにすればいいだろ。っと、よ  
お来てやつたぜ姫さん」

「遅いぞ我騎士」

姫さんといいでに居たもう一人を連れて俺達は隠れ家に戻った。姫  
さんにも見せてやると思ったがマミの奴がもう戻ってた。

(sideナギ)

で、隠れ家に戻ってきたんだが

「なんだ、これが噂の紅き翼の秘密基地か！どんなところかと思え  
ば…掘っ立て小屋ではないか！」

「俺ら逃亡者に何期待してたんだこのジャリはよ。」

「秘密基地が見たいならサルードを呼びましょうか？アレは秘密基  
地っぽいわよ。」

「何だ貴様、無礼だろう！」「へっへえ。あいにくヘラスの王族に  
貸しはあつても…」「なにい？貴様…」「まあまあ。」

「あのやけに元気な少女が。」「ええ、ヘラス帝国の第三皇女です。」

「あっちはやけに賑やかだなあ。」

「さくて、姫さん助けたのはいいけどこっからどうする？連合にも  
帝国にも、そしてあんたの国にも味方はいねえ。」

「恐れながら事実です王女殿下。殿下のオスティアも似たような状  
況…。最新の調査ではオスティア上層部がもつとも「黒い」という  
可能性さえ。」

本当に味方が待たたくいねえな。それにしても姫さんの国が一番黒  
いとは。

「やはりそうか。」

ん？あんまり驚いてないな。

「我騎士よ」

「だからその「我騎士」って何だよ！姫さん。」

俺はクラスでいったら魔法使いだぜ？

「もう連合の兵ではないのだろう？ならもはやお主は私のものじゃ。」

「な…、どんな理論だよ！これが王族か！！」

「連合に帝国、そして我オスティア…。世界全てが我らの敵というわけじゃな。」

改めて聞くとんでもない状況だな。

「じゃが…、主と主の<紅き翼>は無敵なのじゃろ？世界全てが敵。良いではないか、こちらの兵はたった8人だが最強の8人じゃ。ならば我らが世界を救おう。我騎士ナギよ我盾となり」

へへっ、ココまで言われて答えられないなんて男じゃねえな。

「剣となれ。」

それに、魔法使いだっての。

「やれやれ、相変わらずおっかない姫さんだぜ。」

なら、言うことは一つだな。

「いいぜ、俺の杖と翼あんたに預けよう。」

世界が敵か、元々世界を操ってる奴が敵だったんだかわらねえか！

さあ！反撃開始と行くか！！

## 大分裂戦争<完全なる世界>(後書き)

やっと、紅き翼と合流できた！ついでに久しぶりにブロッケンの能力が役に立ったw

大戦編ももうあと少しで終了です！その内、外伝で色々な間の事とかも書けたら良いなあ…。

### 次回予告

「反撃を開始した紅き翼。しかし、完全なる世界も一筋縄では行かない相手。6ヶ月の大激闘、そしてついに部隊は最終決戦の地へ！」

次回 真ネギま マギカZ」

「

(前書き)

今回は短めです

真のサブタイは最後にあります！

あの誓いの後私達は「完全なる世界」に対して反撃を開始した。といつても相手の全貌は未だに不明なため。彼らが世界に対してちよつかいをかけるのに使う下部組織である武器商人やマフィアの壊滅、私腹を肥やしたり利敵行為をしていた役人を法廷に突き出したりと、外堀を埋めつつ。お姫様たちが連合や帝国内で理解者を増やし味方にしたりといった事をしていた。もつとも、敵味方の判別や証拠集め、説得は主にアルビレオやガトウと言った紅き翼の頭脳担当に任せていたのだけれどね。ナギとラカンの2人は致命的に向いてないし、私も前世はごく普通の一般人で転生後も剣闘士と傭兵くらいしか経験が無い。ガミアちゃんや諜報に使えるような機械獣を貸し出して入るけどもつぱら敵拠点の殲滅が仕事だ。

もつとも、いつも敵拠点に襲撃をかけてるわけでもなかったからナギやラカン、詠春とも何度か手合わせしてもらった彼らとの手合わせのおかげで超一流相手にも何とか勝てるようになったかしら？彼らのような使い手との戦闘経験はものすごく貴重ですものね。

そんな戦いが6ヶ月続いた。そしてついに彼らの本拠地を突き止めるにいたった。そこは意外なようでその歴史と上層部の多くが「完全なる世界」に染まっていたことを考えると当然とも言える場所。世界最古の都、王都オステイア空中王宮最奥部「墓守人の宮殿」。そこが彼らとの最終決戦地だ。

「不気味なくらい静かだな。」

「なめてんだろ。悪の組織なんてそんなもんだ。」

私たちがここに居ることは知っているはずなのに未だに動きが無いものね…。

「ナギ殿！帝国・連合・アリアドネー混成部隊、準備完了しました。」

こっちの準備は完了したわね。あ、彼女はセラスさんアリアドネーの騎士団の方だ。アリアドネーは中立国の中でも少し特殊な方針で動いていることとそれなりの規模の戦力を持っているので今回、来てもらったのだ。

「あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ俺達が本丸に突入できる。頼んだぜ。」

今まではそっちも自分たちでしていたのだけれど敵は幹部たちと言うことともう一つ理由があつて余り時間をかけるわけには行かない、だから紅き翼全員で突入し速やかに拠点を制圧する必要がある。

「ハッ！…それで、あの…ナギ殿」「ん？」

「ササ、サインをお願いできないでしょうか。」

「おお？ああ、いいぜそれくらい」「ふふ、人気者ね。」

「そ、尊敬してました。」

ふふ、真つ赤になつちやつて。決戦前にこんな事を言える余裕があれば大丈夫かな？あ、連合に交渉に行っているガトウから通信が。

「連合の正規軍の説得は間に合わん。帝国のタカミチ君と皇女も同じだろう。決戦を遅らせることはできないか？」

「無理ですね。私たちでやるしかないでしょう。」「すでにタイムリミットだ。」

「ええ、彼らは始めています…。<世界を無に帰す儀式>を。世界の鍵<黄昏の姫御子>は今、彼らの手にあるのです。」

「ああ！（待つてるよ…、姫子ちゃん！）」

そうこれが私たちが急ぐ理由と部隊が混成といつても主にアリアドネーの部隊で構成されている理由だ。ただ、彼らの目的は未だに信じられない。世界を無に帰す…、そんなことをしていったい何の意味が？

「よおしつ 野郎ども」

つと、それは彼らをとめてから考えましよう今は。

「行くぜ！」

儀式をとめない！



混成部隊の人たちがつくつてくれた、道を行き私達は無傷で「墓守人の宮殿」内に突入することができた。そしてそこには、  
「やあ、く千の呪文の男、また会ったね。これで何度目だい？僕達もこの半年で君に随分と数を減らされてしまったよ。この辺りでケリにしよう。」  
「どうやら幹部がそろい踏みね。でも、この人達を倒せば！数はちよつど同じ、それぞれが戦闘にと突入していった！」

(sideマミ)

「あなたと戦うのはこれで何回目かしらね？」

「ふん、何回だろうが同じだ。貴様は我々の計画成就のためになんとしても潰させてもらう！」

私の相手は髑髏をあしらった頭巾をかぶりボロボロのローブを着た顔色が悪い人だ。ただこの人、顔色は悪いけど身長は3m近くあって戦闘方法もリング状の光を投擲したりそれで直接切りつけてくるなど接近戦が得意なようだ。他にも足元から強烈な風を起こしたり、呪術も使えるようなんだけど。ただ、私が一番気になるのはこの人のことを見たことが有る気がするからだ。転生後じゃないことは確実だから、前世？でも、こんな人が居るわけもないし。

「さあ、語り合つのもこれが最後だ！もちろん互いのかをを見ることも！」

何にせよ今はこの人を倒さないとね！！

その後のことはよく覚えていないが激戦であったのは確かだ。マミさんの魔法によって弾幕をばり、相手は対抗するように呪術で分身を作り多方向からの同時攻撃、マジンガークブレードで切り裂きアトミックパンチで吹き飛ばし、突風で吹き飛ばされたところをリングで切られた、手を掴み至近距離からブレストバーンをおみまいした

……、そしてついに。

「はあはあはあ、これでやっとなりね。」

分身を全て倒し片腕を切り飛ばし、今残ったもう一つの腕にブレードを刺して縫い付けることに成功した！

「く、やはり！やはりお前は！！このようなところで私があ！！」

「恨み言はあの世でお願いね。もっとも、その前に自分たちが殺した大勢の人の恨み言を聞かされるでしょうけど。」

止めを討つためにブレストバーンを発射する瞬間に

「このような所で人形共とともに滅びてなるものか！あの御方のためまだ私は！それに貴様は！貴様の力だけは！」

あの御方？まだ他に誰か？そのことを聞きたくもあつたが時間をかけて回復されても困る！

「見苦しいわよ。これで終わりよ！ブレストバーン！！」

「があああああああ！！見ておれ今に必ずお前を……！！」

最後まで恨み言を言いながら彼は炎に焼かれて消えた。

「ふう、なにか化けて出そうね。」

皆は……、いたいた。どうやら皆のほうも終わったみたいね。ナギがリーダーの青年を捕まえている。

(side ナギ)

「見事……、理不尽なまでの強さだ……。」

「黄昏の姫御子は……どこだ？消える前に吐け。」

こんな状態だつてのにまだ余裕面でいやがる。

「まさか君はいまだに僕が全ての黒幕でトップだと思っているのかい？」

「なん……だと？」

なに？まだ上が居るってのか。

バスッ！！

(side マミ)

それは一瞬のことだった。突如としてナギが青年ごと後ろから撃たれたのだ。そして撃った者がいると思える方向を見ると。

……… アレは、なに？ 禍々しいって言葉さえまだ生易しいような  
って、まずい！！

アレが、何かを放つ直前ギリギリでナギとの間に入ることができて  
防御したが。

ゼクトが張った絶対防御の多重障壁を煎餅でも砕くかのように粉碎  
し同じく防御に入ったラカンの腕を消滅させ盾として掲げたマジ  
ン ガーブレード 超合金ニューZ を粉碎し、私たち全員を吹き飛ば  
した。アレはこちらがもう戦えないと判断したのか姿を消した。お  
そらく儀式の場所に向かったのだろう。

「く、皆！ 大丈夫！？」

って、聞くまでも無いわね。ラカンは両腕消失、ナギも撃ち抜かれ  
ているから同じく重症だし。詠春だって、ナギを守って攻撃を受け  
たせいで戦える状態じゃないだろう。

「マミお前は？」

「こんなときは自分の頑丈さに感謝ね。私はあれの後を追うわ。皆  
は態勢の立て直しを。」

「待てマミ！ お前一人じゃ無理だ！！ おい！！」

わかっているわよ、それくらい。でも、ここで引き返すわけにも行  
かない。

私はみんなの声を振り切って宮殿の奥へと向かった。

いた！ それにしても禍々しい気配ね。さっきより増してるんじゃない  
かしら？

「ほう、あれをくらってこうも早く追ってくる者が居るとわな。」

「ふふ、頑丈なのは私のとりえの一つだね。」

実際に防御力は超合金ニューZのおかげで最高クラス。それにソウル・ジエムも付いているから魔力があれば超回復も可能。スパロボ風にいえばHP回復（大）ってところかな。もっともその魔力が今は残り少ないのだけねど。

「はあっはっはっはっは、なかなかどうして。どうだ、我元に来ぬか？ 貴様ほどの力、無為に散らすは惜しいな。」

「お生憎、そんな要求は聞けないわね！」

「ならば、死して我の力にしてくれようぞ。」

出し惜しんでたつもりは無いけど、全力全開。後先考えずいくしかないわね！

「マジンパワー！ 発動！！！」

体内の光子力エンジンをフル回転させ膨大な光子力をまとっていく。これを使えば切れたときが最後…、真正正銘の最後の切り札。

「む、その力は！！くくく、ははは、はあっはっはっは！！まさかもう一度その力を見るとは、なるほどそれならば納得できるな。そしてお前はここで我がじきじきに消滅させてくれる。」

なに？ いきなり笑い出してそれに光子力のことを知っている？……

まさか！

「おおかた、奴が送り込んできたといったところだろう。」

「まさかあなたは！！！」

そんな！ よりによってこんな時に！！じゃあ、もしかしてこの儀式の目的って！

「その様子だと聞いているらしいな。よかろう冥土の土産に聞くがいい！ 我名は！」

真ネギま マギカZ第13話

「闇の帝王」



(後書き)

これがやりたいがために短くてあのサブタイになりましたw  
次回も短いと思います^^;長い戦闘シーンなんて無理です…

ついに登場した大ボスこと闇の帝王様！ハーデスって言った時から気がついてた人は多いかな？魔法との相性もよくて兜一族製の魔神の敵ってことでこうなりました。ちなみに今回マミと戦ったのは“彼”です。

設定のときにちょびっと書いてたソウルジェム、しっかり装備？しています。

マジンガー的にパイルダーって感じで丁度よかったですねw

6ヶ月間のことは後々外伝でしていきたいともありますねえ。

次回予告

「ついに現れた真の敵、それは使命で倒すべき相手であった。だが、今の状態で勝てるのか…。」

次回

真ネギま マギカZ 「決戦」

この次回予告も学園編だと変えないとなあ。

## 決戦（前書き）

今回で大戦編は終了！

ちなみに闇の帝王の姿は原作の創造主と同じです。

## 決戦

(sideナギ)

「くそ！ママの奴、普段は無茶するなって言っておきながら自分が一番無茶じゃねえかよ！」

くそ、確かにあいつは強いし傷も浅かったが、だからと言ってアレは魔力が少ない状態でどうこうなる相手じゃねえぞ！

「アル、お前の残り魔力全部で俺の治癒を！」

「な、いけませんナギ！そんな無茶な治癒では、それにアレはそんな状態で……。」

「30分ももてば十分だ。それにママの奴だっている。」

無茶なのは割ってる。だが、あいつだけ戦わせるわけにはいかねえ。

「ふふ、よかるう。ワシも行くぞナギ。ワシも傷は浅いほうじゃからな。」

「お師匠……。」

お師匠も居てくれるなら心強え。

「待てナギ！奴はマズ過ぎる！今までの奴が雑魚に見えるくらいだ。ママを連れ戻して態勢を立て直してだな。」

そんなことわかってるよ。だけだよ。

「バーカ、そんな時間残ってねえよ。らしくねえなジャック。それに、ママも誰かが来ると信じて先に行っただろう。」

ならその信頼に答えてやらないと男じゃなえよ。

ドゴォー！！

どうやら追いついたみたいだな。なら早くいかねえと！

「それにな、俺は無敵の千の呪文の男なんだぜ？俺達は勝つ！任せとけ……！」

「ナギ……！」



俺と師匠は全力でさっき爆発が起こった場所に向けて出発した。マ  
ミすぐ行くからな！

(sideマミ)

「マジンガーブレード！」

剣を振りかぶり全力で彼に切りかかる。

「ふん！その程度。」

剣は弾かれたがそのまま次の攻撃を叩き込む！

「ブレスト！」

「させるか！」

く、攻撃を中止して回避をしたためまた距離が開いてしまった。

「ふふふ、どうした？その程度か。」

く、やっぱり一筋縄ではいかないわね。さっきから攻撃をあててる  
けどあまり効いてないみたいだし…。

あの身体から出ている炎。あれが強固な障壁として機能しているみ  
たいけど。

「我を倒してこの儀式を止めるのではなかったのか？ふふふ、この  
ままでは寝起きの一杯にすらならぬな。」

「ええ、例え使命を受けていなくてもあなたは絶対に止めるわ！」

「勇ましいいな。ふむ、なにやら2つの力が近づいてきておるな。」

ナギ達かしら？でも、大丈夫なのだろうか…。来る前に見た限りだ  
とゼクトの傷は比較的浅かったけど。

「ふむ、3人なら少しは楽しめるか？ならそれまでに先ほどの貴様  
の質問に答えてやろう。」

「あら、やさしいのね。」

「帝王たるもの下々の者には優しくせねばな。それにこれから死ぬ  
のだ。地獄への土産話も持たせないのでは帝王の名折れだ。」

向こうが時間をくれるならその間に回復と攻略法を！

「この騒乱は我が起こしたとかいっていたな。残念ながら我はつい

最近まで眠っていてな。この器の元々の持ち主がやったことだろう。儀式の目的は大方の見当は付くがな。」

「あら、そうなの。その身体の持ち主はあなたのことを？」

「知らぬよ。その必要もないのでな。だが、この儀式を利用すれば我もある程度の復活は可能か。そこは褒めてやらねばな、ふははははははは。」

絶対に彼を倒して儀式を止めればいけないわね。彼が復活するなんて悪夢以外の何者でもないはね。

「もつとも、アヤツ等も少しは何かやっていたようだがな。」

ん？何か違和感が…。「完全なる世界」の事じゃなさそうだし。

「アヤツ等？」

「我がミケーネは滅びてはおらぬと言う事だ。さて、土産はこれで十分だろう。今来る2人には持たせてやれぬが我と直接顔を合わせただけでも名誉だ。貴様は1人で来た褒美だ。せいぜい自慢する事だな。」

な…、ミケーネが滅びていない！？それはいつたい…。

「マミ！無事か！！！」

「ナギ！それにゼクトも！」

「全く無茶をしよる。」

疑問は後だ！今は全力で立ち向かうしかない！！

「ふふふふふ、さあ楽しませてもらうぞ！」

ゼクトにはサポートに回ってもらい私とナギ2人で切り込んだ、威力の低い攻撃は相変わらず炎によって防がれているが3人になった事で炎の防御を突破できる攻撃を放つ隙を作る事ができている！

「ち、3人だとさすがに厄介だな。」

「どうしたそんなものか！」

「あまり調子に乗るな！」

「くー！」

「ナギ！プレストバーン！」

「ぐお！」

これなら勝てる！

「マミ！デカイのいくぞあわせろ！！お師匠！」

「任せろ！マミお前はナギに合わせろ。」

ナギは千の雷の詠唱に入り、私に変わってゼクトがあいつに攻撃を仕掛け気を引き付けているうちにグレート最大の攻撃の準備に入った。

「ちっ！ちょこまかと。」

「余裕ではなかったのか？油断しすぎじゃな。」

全くそのとおりね！でも、そのおかげでこっちは戦えてるのだから。ゼクトも離脱した！ナギのほうは詠唱を完了したみたいね。私もエネルギーのチャージは終わってる！

「千の雷！」

「ダブルサンダーブ레이크！」

2つの巨大な落雷が闇の帝王を襲った！2つの巨大な雷は互いに影響しあい威力を高めた結果。それは最早、雷ではなくプラズマの塊だ。温度がどうなっているのか見当も付かないこれなら！

「やったか！」

ナギもこの光景に相手の敗北を予想したみたいだ。……だが、相手の力はそれ以上の上だった。

闇の帝王を焼いていたプラズマが巨大で禍々しい炎で吹き飛ばされ、その中から無傷のやつが出てきた。

「ふふふ、今の攻撃はなかなか危なかったぞ。確かに油断をしすぎたようだな。だが、もうそれも終わりだ。我にはまだやらねばならぬ事があるのでな、貴様らの地獄への土産も十分だろう。」

く！本当に最近まで眠っていたのかしら？ここまで強大だなんて。

「ナギ、後どれくらい戦える？」

「もう余り魔力も残ってねえな。でかいのを1発2はつって所か。」

お前は？」

「私よりはいいわね。私は出せて1発かしら？それに……。」

マジンパワーも、もう維持限界だろう。これが切れたら非常にまずい。どうやって彼をしとめるか…。再度先ほどの攻撃を仕掛ける…。駄目だ。出力不足だろう。光子力ビーム…。おそらく防御を突破できるだろう。が、そう易々とくらくらくしてくれるか。それにあの炎を完全に吹き飛ばすには出力不足だろう。

く、まずいわね。光子力ビームなら何とかかなりそうだけど、命中するかと防御を突破、なおかつあの炎を吹き散らせれるか。ダメージを与えられてもあれがあったらナギの攻撃が通らない。私が何とかしないと！

あの炎を完全にかき消すとなると光子力じゃないとまず無理だろうし、そうなるか…。

はあ、こんな手しか考えつかないなんて。もっと、修行をしていれば良かったわね。今更ではあるか。

「ナギ、今から私が全力で彼に攻撃をかけるわ。障壁を完全に消せるだろうから私に何があってもかまわず彼を倒して。」

「マミ？」

怖くはある、いやものすごく怖い。できれば今すぐに逃げ帰りたい。でも、そんなことをしてどうなる？ 私が逃げればナギとゼクトは負けて死ぬだろう。そうになると儀式は止まらない、魔法世界は無に返るだろう。転生してから知り合った人たちも…。

それに彼を野放しにすればきつと向こうの世界も無事ではすまない。第3次世界大戦が勃発する可能性だって、いやもしかしたら北斗の世界になるかもね。逃げたところでどうにもならない、それに今ならナギがいる。彼ならきつと…。

ならば、私がするべきことをするだけね。まだ怖いでも逃げた後悔するほうがもっと怖い！

「光子力エンジン、フルドライブ！！行くわよ！」

「む！まだそんな力が！！」

残っていたありったけの力を全て光子力エンジンに供給し膨大な光

子力エネルギーを放ちながら私は闇の帝王に向かって突っ込んだ。  
「じゃあね、ナギ」  
闇の帝王に抱きつき溜め込んだ膨大なエネルギーを解き放ち。私の意識はなくなった。

(sideナギ)

「私に何があってもかまわず彼を倒して。」

「マミ?」

そんな、ことを言ったあと、アイツは膨大な力を感じる光を身に纏って敵の親玉に突っ込んでいった。

その力から何か大きなことをする事は想像がついたが漠然とした不安が湧き上がってきた。

そしてその不安は現実のものとなった。

「じゃあね、ナギ。」

その言葉と共に敵に掴みかかったマミは膨大な力を解き放って、敵諸共自爆した。

「マミイイイイイ!」

「な!なんてことを…。じゃが、ナギ!」

「おう!」

悲しんでいる暇なんてねえ!そんなことをしたらマミのやった事の意味がなくなる。俺はありつただけの魔力を、後先考えない全力の1発を敵がいるだろう場所に向けて撃ち込んだ!

## 決戦（後書き）

真ネギま マギカZ 完！！

嘘です。すいません…。

うう、文才が欲しい。もうちょっとかっこよく書けたらいいんですけど今の私の文才ではこれが限界です…。グレートもあんまり活躍させれなかったなあ。

次回はまたゼウスとの語らいと帰還です。

その後、何話かしたら麻帆良学園行きです。

主人公設定も整理をかねてちょこっと載せます。

設定の不備等、気がついた事があったらどうぞ遠慮なく言ってください。

大戦期の外伝のネタも募集中ですw

帰還と新たな決意、新しい仲間（前書き）

新章開始です！

## 帰還と新たな決意、新しい仲間

「ここは？」

周りを見ると古代ギリシヤをほうふつとさせる部屋が見えた。

確か私は敵の最後の拠点に乗り込んで……。

そうだ！敵の親玉が闇の帝王だったんだ。それで、何としても倒そうとして私は…。

「あの後どうなったのかしら。ナギは勝てたのかな。…いいえ、ナギならきつと勝ってるね。」

彼ならきつと大丈夫だろう。

「それにしてもここはどこかしら？あんな事をしたんだから死んだと思うんだけど、転生したときの場所とも違うみたいだし。それとも天国ってこんなところなのかな？」

と、疑問に思っていると。

「おお！目が覚めたか！あれから全く目覚めぬので心配したのだぞ。」

「

この声は。

「ゼウス様！」

「ゼウスでよい。」「そんな「かまわん」わかりました。」

彼が居るってことはやっぱり。

「ここはやっぱり…。」

「さて、色々と話したいことがあるがまずは。」

言葉を途中で切り彼は私の前に座りそのまま手をつき私に向かって。

「すまぬ。」

謝罪の言葉をかけてきた。

「私の見込みが甘すぎたようだ。アヤツの力が年々増している事はわかってはいたが、まさかあそこまで力を取り戻しているとは。」

「いえ、確かに驚きはしました。でも、闇の帝王の復活が早まった原因は私たち、人間にあります。ゼウスさんの想定を上回ってしま



うほど彼に力を与えてしまっていたのでしよう。」

闇の帝王が設定どおりならその力の根源は憎しみや絶望のはず。つまり、2度の世界大戦やそのほかの人間社会がつくってきた闇が彼に力を与えて、ゼウスの想定を超えるスピードで力を蓄えてしまったのだらう。

「闇の帝王それが今の奴の名前か。なるほど、奴に相応しい名だ。だが、私の見込みが甘かった事は事実だ。それに他にも謝らねばならぬ事もある。」

「他ですか？」

「ああ、以前に本来の体の話をしたね。」

「そういえば今（前？）の身体は仮だったわね。」

「その身体はある遺跡に封印してあったのだ。君が力をつけたときに場所を教え、自力で得てもらうために。だが…。」

嫌な予感がするなあ。

「あの戦いの後、その遺跡が荒らされ身体の行方が分からなくなってしまったのだ。本来の持ち主以外に操れはせぬとはいえ…。」

「彼がミケーネは滅びてはいないといっていました。やはり協力者が？」

「そのようだ、すまぬ。あの身体はオリジナルだから私から与える事ができなかつたとはいえ。」

「あの後どうなったか。教えてくれませんか？それと私が今どんな状態なのか。」

「死んでしまったのならもう1度転生するのだらうか？」

「そうだな。」

それから、色々と話してもらった。ナギがあの後勝った事、無事儀式が止められた事、そのせいでアリカさんのオステイアが滅んだ事、アリカさんが捕まったことナギに助け出された事、今は闇の帝王の力がごく微弱なものだという事、あれから10年の時間が過ぎている事。

そして…。

「マミ、お主は生きている。」

「え？」

生きている？そんなどうやって、あんな事をしたんだから死んだと思っただけだ。

確かに嬉しいが、余りにも意外すぎて。驚きと疑問のほう大きい。

「運が良かった。そうとしか言えぬな。」

そうつぶやくと当時のことを話し始めた。

「あの戦いは私も視ていたのだ。自分の不甲斐なさ、言ってお前たちを助けてやれぬこの身の無力さに嘆いていた。お主が命を持って、勝利するための道を作った時など特にの。」

戦士である彼には悔しかったのだろう、顔がゆがんでいる。

「だが、無事封印も終わったとき、ふとお前の力を感じたのだ。その後は無我夢中だったな。ようやく調整が終わったお主のサポート役をすぐに派遣し搜索させ、何とか発見できたのだ。」

サポート役か、どんな子なんだろう？そしてすごい不安を感じるのも何故だろう？

「見つけたお前は頭部だけでその状態も酷いものだった。」

頭部だけってことは、爆発のときに偶然外れてしまったのだろうか？プロツケンボディーに命を助けられるときが来るなんてね。

「魂を封じた器も損傷していたからな。そのものに安全な場所まで運び込み目覚めるまで守れと命令し。お主の魂はこの場所に召喚し力を注ぎ回復を促したのだ。それでも目が覚めるまで10年も掛かってしまったがな。」

ソウルジェムまで損傷していたなんて…。本当に運が良かったのね。でも、身体はどうなっているのだろうか？あつちは確実に爆散したはずだし。聞いてみよう。

「む、身体の事か？安心しろちゃんと用意してある。といっても以前の身体を強化したもののなのだがな。あのときの身体は奴の力の大部分を共に散ったからな。」

グレート時のことかな？グレート、今までありがとう。そし

て、おやすみ。

「あのような事になってしまったお主には辛いと思うがどうか奴を止めてくれ。今回の事でわかった、奴は封印などといってられぬ。例え今再び封印したとしてもいずれまた復活するだろう。」

「そうね、ゼウスがどんな封印をしたのかわからないけど。それさえも破って復活しかかっているのだ。今の人間の封印術じゃ、またすぐに復活してしまうかもしれない。」

「奴とはかつては仲間であった。考えの違いから対立し封印する事態となったが。封印されているうちに考えを改めるかと思ったが、それもかなわなかった。もやは奴をあの世界に残しておくわけにはいかん！」

改心してくれると信じていたけど、時間がたつても。いえ、年月を経た事でよけいに性質が悪くなってそうね。

「奴の封印されている地、奪われた身体、そして奴自身の力。これがどれほど困難な事かはわかってる。だが、どうか再びあの世界に行つて奴に引導を渡してくれ。」

その後も封印の地であるバードス島の状態を聞いたりした。確かに無茶なお願いな。完全な状態じゃなくてもあれだけの力を誇つたのだから。なのに、彼に終止符を討つには彼の本体とも対峙しなくてはいけない。

そのとき身体に魂が有るか判らないが前回とは比較にならないだろう力なのは容易に想像が付く。

逃げてしまいたい、そう思わなくもない。…でも。

「わかりました。次こそは必ず彼を倒してみせます。」

もう決めているものね。ここで逃げているのならばあの時あんな事はしてないもの。

「すまぬ…。」

でもそうになると、色々と準備をしなくちゃね。彼の詳しい情報も必要だし、何よりこれは1人でできる事じゃない。彼に本当の意味で終止符を討つなら大勢の、いえ世界規模での協力者がいるわね。

「いえ、私がやりたいのです。やらせてください！」

「わかった、私も色々協力したいのだが干渉できる時は限られている。サポート役を介して少しは協力できるようにしよう。」

「ありがとうございます。それで早速なのですが彼についての情報が欲しいのですが。」

「わかった、と言いたいのだが封印後の奴の情報は少なくてな。だが現在奴が活動するために奪っている魂の事ならわかる。」

「奪っている魂？」

「ああ、詳しくはわからぬが、今奴の精神が取り付いているのは向こうではく始まりの魔法使いく創造主くと呼ばれるものだ。」

創造主、それが本来の完全なる世界の首領だったのかしら？

「大方偶然バードスにたどり着いた者に魂に寄生する代わりに力を授けたといったところか。」

色々調べる必要がありそうね。

「わかりました、残りは向こうに行ってから調べてみます。」

「すまぬな。協力すると言っておきながら…。体の事と奴の行方はこちらでも調べてみるわかり次第連絡を送ろう。」

でも、彼の復活の原因を考えるとこれは私たちが解決しなければならぬ事だろう。

「では、あの世界に送ろう。サポート役はすぐ側に居る。仲良くしてれ。」

楽しみね。それに、心配をかけてだろう皆にも顔を見せないかね。

それに対峙する時のために修行もしないと。ふふ、忙しくなるわね。

「ではな。武運を祈る！」

今回はアレはなかったわね。とくだらない事を思いつつ私は帰還して行った。

「ここは。」

目が覚めて周りを見渡すと始めてこの世界で目が覚めて時のような石造りの部屋だった。

「戻ってきたのね。なら、早速行動しますか。あ、そういえばサポート役の子は？」

気合を入れて立ち上がり、周りを見てみると。

「やあ、目が覚めたみたいだね。」

「あ、そっちなのね…。え？」

振り向いた先そこには身体の大きさは猫くらいの可愛い顔にルビーのような綺麗な紅い目を持ち、その身体は純白の毛で包まれていて声もかわいい小動物がいた。でも、これって…。

「僕の名前は“キュウベえ” 聞いていると思うけどゼウス様から君のサポートをするように言われているよ。これからよろしくね。」

何でキュウベえ！君どっちかって言うと闇の帝王側じゃない？

あの時感じた不安ってこれか！

私がものすごく不安そうにしていると。

「あ、心配しなくてもあのインキュベータってのみたいに実は黒幕ってことはないから。だから闇の帝王が送り込んだスパイじゃないから安心してよ。」（まんまじゃ面白くないからね！by作者）  
それならいいのだけれど。あと変なコメントも入ったようない。

「ごめんなさい。いきなり失礼な事を思っちゃって。」

「いやいや、彼の事を知っているならしょうがないさ。じゃあ、改めてよろしく。」

「ええ、これから一緒に頑張りましょう。」

妙な事になったけど私はまた帰ってきた。そして今度こそは彼を必ず倒そう。

私は決意を新たに外へと踏み出した！

## 帰還と新たな決意、新しい仲間（後書き）

主人公帰還と彼登場ですw

主人公の真の身体、伝説の剣よろしくダンジョンに隠してたら魔王一味にはくられたでござる。

その他、創造主がああなった過程とかは後々書いていきます。

で、サポート役は彼ですw彼にも色々暗躍させようかなあ〜とw  
次回は設定です。

## 人物設定（前書き）

主人公とその他の設定です。



## 人物設定

主人公

名前 巴マミ

かつての身体は大戦時仲間を救うため爆散。現在は一番初めの身体をパワーアップしたもの。

グレート時の強化したZと違ってください。

グレート時からの変更点で。

マジンガーブレードなし。(アイアンカッターもない)

サンダーブレイクの機能なし。

各兵装の出力が若干ダウン。

スクランブルダッシュがなくなり、飛行するときは1回1回スクランダーを呼び合体する必要あり。付けたままでもいいが日常生活や接近戦では邪魔になる。

身体自体のパワーや防御力には変化はなく、ブロッケンの機能やマミさんの魔法も問題なく使用可能。

アーティファクトも健在、あしゅら達もいるけど当分ガミアQくらいしか出番はたぶんない。

強さは紅き翼クラス。ラカンの強さ表でいくと1万とかそんなくらい。

打倒！闇の帝王。のために修行をする事を決意、また協力者を増やす事も画策中。

キユウベえ

ゼウスが主人公のサポート役に遣わせた白くて憎いアイツ。

闇の帝王の手先じゃないのでご安心を。

でも、基本的な性格はアレっぽくする予定w

カモ君のライバル。

闇の帝王（旧名ハーデス）

ミケーネ帝国の支配者

かつてゼウスと意見を違え戦った後、居城であったミケーネ島ごと封印された。

その後、色々あって原作の創造主に寄生。復活のために力を蓄え、ついに復活！…って、ところで主人公と紅き翼にやられて弱体化。

その後、創造主として振舞っていたがまたナギ達にやられて現在は原作の状態です。

ちなみに闇の帝王やその他の話はマミにしかしていなく彼女も話す前に行方不明になったので原作キャラ全員は現時点では闇の帝王のことを知ってません。

完全なる世界の面々も同じく、彼のことは原作と同じ創造主と思っ  
てます。

ミケーネ

大戦編で最後のほうに何かやってた人たち

かつてのミケーネ帝国の末裔で闇の帝王復活を悲願として活動中。  
周りからの認識は完全なる世界の下っ端と思われる。

現在はとある計画を実行中。

バードス島

闇の帝王の居城で彼の本体があるところ。現在は封印されています。

## 人物設定（後書き）

学園編はギャグ主体で行く予定です。

また、学園編、魔法世界編はネギ君を主役として主人公はマミさんの皆のお姉さんなポジションで行こうかなと。

麻帆良へは数話後に出発かな？

では、最終回まで頑張っていきます！

マジーン・ゴー！

再開の旅と騒動と(前書き)

やっとネギ君登場!

## 再開の旅と騒動と

「それでママ、これからどうするんだい？」

「そうね。闇の帝王の事とかやらなければならぬ事はあるけど、まずは紅き翼の皆のところに顔を出さないとね。他の皆にも帰ってきたことを言わないと。」

肩の上のキュウベいに今後の予定を話しつつ近くの町に足を向けた。あんな分かれ方をしたんですもの。無事を知らせてあげないと。ふふ、皆びつくりするだろうな。

その後、チョッパやラリーさん達に無事を知らせる挨拶をしながら紅き翼の事を聞きいたら、フラガさん達のところ顔を出したときにラカンが近くにいらしいことを聞いて、現在そのいらしい場所に向かっているところだ。

「皆の話だとこのあたりね。」

「だね、それにしてもすごかったね。どうやら君は慕われているみたいだね。」

「行く先々で宴会が開かれちゃったものね。でも、嬉しいけどそれだけ心配をかけてたってことだからちよつと申し分けないなあ。」

「君は謙虚というか何と言うか。…つと、あれじゃないかな？」

前方にオアシスが見えてきた。たぶんあれだろう、私は足を速めて目的地に急いだ。

「誰もいないわね。」

着いたのはいいけど、そこには家やイスなどはあるのだけれど目的に人物が見当たらない。

「君の話からすると居る事に気がつかないようなおとなしい人物じゃないだろうから、街に行ってるんじゃないかな。食料もないからその調達だね。」

「そうね、寝ていたとしてもすぐわかるような人だし。…って、キ

ユウベえなに勝手にのぞいてるの。」

「ここが使われているか判断するためさ。当然だろ？ゴミとかもあるしここが別荘ってことはなさそうだね。ゴミも比較的新しいみたいだし。」

確かに別荘かどうかとは調べたほうがいいだろうけど、人の家なんだから。…なんでこんな所はあのQBと同じで人の感情とかを横に置いたような行動するんだろう？

「ここを第3者に見られたら思いつきり泥棒みたいでしょうね。」

「おい！人の家でなにやつてるんだてめえら！」

「そうそうこんな感じに…え？」

何か早速そんな事態にそれにこの声って。

「ふてねえ野郎だ。だが俺様の家に侵入したのが運のつきだな。つてことで行くぞ！」

「え！ちよ…！ラカン、私よ…！」

「俺の知り合いにこそこそする奴はいねえ。」

その後、数時間ほど戦い何とか誤解が解けた。というより彼、途中から私だつて気がついていたわね。だつて…。

「ママ！生きていたのかよ！」「ええ、だから…。」

「あれから10年か？どこに居たんだよ心配させやがって。」「だから。それを…。」

「こうやって戦うのも久しぶりだな！宴会の用意はしてねえからこれがその代わりだ！」「だから、人の話を聞いて！」

と再会祝いの代わりで延々と戦うはめになって…。昼くらいに始まって、終わったときにはもう夜だった。それで。

「いやあ、それにしても懐かしいなあ。生きてたんなら知らせるよ！」

「ごめんなさい。でも、それだけ酷かったのよ。つい最近やっと動けるようになったのだから。」

「そうか、ナギの話の聞いてると生きてる事自体奇跡とも言えるか。」

その後、あのあと何があったのか10年の間、完全なる世界を追っていた事。そして…。

「そうナギとガトウが…。」

「生きちゃ居るとは言え、な…。だがあいつはその選択に後悔してねえよ。それは確実だ。向こうの詠春たちにも会いに行くんだろ？その前にガトウの墓にも行ってやってくれ。」

確か原作でも死亡や行方不明ってなってたわね。でも、やっぱり知り合いがそんな事になるとわかっていても辛いわね。

詠春は京都か。アリカさんはナギの故郷のウェールズに向かったみたいだし、麻帆良つてところに居るアルとタカミチ君、アスナちゃんはその後になるかな。クルト君にも会いに行かないとね、それにして元老院議員を目指すなんてすごいわね。

「それにしても闇の帝王とミケーネ帝国か…。」

「ええ、おそらくそれが創造主の真の正体と完全なる世界の裏に蠢いている組織よ。」

闇の帝王の事やミケーネの事もゼウスの事は少しぼやかしたが今もって居る情報は全部話した。ナギがその身を賭して封印したとは言っても、相手は神がかけた封印を破ってくるような相手だ。

いずれ復活してしまうだろう。ならば何年後かを目安に封印を解除してナギを救出し今度こそ完全に倒してしまう。今はまだ戦力が足りなく困難だろうが必ず実現してみせる。

その後夜を明かして語り合いラカンからクルト君に連絡を入れてもらい、私はメガロに向かった。

「ママさん！生きていたんですね！！」

「ええ、心配かけたわね。それにしても大きくなったわねクルト君。」

クルト君も完全なる世界撲滅に動いているみたいだがそれと同時に大戦後に貶められたアリカさんの名誉の回復のために動いているみ

たいだ。

ミケーネ帝国のことについては協力を是非させてくれって言われて議員の中でもまともな人に話して協力者を増やすつもりのようなのだ。ヘラスのテオドラさんにも期を見て連絡を取るつもりのようなのだ。私自身が訪ねたいけれど10年前に死亡したって事になってるしそれに10年たつても容姿が変わってなかったりで…。

そんなわけで生存報告とあわせて話してもらうことにした。そのあとはクルト君の職場での愚痴を聞いていた。汚職がどうの…、本当に世界のことを考えてるか！とか…。

「それに最近報告で魔力の減少が例年よりおおとか…。」  
そのときは大変ねえ。と思っていたが後でまさかあんな事になるなんて。

クルト君は明日も仕事のようだったから夜明かしでって事はなくほどほどのところで分かれた。

イギリスへのゲートは2週間後になるらしくまた向こうの世界の年は1994年みたいだ。

94年かあゝ確かとんでもない事件が日本であったような…。

ガトウさんのお墓にお参りをすませ、ゲートの時間までメガ口の街中を見て回っていたら終戦10年のせいとかそれ関連の書籍とか色々あったので少し買ってみた。

「これが大戦や紅き翼の記録かい？そのわりには君の事があまりないようだけど。」

そう、自分の事はどうなってるかなあ。と思つて買ってみたが…、あんまり書いてなく地味にシヨックを受けていたりする。

元々紅き翼が連合で活躍していたせいかナギの事はよく書かれてあるのだけれど。帝国で活動していかもその時は機械獣のほうが目立っていたせいもあって、私の事は途中で合流した協力者その1つて感じだったりする。

最終決戦の事はちよびつと載つてはいるが居たのは紅き翼の皆だ



けだったせいで詳しくは載ってなく、勇気ある人物がいいところだ。結果資料不足や知名度の影響でちよこつと書かれているくらいだった。写真も戦後の撮られた物が多いから私の写真はなかったし…。帝国では違う事を祈りたい。

別に英雄としてもてはやされたいわけじゃないけど、仲間との差がここまであるときさすがにへこむ。

「君たちは何でそんなことに囚われるのかなあ？結果さえよければそれが誰がやっても同じだろうに。」  
「キュウベエのそんな声を聞きつつその日は不貞寝した。」

ゲートをくぐり久しぶりであり転生後は始めてのこちらの世界に来た。イギリスの地だから全て初めてではあるけど、なんとなく懐かしい気分にはなった。日本だとどうなるのだろうか。私的にはこつて過去の世界になっているわけか。

感慨にふけっているのも程ほどにしてアリカさんがいるらしいナギの故郷に向かったが…。

「そうですか、彼女はもう…。」

「ええ、自分がここに居てはあの子に迷惑がかかるからと…。」  
彼女が身籠っていた事は聞いていたが、まさか行方をくらませているなんて。確かにあの戦いの後のことは聞いているが…。村の人行方を聞いても皆知らないようで、ここで情報がないならおそらく見つけることは困難を極めるだろう。

アリカさんにあつたら日本に行こうと思ってはいたのだけれど、ナギの子供のネギ君の事を聞いて暫く滞在することを決めた。子供一人という事ということが心配だしね。

「ネギの事ありがとございます。本当なら私が側に居たらいいのですが…。」

「気にしなくていいわよ。それにあなたも子供なんだから大人の私たちに任せて置けばいいのよ。魔法学校の勉強だってあるんだから。」

「はい、でもママさんが言うのと説得力は余りないですね。」  
「ふふ、褒め言葉としておくわ。」

この身体って歳を取らないっぼいのよね。嬉しい事なのだろう…たぶん。まあ、それプラスに日本人って事でさらに幼く見えるみたいなのだが…。

あ、ちなみのこの子はネカネ・スプリングフィールドネギの従姉妹に当たるらしい。

「もう少ししたらネギも魔法学校に入学できる歳ですので、そうなれば向こうで暮らす事もできます。」

「そうね。そうなれば私が居なくても大丈夫かな？」

「やっぱり日本に？」

「ええ、昔の仲間も居るみたいだからね。」

「寂しくなりますね…。」

「そうね、でも二度と会えなくなるわけじゃないんだから。大昔と違って電話もあるし飛行機だってある。寂しくなったらまた会えばいいのよ。」

私はそれにプラスして裏技もあるしね。

「ネギは今、アーニヤちゃん？」

「ええ、アーニヤちゃんも久しぶりにあえて嬉しいみたいですし。」  
トントン

「噂をすれば帰ってきたかな？」

「そうですね、もう夕飯の時間ですし。」

そんな感じで私がネギ君の面倒を普段は見て1ヶ月に何回か帰ってくるネカネちゃんと世間話をしたり、ネギ君にナギ達の事を話せる範囲で話したりする日々を過ごしていたある日。

「ねえ、お父さんと会えないってどーゆーこと？」

どうも誰かからナギが死んだ事を聞いてしまったらしい。

「お父さんとーくにお引越ししちゃったの？」

む、ここはネカネちゃんに任そうデリケートな問題は苦手だし…。そこ！へタレとか言わない。

「そうね、遠い遠い国に引越しちゃったの。それがく死んだっていうのはそういうことよ。」

ちなみにキユウベえはさつさと退場してもらった。彼が居たらドストリートに言っちゃうだろうからなあ…。

でも、ナギの事が…、ネギ君のためにも絶対に何とかしなくちゃね。

「お父さんは来てくれるもん！」

「あんた馬鹿ね！死ぬって言うのは…！」

ありや、ちよつと考え事していたらなにやらアーニヤちゃんと喧嘩しちやつてる。

「はいこれ。あなたにあげるわネギ。」

「これは？」

「初頭魔法の練習用の杖よ。あんたも来年から魔法学校に来るんでしよう？」

あら、もう仲直りしちやつてる。アーニヤちゃんも素直じゃないなあ。

帰る前に何か暖かいものを飲もうと思って村のパブに寄ってみると。

「スタンさん、こんにちは。」

「おお、マミ達か。」

この人はスタンさんっていて昔ナギにいろいろ苦労させられたみたい。

「全くあいつがいなくなっってせいぜいしたわい。あいつには毎日苦労かけられたからな！」

「飲みすぎですよスタンさん。」

もう、ネギ君だっているのに。

「お父さんは悪い人だったの？」

「ああ、悪ガキじゃったわい。あいつの後始末を何度させられたか。村が巻き込まれた事だっ…。」

まあ、間違っても品行方正じゃなかったわねえ。

カランカラン

「あ、ネギ！すいませんマミさん、私。」

「ええ、追いかけてあげて。私はもう少ししたら戻るわ。」

「じーさん、もっと言い方ってもんがあるだろ？」

「ふん事実じゃわい。」

「それにしたって相手は子供なんですから。いくら寂しいからって……。」

「誰があいつのことを寂しがってるんじゃない！あんな子供と奥さんをほったらかして死んじまった奴なんて……。」

ふう、この人も意地っ張りね。

でも、私のときも皆こんな感じだったんだろうか？私も人の事言えないわね。

その翌日、ネカネちゃんとアーニヤちゃんが魔法学校に帰っていった。またしばらくは私とネギ君の2人だけの生活だ。

（私が魔法を見てあげられたら良いんだけど、この身体魔法どころか気すら使えないみたいだからなあ。）

何回か試したり大戦中に皆と模擬戦や修行をしたときにもぜんぜん使えなかったのだ。

（当たり前だよ。君の身体はゼウスの身体を元につくったもた。この世界の法則で創られているわけじゃないから使えなくて当たり前だよ。）

キユウベいから回答がいきなり来た。なるほど、私の身体はいつてみれば神のイミテーションだから人間用の技術は使えないって分からね。

それはいいとして、しょうがないとは言えアリカさんのことをネギ君が全く知らないってのは……。アリカさんの現在の評判を考えればしょうがないんだろうけど。いつか教えてあげたいな。

そんなこんなで毎日が過ぎていったあるとき。

「ネギ君がいたずらを？」

「ああ、木から飛び降りたり、犬の鎖を切ったりしてな。まったく似なくていいところが似てしまつて。」

「いやいや、あれくらい年頃の男ならそんなものでしょう。元気があつていいじゃないですか。」

「私のほうからもそれとなく言つてみます。」

「ああすまん。」

ネギ君がいたずらをねえ。そんな性格じゃないと思つただのだけどこういうのもののかな？ 転生前は男だつたとはいえ記憶も感覚ももうほとんどないからなあ。

とりあえず、注意して様子を見ましょ。

ん？ 前から物凄く慌てた人が…つてネギ君！

その人の背にずぶぬれで酷く弱つたネギ君が背負われていた。

どうやら少し遅かつたみたいだ。

その後、ネカネちゃんも飛んできたりと大騒ぎになつり今は状態も落ち着いてネカネちゃんが側に居る。

「はあ、面倒を見るつて言つておいてこんなことになるなんて。」

もう少しネギ君の事をしつかり見ておかなきゃいけなかつたわね。

「いや、お前さんは頑張つているよ。」

「スタンさん。」

「お前さんが悪いのなら、この村全員が悪いつてことじゃ。本来なら村人全員で見守り叱つてやらねばいけないじゃ。それをあの馬鹿や彼女が親なことを理由に今まで大丈夫だろうと甘えていたんじゃないわ。」

しばらくして、ネギ君が寝たようでもネカネちゃんが出てきて話している。

「ピンチになつたら現れるね…。」

「ええ、それであんな事を。」

「ネギ君にとつてナギはまさにヒーローですものね。わかつたは大丈夫だと思ふけれど、これからは目を離さないで置くわ。」

「すみません、いつもいつも。」

「いいえ、今回の事は私が悪いわ。ネギ君が色々いたずらをしていたみたいだからね。もっと早く聞いておけば防げたかもしれないのだから。」

「ありがとうございます。」

それからはネギ君がどこかに行くたびにについていくようにして行けない時はキュウベいに頼んで様子を見てもらっている。

日々がたちネカネちゃんもまた帰ってくる日が来て、今日は近くの湖に釣りに来ている。

「ネギ君、そろそろネカネちゃんも来る頃だし帰ろうか？」

「あ、そうだね！じゃあ、はやく帰ろうママお姉ちゃん。」

「ええ、>ピピ<あら何かしら？ごめんねネギ君、先に帰っていて私もすぐに行くから。キュウベえ彼のことよろしく。」

「わかったよ、ママ。」

「うん、ママお姉ちゃんも早く来てね。」

彼らを見送ったああと通信相手を見てみるとクルト君だった

「クルト君から来るなんて珍しいわね？」

そう思っ繋いでみると。

<よかった！つながった！>

「どうしたのそんなに慌てて。」

<それがついさつき元老議員の1人がネギ君を殺すために悪魔の大群を召喚して送り出したそうなんです！>

「何ですって！」

<今どこに居ます！？急いで彼の保護を！>

「それなら大丈夫、今ちょうどそのネギ君の居る村に居るわ。」

<おお！なら早く！聞き出したのはさつきですが送り出したのはだ  
いぶ前のようです！>

「わかったはそつちもよろしく！」

<ええ、必ず裁いて見せます！>

く、こんな事なら先に行かせるんじゃないなかつた！最近、やることが

後手に回ってばかりね。

「来てスクランダー！」

その掛け声を受けてどこからともなく紅の翼を持った物体が飛来してきた。

「スクランダークロース！お願い、間に合って！」

合体し全速力で一路村に向かった。

「く、酷い。」

着いたときには村は火の海で包まれていてすでに何人も人が石になっっていた。

< キュウベえ！ネギ君は！ >

< 彼の事は任せて君は敵を。でも、急いだほうがいい今にも走り出しそうだ。 >

< わかったわ。あなたはそのままネギ君をお願い。村人もそつちに非難させるわ。 >

キュウベえとの通信を切り村を見据え。

「一気にいくわよ！」

久しぶりにアーティファクトを呼び出しガミアちゃん達人間大の機械獣を召喚し、私は無数の銃を滞空させて悪魔の群れにへと突っ込んだ。

「皆！丘の上に避難して！悪魔は私が何とかするわ！！」

「すまん、腕に自信はあったのだがこいつら上級悪魔のようだ！君も気をつけてな。」

「ええ、丘の上のでっかい物は味方ですから安心して盾にしてください。」

通常サイズの機械獣もついでに呼び出して丘の上に待機させて悪魔を追い払ってもらっている。

「それにしても、数が多いわね！」

パンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパン  
次々に銃を召喚しては撃ち続けて減らして入るが減ってる気がしな  
い。

「マミ君！」

「スタンさん、ネカネちゃん！よかった、無事だったのね。」

「ワシらはな。じゃが何人かやられておる。ネギは？」

「丘の上に避難させています。あなた達も早く。」

「すまん！ネカネいくぞ！」

「はい！マミさんどうかご無事で！」

後どれくらい人が残ってるの！

その後しばらく悪魔を蹴散らしていると

<マミ様、生体反応がある村人の救出完了しました。現在丘にて待  
機中です。>

「わかったわ。ネギ君の事を見ていて飛び出していきそうで心配だ  
から。」

<了解しました。>

あとは悪魔を駆逐するだけね！

「って…、まだでてくるの？」

気合を入れたとたんまた地面から悪魔がわいてきた。これはさすが  
にしんどいわね。

「どうした、しばらく見ない間になまっちまったか？」

ん？この声は！

「……………！！……………！雷の暴風！」

ちよ！

「これで大半は片付いたか？」

「ちよっと、石化した人とかいるのよ！もう少し考えて…。」

「あ……、大丈夫だ！寸止めにしてある！」

この馬鹿っぱさ間違はなくナギね。今のどこが寸止めなのよ？

「まあ、再会は後回しで今は殲滅を優先させましょう。」

「だな！」



程なくして悪魔の殲滅も完了した。丘のほうにも何体か向かったらしいが問題なく撃破されたみたいだ。

今は丘に向かっている途中で。

「まさかお前が生きていたとわな！なんですぐに姿現さなかったんだよ。」

「こつちも出られる状態じゃなかったのよ。それで相打ちであれを封印したんですって？」

「ああ、今は麻帆良つてところにある。」

「はあ、人の事言えないけど自分の子供を心配させるなんて。」

「そういえば居るんだな。あそこに。」

「ええ、無事よ。しっかりと話してあげなさい。どうせ当分出られないのでしようっ？」

「当分てより最後かな…。」

「当分よ。必ず助け出して決着をつけるわ。」

「へへっ、それは頼もしいな。」

そんなことを話しながら丘に到着すると皆、幽霊を見たみたいにつくりしていた。

が、時間もあまりなくナギはネギ君と少し話して彼の杖を預けて消えていった。

犠牲はあつたが多くの人が無事な人も多かったからよしとするしかないかな。そのあとはネカネちゃんとなぎ君を魔法学校のある町いかせて残った人で復興作業と石化した人達を魔法学校に運ぶことになった。

私は今、魔法学校の校長先生の部屋に居て今回の件の原因とまたもしかしたら裏に居るかもしれないミケーネ帝国のことについて話し合っていた。

「なるほどのう。ネギ君を邪魔に思った元老院議員の差し金か、そしてミケーネ帝国か…。」

「ミケーネが裏に居るかはわかりませんが今後、どこかで暗躍を始

めるのは確かかと。」

「おのが主が封じられているならそうじゃろうな。それで君はそのことを話してどうして欲しいんじゃない？」

「ミケーネの事は心に止めておいてくれれば今はそれでいいです。けれどネギ君のことは…。」

「そうじゃな、今回だけが特別。などと甘い事は言えんじやろうかな。」

ナギの事、アリカさんのこと狙われる可能性は今後も十分にある。

「彼をこのままこちらに置いておく事は危険か…。ふむ、そうじやな彼を近衛門のところに預けてみるか。」

「近衛門？」

「ああ、ワシの知り合いでの。日本にある魔法使いの拠点の長をしているんじゃない。そこに卒業試験もかねて送ろうかとな。」

「大丈夫なのですか？」

「大丈夫じゃ、日本、というよりアジア地域はワシら魔法使いにとつてアウエーじゃからの。メガロがちょっかいをかけてくる確立も減るじやろう。とは言ってもこれから話し合ってみんことにはなんとも言えんがな。」

「それならば、私もその麻帆良でネギ君を見守りましょう。元々日本には行く予定でしたので。」

「そうか君がいてくれると心強い。ネギ君がこっちに居る間は我々に任せてくれ。」

「ええ、任せてください。ネギ君のことよろしくお願いします。」

その後2、3話し合いネギ君たちにもわかれることを伝えて私は日本へと。懐かしの故郷へと旅立った。

## 再開の旅と騒動と（後書き）

やっと、原作介入らしい原作介入をしましたw  
本作では悪魔襲撃時でも多くの人があつてます。

ミケーネ帝国と闇の帝王の事は話して回っていますが闇の帝王の事はともかく、ミケーネについてはこんなのが居るらしいってくらいなので具体的な行動とかは起こしません。

次で日本の詠春とタカミチなどと再会です。このまま次の話で一気にマミが入学するまで行くかも？話を切ったりするのが下手なので長くなったり短くなったりします…。

新しい次回予告が決まらないなあ…。他の作品のように作品内のキヤラと対話形式の漫才や小ネタでも入れてみるか…。

感想など受付中！作者のやる気がアップしますw

おいでませ麻帆良！

「着いたわね。帰ってきた…。なんだかとても懐かしいわね。」  
私は今日本に居る。転生してから初めて生まれ故郷である日本の地に降り立ったのだ。

転生してからもう15、6年。意識があつた時間でも5、6年短いようで長いような時間が過ぎた。そもそもこっちの世界に返ってきたのもつい最近だが、やっぱり日本に居る事で帰ってきたと実感できる。

とは言っても前世とこの世界が同一ではなく、まして私の感覚では今は過去の世界になるわけだ。生まれ故郷の街にも行ってみたいし、東京見物もしたいが今は麻帆良のタカミチ君と近衛門さんに会いに行くことが先決だ。

詠春の所にも行きたいが、彼は今じゃ組織の重鎮みたいだからアポ無しで行くわけにもいかない。今から会いに行く近衛門さんが詠春の義理の祖父になるって校長も言っていたからその時に連絡を入れようかな。

降り立った羽田から電車を乗り継ぎ埼玉県にある麻帆良学園にきたのだが、どうでもいいことに懐かしんでもいる。

電車の混み具合や正確さ等々、どうでもいいことで日本に帰ってきたなあと改めて実感している。

「なんで、あんな不快感しか感じない状況でそんなに感動できるんだか。君たちの感覚は本当にわからないね。」

人が感動に浸ってるのにこの子は…。確かに混雑していたりしたけど、懐かしいんだからいいでしょ。

で、現在タカミチ君との待ち合わせ場所の麻帆良学園中等部駅前にいるのだけれど、見当たらないわね？まだ来てないのかな。

と思っていると。

「マミさん！お久しぶりです！！」

あ、着たみたいね。

「久しぶりタカミチ君。ふふ、大きくなったわね。」

「本当に…本当に生きていたんですね！クルトから聞いたときは何を言ってると思ったのですが…！」

あらあら、本当に心配させちゃったわね。

「ごめんなさいね。あの時はああするしかないって思ったから。それより詳しい話は後で、ここで生きていたやら見た目年下の子に“さん”付けはおかしいですよ。」

「そうですね。学園長室まで案内します。」

「ええ、お願いするわ。」

道すがらチヨコチヨコと話しつつ向かっていった。

「あとで、アルさんにも顔を見せてあげてください。彼も喜ぶでしょう。」

「彼もいるの？」

「ええ、少し込み入った事情がありますが…。」

「そのことは近衛門さんも交えてやったほうがいいわね。でも、あのタカミチ君が先生かあ通うことになったらタカミチ先生って呼んだほうがいいかしら。」

「え！そんな今までどおり君か呼び捨てで結構ですよ。」

「そういうわけにもいかないでしょ？アスナちゃんは今幸せに暮らしているのね…。」

「はい、けれどネギ君の事を聞いたら果たしてそれでいいのか…。」  
「時間は多くはないけれど少なくともないわ。そうね、彼女が高校生になるまでに決めればいいと思うわ。もちろん彼女の意思も大切だけれどね。」

「そうですね。今は友達と楽しく遊ぶのが一番でしょう。」  
ネギ君もそうだけど、彼女の事も何とかしたほうがいいわね。

そうこうしている内に現在、学園長室前。

「でもなんで、学園長室が女子中等部内に？」

「僕も最初は不思議に思ったんですけど、どうも世界樹のほかには魔法的や霊的重心地がこの中等部近辺みたいなので学園長室、と言うよりは魔法協会の会長室を設けてあるそうです。学園の運営を行う部署などは他のもつとしっかりした所にありますよ。」

「なるほど、そんな理由がね。」

「では、入りますね。学園長！バマミさんをお連れしました！」  
中から了承の声がして入るとそこには…。

妖怪がいた。

「身体の左右で性別が違ったり、首が分離飛行できたりする人もいるけど後頭部が長いなんてまた奇抜だね。いや、大男の上に小男よりはましなのかな？」

「ちょ！キュウベえそのとおりだけど本人に向かって！あと、最初の二つ全部私関係じゃない、とくに後ろ！」

「すいません、近衛学園長！この子色々ストレートな物言いで！！」

「いえ、マミさん今の発言も結構…。」

「い、いや、気にしてないぞ。大丈夫じゃ…そのくらい…そのくらいで…。ワシってそんなトンデモナイ人物と一緒になのか…、首はともかく左右で性別が違うものと…。。。」

「思いつきりへこんでるわね…。ここは何事もなかったかのようにするのが一番！……のはず。」

「申し送れました、私はバマミと申します。タカミチさんから聞いていますですが紅き翼に所属していました。それとこの子はキュウベえ君で私のサポーターです。」

「よろしく願いますよ。」

「うむ、ワシはこの麻帆良学園に本拠地を構えている関東魔法協会会長の近衛近衛門じゃ。君の事はタカミチ君とウェールズの彼から聞いて居る。今回は先の襲撃の件と他にもいくつか話したいことがあるそうじゃな？」

よし、近衛門さんも何とか立ち直ってくれた。

「はい。そのことなのですが先ほどタカミチさんからアルビレオさんの事を聞きましたので詳しくは彼を交えて後ほど話したいと思います。」

闇の帝王とミケーネについては彼も交えたほうがいいでしょうからね。

「それほど重要だと？」

「はい、ここにある。彼の者も関係しています。」

「！それについてはどこから？」

「ラカンさんから聞きました。」

「なるほど、彼なら話しそうですね。」

「あいわかった、彼に連絡を取って近日中に話し合いの場を設けよう。後は…ネギ君のことじゃな。」

「はい、校長先生は卒業後の修行先をこちらに指定したいと。こちらならメガロの干渉を最小限にできるだろうからと。」

「確かに魔法学校にいる間はともかくそのあと欧州はまずいか…。了解した、そちらも受け入れ態勢を整えておこう。こちらに来るのは履修終了が7年じゃから2005年かの？」

「そうですね。ナギのように中退したり、1999年にあの予言が当たらなければそうなりますね。」

「ふおおおお！確かにそうじゃの。あの予言が本当ならワシらは大忙しじゃ。」

まだ20世紀だからあの予言前なのよねえ。懐かしいわねえ。

「それで、お主はどうするか？よければここで警備員として働いて欲しいが。なにぶん人手不足で、専用の人員を用意する予算も乏しく兼任の魔法先生や生徒で何とかやっている状態での。」

「そうですね。詠春さんの所にも行って来たいのでその後でしらかまいません。ネギ君が来たときには彼の側でサポートしようとも思っていますので。」

「そうか！君がいてくれれば百人力じゃの。正式に採用するときには顔合わせと腕試しの場を設けたいのじゃがいいかの？」

「はい、よろしく願います。あ、できれば私が紅き翼に所属していた事は内密に。」

「ひょ？何故じゃ？知らせたほうが皆も喜ぶじゃろうに。」

「あまり注目を集めたくないと言うのもありますが、紅き翼が2人もいるとわかれば何がしかの恨みを持つものがこないとは限りません。ここは戦場じゃ無いのですからそこまでして士気を上げる必要は無いかと。」

「確かにそれもそうじゃな。あいわかった、君の事はウェールズの魔法学校からの研修生としておこう。それと婿殿への紹介状も一筆書いておこう。明日取りに来なされ。」

「重ね重ねありがとうございます。」

「うむ、それでは詳しいことはまた後日じゃな。」

「はい、それではありがとうございます。」

その後はタカミチ君とアスナちゃんが住んでいる家にお邪魔してご馳走になってそのまま泊まり。次の日に近衛門さんから詠春への紹介状を貰い京都に出発した。



おいでませ麻帆良！（後書き）

主人公、日本と麻帆良の地を踏む！でした。

学園長に關してのお約束と麻帆良についての独自設定です。

次回は詠春やアルたちと話したあとで腕試しになるから長めになるかな？

呪術協会と内情と（前書き）

PV2万&ユニーク3千突破！  
これを励みに頑張っていけます！

## 呪術協会と内情と

そつだ、京都に行こう！

つて、訳でもないけれど今私は京都の呪術協会に向かっている。

京都はさすがに前世に行った時とそんなに変わってないわね。いえ、魔法なんてモノがあるから実際は一番変わっているかもしれないわね。

つと、のんびり観光するのは詠春にあつてからね。予定の時間までそんなに間がないし急がないと。待ち合わせ場所の協会の入り口はこつちね。

「ここが入り口のカガビコノヤシロね。立派な鳥居ね、それに伏見神社の千本鳥居みたいなものもあるわね。」

一般公開しているみたいだけれど大丈夫なのかしら？学園長の話だと呪術協会詰め陰陽師の自宅でもあるみたいだし。

とりあえず入ってみますか。待ち合わせ場所はこの中の休憩所みたいね。

しばらく歩くと自動販売機と休憩所らしきものが見えてきた。周りを囲む鳥居はその先も途切れる気配が無いからこんな場所も必要なのね。全体でどれくらいあるんだろう？

そう思つて近づくとすでに相手はきていたようだ、待たせてしまつたかしら。

「お待たせしました、近衛詠春殿の古い知り合いでバママと申します。この度は日本に越して来たのでご挨拶に来ました。こちらが近衛近衛門さんの紹介状になります。」

「いえ、まだ約束の時間ではなのでこちらが早く来すぎたのでしよう。私は案内を仰せつかつた橘楓と申します。」

綺麗な人だなあ、それにやつぱり巫女さんはいいわね。つとと、どうでもいい事考えていたら相手が続きを話し始めた。

「この度は遠路はるばるご苦労様です。本山に案内しますので私の後についてきてください。ここより鳥居の全て抜けるまで振り返らぬようお願いします。」

なるほど何か秘密の通行方があってそれで本山と社を分けているのかしら。

そのあと2、3話しつつ無事鳥居を抜けこれまた立派な門をくぐり呪術協会総本山に着いた。

「大きいわね。それにこんな季節でも桜が？」

「本山は数々の呪具や書物の保管場所、他にも集会場所や陰陽師の自宅の他にも社としての機能が移築されているのでここまで巨大になったそうです。桜は魔よけもかねています。」

麻帆良ではある程度は分散していた魔法関係の施設が全部一箇所に集めてあるからか、それだとこのくらいになるのかな。

詠春と話す場所まで案内される間の話だとここに有る物はほんの一部で多くは各地の寺院や国の管理施設にあるそうだ。その中でも使用頻度が高かったり扱える事ができるのが陰陽師だけだったりする物はここにおいてあるそうだ。

話を聞いているとGS 神であった東京の地下に有る呪術要塞？見たいなモノがこの世界はありそうね。怖くて聞けないけれど。後はバチカンにも興味本位でいつてみたいかも。……立川にもいつてみようかしら。

そのあとまああの二人がとある世界に光臨したらどうなるんだろう？など心底どうでもいいことを考えていると、襖が開き懐かしいかを見られた。

「やあ、待たせてしまったかな？だが、本当に生きていたのだな。」

「いえ、大丈夫よ。ええ、このとおり足はあるわよ。」

そのまま再会を祝して！つていきたいけれど、詠春もそんなに時間が無いみただから闇の帝王とミケーネ帝国のことを話し警戒と協力作り協力してもらおう事になった。

その後は自分が居ない間に何があつたかなど話していて、

「そう、奥さんが。」

「ええ、元々体が丈夫ではなかったところにこのかを生んだ影響でしばらくして…。だが、あいつは最後まで幸せだった。だからこそ私はこのかを守っていこうと誓ったのだ。」

「そう、しっかりとお父さんとしてこのかちゃんを守らないとね。」

「…それで何か心配事が？」

「顔に出ていたか？やはり私は長なんて器じゃないな。…ここに来るまでにうちの者が何か失礼をしなかったか？」

「そんなこと無いと思うけれど、少なくともあの二人よりは…。ん、そんな感じはしなかったけれど。」

「そんな感じはしなかったわよ。」

「それならいいのだが。実はこれはこのかの事も関係していてな。」  
詠春の話によると先の大戦の影響がこっちの世界にも飛び火して日本も少なくともあるがダメージを負った事、元々魔法使いとの仲は良い訳ではないけれどこの一件でさらに微妙な事になってしまっている事と。

日本全体が余りよくない運気に包まれているみたいで過激派の人中には麻帆良に侵攻し世界樹を奪取しそれによって陰気を抜おうつて言う意見が出てきていたり協会内がごたごたしているよう。

前ならそんな意見は全く相手にされなかったが今は全大戦の事で魔法使いと言ってもいい人達と日本全体を包む閉塞感をどうにかしようと思っている人達がそれなりにいる事。

他にも協会内で多数の派閥が形成されていてそれぞれがどうしたらいいか分からずバラバラで動いているせいで上層部もうまく統制が取れていないらしい。

詠春は大戦を通して持つ事になった魔法使いたちに対する太いパイプをかわれて現在の地位に居るが気苦労が絶えないらしい。

その中で生まれたこのかちゃんも強大な魔力を保有していて、この事がさらにごたごたを助長させたりと…。詠春もこのかちゃんの保有魔力を考えると魔法使いか陰陽師になったほうがいいと思ってい

はいるのだけれど。

「今の協会の事を見ていると心配だと？」

「ええ、流石に権力闘争から来る暗闘は起こっていないがこのかの才能を考えるとおそらく長となる事は確実だろう。そうなると今の私と同じかそれ以上の苦労を強いる事になるのは確実だ。私はそれが心配で。」

なるほどね。でも、今更ながら部外者にここまで内情を喋っちゃっていいのかしら？それだけ心配なのと苦労してるのかしら…。

「あなたの心配は分かるけれど。結局は決めるのは本人だと私は思うわ。今すぐ出す答えでもないのだからしっぴかり考えたら？」

「そうだな、焦っていたのかもしいないな。このかが長になる前に私達が問題を解決してしまえばいいのだな。」

「親なんだから当たり前だと思っわよ。彼の事についても私達がやり残した事ですものね。次の世代に残さず私たちで片をつけないとね！」

「ああ、そうだな。そういえばお前は麻帆良に住むそうだな？」

「ええ、そうするつもりよ。近衛門さんから？」

「ああ、義父さんから聞いている。お願いがあるのだが。」

「なに改まって？」

「来年にでもこのかを麻帆良に転校させるつもりだ。このかを守ってはくれないだろうか。」

「いいけれど大丈夫なの？」

「皆には見聞を広めるためとでも言おう。これから協会内はより荒れるだろうからな、少しでも安全なところにと。」

「私はかまわないわよ。でも、護衛は別に雇ったほうがいいと思うわ。専門じゃないしね。それに信用できる人くらいにはしっかりと話した方がいいわよ？」

「ありがとう。そっちは心当たりがある。話すものはこれから見極めるつもりだ。」

「心配無用だったみたいね、分かったわそれとなく見ておくわ。」

そのあと昔話に花を咲かせていたが詠春の予定が押ししてきたので私達は分かれて、私は本山を降りて京都観光に繰り出した。

## 呪術協会と内情と（後書き）

きりが良かったので詠春と呪術協会の話して終了しました。  
呪術協会の内情については完全に捏造で言ってますw無理があるかな？

今回はちゃんとバトル入れます！

小ネタコーナー

作者（以下作）「うん。」

主人公（以下主）「どうしたの？」

作「次の腕試しで誰を生贄にしようかと。」

主「生贄って…」

作「タカミチが相手としてちょうどいいんだけど出自誤魔化してあるからね。」

主「無名の人が原作最強クラスと互角つてのは変ですものね。」

作「よし！瀬流彦先生、君に決めた！やられ役お願いします！」

主「ちよつと、それは色々と…。」

作「大丈夫しつかり手はある。」

主「瀬流彦先生、できる限り手加減します…。」

次回「顔見せと腕試しと模擬戦と」

瀬流彦先生は生き残れるのか！ってかあの人この時期（97年）って教職なのか？

彼女も出ますよ！

どうでしょう？これを次回からの次回予告にしていこうかなど。



もう一つ愚痴……京都弁が分からない！！

## 顔見せと腕試しと模擬戦と

京都観光のあと麻帆良に帰ってきた週の週末に顔見せと腕をここの人たちに披露する場が設けられることになった。

「もう一度確認しますがマミさんは魔法世界出身でこちらでの職を探しているときに知り合いのウェールズ魔法学校の人に麻帆良学園での警備員の事を聞いてきたという事になっています。また、僕とも向こうで知り合っていてその伝もあつたということになっています。」

「そっちは問題ないわ。それで腕試しって何をするの？」

「純粹に力量がどれくらいあるかも示すためですが、捕縛もできるかも見せる事になります。面倒かもしれませんが人員が少ないからこそ互いを知って信頼関係を構築する必要があるのです。このような方法を取っています。」

「いいえ、実際もともとここで働いていて人達からすれば私は見ず知らずの、それこそこちらの世界を知らなかったかもしれない人になるのだから。だったら最初にしっかりと共に戦える仲間だつてことを示さないかね。」

「はい…。それと、アルビレオさんとの話し合いの場なのですが向こうは了承してくれたのですが学園長の予定があわずにしばらくは無理そうです。」

「そう、まあ1、2週間でどうにかなる事じゃないからね。しっかりと話し合える事が年内にでも出来ればいいわ。それと、年の事はどうするの？」

何故だか不老みたいなのよねこの身体。

「向こうの世界の長命種の血がわずかに入っているという事になっています。」

なるほど、魔法がある世界ならではの理由ね。

そんなこんなで顔見せ当日。私は集合場所の世界樹前広場に向かっている。

「こういうことは初めが肝心ですからね。しつかりやらなくちゃ。」  
「こんな事はトップか人事担当が知らせれば終わるのに何でこんな非効率なんだろうね。」

人がやる気を出そうとしてるのに……。それに挨拶は普通の会社でもするでしょう。いや、彼の事だからシステムチックに通知だけでいいってことか……。それはいくらなんでもこれから一緒に仕事をやっていく仲間としてどうなの。

そのあと今更だけれどキュウベえが他の人には見えるのかとかを話していると、ちなみにキュウベえが見える見えないを選べるみたい。広場が見えてきた。もう結構な人がいるみたいだから急がなくなっちゃ。

「すみません、遅れましたか？」

「いやいや、まだ時間には間がある。ワシらがちと早く来すぎたようじゃ。」

ほ、よかった。初日から遅刻は流石にまずいからね。周りを見回しても知らない人ばかりね、といつても原作の魔法教師なんて3、4人くらいしか出てないし知らなくもあるけれど……。

原作開始が確かネギ君が麻帆良に来たときだから7年後かな？そうなるって生徒で原作キャラはいないわね。原作時点で大学生でもないところにはいないでしょうし。

と思っていると1人心当たりがある人物がいた。綺麗な金髪をした人形みたいなかわいい女の子、おそらくエヴァンジェリンだろう。彼女は吸血鬼だから年なんて関係ないしあの馬鹿が原因で確かここを出られないはずだったし……。彼女たしか修行に便利な道具を持つていたはず、仲良くなれないかしら。後でタカミチ君に紹介してもらおう。

つと、いけないいけないこれから彼のことは先生って呼ばないとね。今の私は向こうの世界出身の立派な魔法使いを目指していてこっちに来たって事になってるのだから。

「タカミチさんもこの度はとりなしてくれてありがとうございました。」

「いえいえ、未来ある若者に道を示してあげる事が僕たちのやるべき事でもありますから。マミ君もここで働いてみて自分が目指す立派な魔法使い像を持ってください。<やっぱりマミさんをこう呼ぶのは慣れませんか。>」

<あなたは女子生徒にも君付けでフランクに話してるんでしょ？それが私だけさん付けで丁寧だったりしたら変でしょ。>

<そうなのですが、マミさん達は今でも僕の憧れであり目指すべき目標なので先生って呼ばれるのも変な感じですよ。>

そう思ってくれているのは嬉しいけれどここはしっかりやらないとね。

そんな事を念話で話していると人も集まってきて約束の時間になった。

「さて、これで集まれるものは全員集まったの。それでは本日より警備員として働いてくれる事になった者を紹介しよう。こっちへ来てくれ。」

呼ばれて学園長がいるところに向かい他の人達を見回した。

「紹介しよう、巴マミ君じゃまだ若いが腕は確かじゃ。マミ君、皆に挨拶を」

「巴マミです。こちらの世界に来たのはつい先日ですがこちらの常識などは把握しています。まだまだ若輩ですがよろしくお願ひします。」

挨拶を終え周りの人達を見てみるとやはりというか不安そうな顔がそれなりにあつた。その感情は至極当然だ。普通の会社に見てみたらちよっと前まで外国にいた人が突然自分たちの職場にきたと同じ

なのだから習慣や常識とかが違ったりして一緒にやっていけるか不安になるだろう。

少しガヤガヤと話し合っていると

「皆もそしてマミ君もお互い相手のことを知らんからの不安になるのは当然じゃ。じゃが、そこはこれから互いに接して知っていつてもらわんといかん。マミ君のプロフィールなどは最近導入し始めた学園内の情報をまとめたライブラリーにすでに掲載してある。マミ君もそこに魔法先生などのことは載っておるからそれを見ておいてくれ。」

そういえば、まだこの年だとそこまで電子化は進んでないのかな？前世で記憶があるころは情報化社会だったからなあ。

「また警備の腕は今見せてもらおう。そうすれば皆の不安はとりあえずなくなるう？」

学園長の言葉に不安そうにしていた人もそれならばとうなずいてる。

「相手はそうじゃのお。瀬流彦君がいいかの。」

「ええ！僕ですか!？」

選ばれた人も驚いてるわね。確かに見た目も秀囲気も荒事向けじゃなさそうですものね。

「そんな、無理ですよ！マミさんの腕がどれくらいなのか知りませんが僕じゃあ……。」

「なに本気でやり合うわけではない。手加減なども捕縛技術のうちなのじゃから。それに君の防御系の腕はなかなかと見ておるよ。ちよど良いだろう、君だって警備員として働くならそんな事を言うてる暇はなくなるぞ。」

「ううう……、確かにそうですね。分かりました、マミさんよろしくお願いします。それとお手柔らかにね。」

「ええ、こちらこそよろしくお願いします。」

「それでは両者は下の通りに、またあくまでもマミ君の腕を皆に示すためじゃからな、勝敗に関わらず数分で終了とする。くれぐれもやりすぎんようにの。」

瀬流彦さんと下に降り向かい合い後は合図を待つだけだ。

「それでは両者……、始め！」  
開始と同時に私はうってでた。

時はちょっと戻ってマミが到着した時間。

(sideエヴァ)

ほう、あれがタカミチが言っていた巴マミか。ふむ、見た目はガキだがあいつの話だと10年前もあの姿のようだからな。爺は長命種の血が入ってるというがどうだかな。実際は私と同じ化け物といったところか？<否定できないわね byマミ>

しかし、そうなると奴は紅き翼のメンバーつまりあいつと同クラスの腕を持っているはずだ、それが何故こちらの世界しかもこんな極東に？

爺が呼び寄せたのか？しかし何故…、世界樹や図書館島の防衛にしても過剰戦力過ぎる。牛刀で鶏を捌くどころかスリに騎士団を全て投入するようなものだ。

…駄目だな、情報が足りなさ過ぎる。爺に聞いてみるか？それかタカミチを介して接触してみるか。ただ待っているのは性に合わんしな。何よりそれでは求めるものなど得られんからな。

今は奴の腕を見えるか、あいつが相手ではるくに分らんだろうが何もわかってない今よりはましだろう。

時は戻って対戦開始！

(side瀬流彦)

うう、了承はしたけれど不安だなあ。向こうの人って結構荒っぽか

つたりするからなあ。でも、学園長の言葉ももつともだ！いくらここが平和な日本とは言っても警備員なんて仕事をするんだから少しは荒事に慣れておかなきゃね。とりあえず時間まで耐えることを考えよう。

何をやってくるのかな、でもとりあえずは障壁を張って…。

パパン！

何か撃ってきた！それたのかな？当たってないね。障壁も無事に張れたこれならそうそう破れないぞ。あ、早速来たようだね。とにかく時間待て耐え切って！

パリン……

「え？」

え？そんな！障壁がこうも簡単に！って、そんな事考えてる場合じや。次の行動に移さないと！

わあ！何だこのリボン？は身体に絡み付いて。

「わ！わわ！」

慌てて拘束から逃れようとしていると目の前に手のひらが…。

「わぷ！」

ご！

「うご！」

何か後頭部に硬いものが当たった感覚と顔が温かいものに触れている感触を感じつつ僕の意識は闇に落ちた。

分りにくいので視点を変更して！

(sideエヴァ)

さて、始まったかあっちのボウズは障壁か？消極的だな。あいつは…。

パパン！

な、銃だと？いったいいつの間に…。さっきまで持っていなかったはず。奴のアーティファクトか？狙いはそれたようだ元より当て

る気は無かったみたいだな。

発砲を囮にして接近したがどうする気だ？すでに相手は障壁を張っているそのまま行ったところで…。

パリン……。

「な。」

何だと……、障壁が破られるのは問題ない力の差というのもおこがましいほどの差があるのだ破られる自体は問題ない。

だが、気も魔力も使わずに破っただと？

……どういうことだ、いくら力の差があるといっても強化せずに破れるほど柔な障壁ではなかったぞ。

私とて単純な筋力であれを破れるか……。いくら吸血鬼だからといって限度がある。だというのに奴はまるで紙でも裂くかのようにあれを突破した。

む、考え込んでいるうちに終わってしまったようだな。

障壁があっさり破られてパニックしているところに、あの拘束魔法か？をかけられてそのまま叩きつけられたか。

あの魔法も見た事がないな、こちらは魔力を纏ってはいるが…。

ふふふ、これは今日にでも接触してみるか。

先ほど私を確認してもこれといったアクションを起こしてないところを見ると知らないか頭の固い魔法使いとは違うか。

ならば早速。

「おい、タカミチ。」

視点は主人公に

(sideマミ)

あちゃー、やりすぎちゃったかしら？それに障壁を素手で碎いたのも大丈夫かな？

「マミ君、やり過ぎん様にと言ったじゃろつに。だれか彼に治癒魔



法を。」

「すみません。拘束して押し倒すだけで済ますつもりが……。」「向きが悪かったわね。そのまま頭をたたきつけるようになってしまった。」

「おほん！少しアクシデントがあつたが、これで彼女の腕は分かつたじやろう。少々手加減が不慣れなようじゃかなそこは皆が教えてあげてくれ。それではこれで解散。」

「わざわざありがとうございます。」

学園長が解散を告げると皆は帰路に着いた。彼にも一言謝っておかないとね、どうやら気がついたみたいだし。

「すみません。少し力みすぎたようで。」

「ははは、今度は気をつけてくださいよ？でも、僕ももう少し修行しないとなあ。ここまであつさり負けちゃうとは思わなかつたよ。」「すみません、もう少し自重します……。」

「もう頭の痛みも引きましたし、大丈夫ですよ。それに、これからよろしく願います。」

「はい、よろしく願います。」

そのあと周りの人と2、3話して帰路につこうとした時に。

「マミ君、このあと時間空いてるかな？」

タカミチ君が呼び止めてきたけれどどうしたのだろう？

「はい、あいていますが何か？」

「家へ送っていくがてら学園を案内しようと思つてね。＜紹介しておきたい人がいまして、マミさんもあつて損はないと思いますよ。」

>

「ありがとうございます。それじゃあよろしく願いますね。＜紹介したい人？分かつたはとりあえず会つてみましょう。」

「それじゃあ、行こうか。＜ありがとうございます。」

それからタカミチ君に案内されて着いた先は、学園の市街地より少

し離れた森の中のログハウス風の家だった。

(なにか、覚えがあるような?)

着いた家になんとなく見覚えがあるなと思っていると。

「エヴァ、もう帰ってきているかい?」

ああ、エヴァンジェリン邸か。あつて欲しい人つてエヴァなのね。しばらくして中から声が聞こえて。

「開いている、入って来い。」

無用心だなあ、まだ茶々丸はいないのかな? ファンシーな内装の家の中にはエヴァが1人でお茶を飲んでいた。

「こんばんは。」

「ふふ、よく来たな。色々聞きたい事はあるが単刀直入に言おう。貴様何者だ?」

「それはさつき…。」

「私が聞きたいのは表の履歴ではない。タカミチからある程度は聞いているが、さっきの試合を見てな。貴様、気も魔力も使わずに障壁を破っただろう?」

「やっぱりばれてる…。」

「もう一度聞こう貴様は何者だ?」

ん、彼女に話しても問題はないか。言いふらす様な人じゃないだろうし。

「いいけれど、少し時間がかかってしまうわよ?」

「ふむ、そうだな。それに貴様の事だけ聞くのもフェアじゃないな。」

「

「それならエヴァあの中で話したらどうだい? あそこなら時間は問題ないだろう。それに聞いて欲しい事もあるからね。」

あそこ? なんだったかな、確か修行に便利なアイテムが確かそんな感じだったよな。

「そうだな、最近まで貴様が使っていたからすぐに出せるだろう。」

その代りに手伝えよ。」

「分かってるよ、その代りに1つ聞いて欲しい事があるんだ。マミ

さんごつちです。」

話しながら奥に進んでいく二人を追って家の地下に入ってしまった。

その数分後、目的のアイテムが何だったのかを思い出した。

「すごいわねえ。」

「ふははは、そうだろうそうだろう。」

「時間が短いものはそれなりに有ったりしますけどこれほどの物は  
そうそう製作できませんからね。」

これこれ、いいなあ。普通なら寿命とかで使いにくいだろうけれど、  
私だと大丈夫そうだからなあ。修行用に貸してくれないかしら？ち  
よっと交渉してみましようか。

「さあ、ここなら時間に関係なく話すことができるぞ。貴様もどう  
せまともな人間じゃないんだろう？老化などは関係ない。」

「いや、僕は関係あるよ。」

「いいけれど条件が一つあるわ。」

「ほう、なんだ？」

「ここを修行用に貸して欲しいの。」  
さてどうか。

「なんだ、まだ強くなるうというのか？それに貴様の情報と私の情  
報で等価だ。ここを貸す対価にならんよ。」

「いいえ、あなたの情報は要らないわ。」

「なに。」

「あなたの情報は調べればそれなりにでてくるわ。それにタカミチ  
君に聞いてもいいしね。」

「それはお前の情報もそうだろう。」

「いいえ、私の情報は連合傘下のここではまず手に入らないわ。タ  
カミチ君も私のことをそこまで詳しくは知ってないものね。」

「確かに僕も知らないことはありますね。」

ここに来る前に連合内で出回っている書籍だと私のことがほとんど

書いてないのは確認済み！……なんだろう悲しくなってきた。

「私はあなたとはお友達になれればそれでいいわ。だからあなたの過去を急いで知る必要もないしね。」

「ふはははは、私のことを知っていてお友達か。だがその友達は相手の事を知らなくていいなんて言うのか？」

ぐ…、痛いところを。ちよつと言葉を間違えただけじゃない！

「ふふ、気に入った。だがそれでもまだ対価には足りんぞ？私もゆつくりと調べればいいのだからな。」

そうなるわよねえ。じゃあ。

「じゃあ、私の血はどう？大量にはあげられないし、眷属にするのも無しだけれどね。」

「ほう。」

「ちよ！マミさん！」

ここは修行をするにはうつつつけの場所。闇の帝王に勝つために絶対に必要だ。そのためならこれくらいは全然問題ない！

「ふむ、その場限りの嘘というわけではないな。何か決意もしているか…。」

どうだ？

「いいだろう。その条件で飲んでやろう。ああ、お前の情報は追々話してもらうことにしよう。楽しみは後にとっておこう。」

ふう、よかった。でも、心配があるとすれば彼女の牙が私の肌に刺さるのかと光子力が混じってそんな私の血を吸血鬼が飲んで大丈夫なのかって事よね。

「マミさん良かったのですか？エヴァはむやみに殺人などをしないとはいえ。」

「ええ、問題ないわ。それにここで修行する事は絶対に必要よ。」

「それはやっぱり。」

「今度全部話すわ。」

「はい。」

けれど話をしないってことはこの後どうしよう。

「おい、何こそこそ喋っている。」

「いえ、なんでもないわ。それよりこの後どうするの？確か24時間たたないと出られないのよね。」

「ふむ、そうだな貴様の体のことを聞いてもいいが…、おいタカミチ。」

「なんだい？」

「こいつと戦え。もちろん全力だぞ。」

ええ！何でそうなるの！！

「ちよつと。」

「貴様から直接聞いてもいいがもう一度自分の目で見てみたくな。それにさっきの様なヘツポコでなく、こいつなら貴様も思う存分戦えるだろう。」

「はは、マミさんの全力は見せれないだろうけど、エヴァを楽しませるくらいはできるよ。」

「タカミチ君まで。」

「お願いします、僕がどれだけ強くなったか見てください。」

ふう、そんな顔で言われたら断れないわね。物凄く男前っていうのかな？そんな顔だものね。前世では縁がなかったわねえ

「分かったわ、その勝負受けてたつわ。」

「ありがとうございます。それと一つお願いがあるのですが。」

「なに？」

「あなたを揺るがせたら。君付けじゃなくて呼び捨てで呼んでください。何時までもタカミチ君だと子供みたいで。」

「成長したところを見て欲しいと、分かったわ。そう感じたらそうするわ、判定はエヴァンジェリンさんにも頼むわね。」

「仕方ない。それと私の名はエヴァでかまわん。」

「ありがとうございます。」

じゃあ、タカミチ君が死なないようにしながら全力でいきますか。



まず牽制に速度を重視した物を連続で打ち込み目くらましと少しでも牽制になればと思いつつより多くの力をためてようとしたが。

「咸卦法できるようになったんだ。これはうかうかしてられないわね。」

攻撃でできた砂塵を突破して現れた彼女は無傷ですでに腕を振りかぶっていた。

「くー！」

力を練るのを中断し瞬動術で一気に離脱した直後。

ドゴオ！！

一瞬前までいた地点が粉碎された。まさに破城槌の一撃だ、手加減しているんだろうけど。一発当たればそれで終わりだな。

「瞬動もうまくなつたわね。気や魔力が使えない身としてはちょっとうらやましいな。」

「その身体能力で使えたらさらに手に負えませんよ！」

「そうねだからこそ

ボ！

うかうかしてられない。」

まずい後ろに。迎撃を。

「はあ！」

「させない、ルストハリケーン！」

凄まじい強風が発生し無理に後ろを振り向こうとした僕は吹き飛ばされた。

「くー！」

虚空瞬動で体勢を立て直すと同時に距離を離れたけれど、この距離もどれだけ意味があるか。

瞬動が使えなくてもあの脚力と足裏から何か力を噴出しての移動方で瞬動並みに動けるんだから十分な気もしますよ。

「さあ、どんどんいくわよ。」「ドン！」

「く！」

その後も戦いは続いたが力の練があまり豪殺 居合い拳じゃ牽制に  
しかならない。逆に僕のほうはあの銃召喚でゴム弾を撃ち込まれて  
怯んだところを攻撃されて何度ヒヤツとしたか。何とかして最大威  
力のモノを叩き込まないと。

「強くなったわね。もっと修行すればまだまだ強くなると思うわ。  
じゃあ、終わりにするわよ。」ドン！  
賭けになってしまっけれどこれしかないかな…。

パン！パパン！

牽制射をしっかりと避けて。

ドン！

2回目の加速をしたマミさんが目の前に周りには銃が待機していて、  
避けたところを吹き飛ばして一斉所かな…。繰り出される拳はここ  
まで来るのに余った速度も加わるだろうから凄まじいモノだろう。  
僕に耐えられるか分からない、耐えられたとしても攻撃に移れるか  
…。

でも、逃げてばかりじゃられない！

「はあ！」

「最大防御！！！」

ドグウ！

「グウウ…！」

く、防御に全力を出してもこの衝撃…。でも、何とか耐えた意識も  
すっかりある。マミさんは…、驚いている。これなら間に合うかな。  
ありったけの力を拳に練り上げ居合い拳を放った。本来の居合い拳  
の間合いじゃない。実際に居合い拳というより全力で殴ったって方  
があっているだろう。

でも、そんなのは関係ない！これだけの速度で殴るんだこれが当た  
ればいくらマミさんでも…。この至近距離じゃ避ける事もできない！  
ドゴン…！！



「ぐあー！」

「ぐー！」

予想はしていたけれどまるで鋼鉄の塊を殴ったみたいだ。でも、マ  
ミさんもうめき声を動きも止まってるし、これなら！二発目も！

「今の一撃は効いたわ、ロケットパンチ！」

振りかぶった方とは逆の腕を腹に当てられて。予備動作もなく強烈  
な衝撃を感じてそのまま壁に僕は突っ込んだ。

霞む視界に彼女の元に戻っていく腕を見て、そういえばこんな技？  
も持ってたなあと他人事のように思っていると彼女から。

「はあ、無茶すぎよ。下手したら腕使い物にならなくなってるか  
もしれないのよ？」

はは、確かにそうですね。でも、これくらいしなないとあなた達には。  
ぐ、意識もだんだん薄れて。

「でも、本当に。本当に強くなったわね。タカミチ。」

薄れ行く意識の中でそんな言葉が聞こえてきて。僕は確認を取る前  
に意識を手放した。

(sideエヴァ)

確かに最強格だという事は分かったが。それ以上にこいつの身体は  
どうなっているんだ？防御力といい最後は腕が飛んだぞ？

「ふう、エヴァ。彼の治癒頼める？私は魔法が使えないから。」

「そうだな、魔法薬があるから大丈夫だろう。代金は奴からもらっ  
ておこう。」

殴った手もボロボロだな。全く無茶をする。

「最後はああ言ったけれどエヴァから見てタカミチはどうだった？」

「よくやったんじゃないか？奴に出せる全力だっただろうし、お前  
も最後の二撃で落ちると思っていたのだろう。」

「受けれるとも思ってなかったわよ。だから防御に回ったときはヒ  
ヤツとしたわ。」

「それは奴を見くびりすぎだな。だが、今の奴にあれが受け切れるかも五分五分だったろうからな。いいんじゃないか？」

「ふふ、ありがとう。それにしてもこここんなに破壊しちゃったけれど大丈夫なの？」

確かに派手にやってくれたな。

「問題ない。ここの建造物などは魔力で構成されているからな。放つて置けばじきに直る。もっとも逆に魔力が流出するなりして枯渇すると崩壊してしまうがな。」

下手糞な奴が作るとあつという間に崩壊してしまうからこの手の擬似異界製造の技術は難しいのだがな。

「そうなの、便利なものねえ。」

「さて、タカミチの治療をするか。その後にお前の血をもらうぞ。私に手間をかけるんだ多めに貰うぞ。」

「呑みすぎないでね。」

さてどんな味がするか。それに体のことも少し聞いてみるか。

ちなみに牙は問題なく刺さり、毒でもなかったようだ。

味はすごく旨いが不思議な味らしい。

## 顔見せと腕試しと模擬戦と（後書き）

戦闘描写難しいよう…。

まだ原作5年前なのでタカミチは原作時点よりちょっと弱目って事で。

エヴァの口調や性格もこれで大丈夫かな？ナギの生存も教えるか教えないか…。

ついでに主人公の原作知識は結構あやふやです。現時点でも忘れていたりことや勘違いしている事も多いです。今回はネギが飛び級して9歳で来るって事を忘れてます。なので7年後と。

小ネタコーナー

エヴァ（以下エ）「さあ、血を飲ませてもらうぞー！」

マミ（以下マ）「あんまり呑まないでね？（牙刺さるのかしら？）」

エ「けちけちするな。では早速。」かぷ！

マ「ん。（刺さるんだ、でもなんだかむず痒い感じが。）」

エ「チューチュー、ぷは！ふむ。」

マ「どうだったの？」

エ「旨いんだが、なんとも言えん味だな。」

マ「まずいつて事？」

エ「いや旨い、がそうだな癖が強いといった感じか？そうだなまるで……」

以下エヴァの味についての意見が続いた。

分かった事は私の血が御気に召したのとエヴァがかなりグルメって事だ。

次回予告「麻帆良の日々」

今回は短編の細かい話を何個かって感じにしてみたいと思います。  
2〜3年ほど時間を進めるので。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4745x/>

---

真ネギま マギカZ

2011年11月10日09時21分発行